
蓮 田 市

堂 山 公 園 ／ 久 台

国道 122 号線バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告

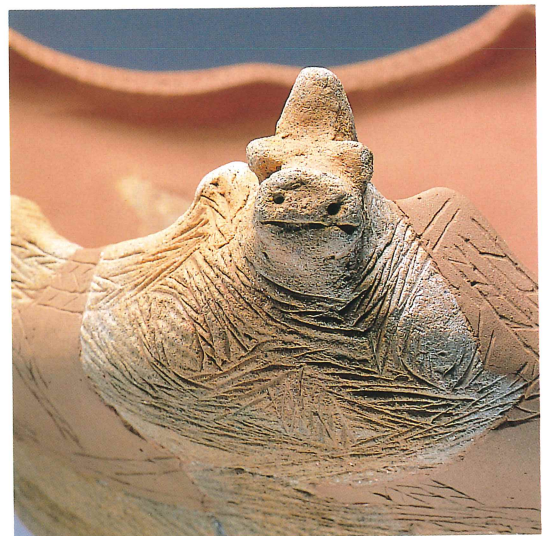
— VI —

1 9 9 5

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



堂山公園・久台遺跡遠景



堂山公園遺跡 遺構外出土土器

序

埼玉県では高速道路網の整備促進、国道や主要県道のバイパス整備などにより県内1時間道路網構想を目標とした道路整備を行っています。

国道122号線においては、バイパス整備等により4車線化を進め、国道の機能強化を図っているところですが、蓮田市内建設予定地には埋蔵文化財包蔵地が存在し、すでに路線内では7か所の遺跡発掘調査が実施されて、「国道122号線バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書」としてⅠ～Ⅴの5冊が刊行されました。

蓮田市の周辺は、「黒浜式土器」や「関山式土器」の標式遺跡として有名な黒浜貝塚、関山貝塚をはじめ、縄文時代の遺跡が数多く知られております。路線内においても後期の集落跡である久台遺跡、晩期の資料が多く発見されたささらⅡ遺跡など、縄文時代の様子を伝える遺跡が報告されております。

今回報告する堂山公園遺跡は、縄文時代前期を中心とした遺跡であります。久台遺跡は、すでに報告がされている縄文時代後期集落跡の北側を調査したものであります。これらの発掘調査の結果、堂山公園遺跡が

らは縄文時代前期の住居跡が2軒発掘されるなど、縄文時代早期、前期の遺構や縄文時代各時期の遺物が検出されました。

本書はこれらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発及び教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力下さいました埼玉県土木部道路建設課、同杉戸土木事務所及び蓮田市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成7年10月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井 桂

例 言

- 1 本書は下記の遺跡の発掘調査報告書である。
堂山公園遺跡（DYKN）
所在地：蓮田市上2丁目29番地他
教育長通知
平成6年5月17日付け 教文第2-31号
遺跡コード番号：82-079
久台遺跡（KYD）
所在地：蓮田市東2丁目4104-1番地他
教育長通知
平成6年5月17日付け 教文第2-22号
遺跡コード番号：82-010
- 2 発掘調査は一般国道122号バイパス建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託により、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 3 発掘調査は赤熊浩一、渡辺清志が担当して、平成6年4月1日から平成6年7月31日まで実施した。
- 整理報告書作成作業は新屋雅明が担当し、平成7年4月1日から平成7年7月31日まで行った。
- 4 遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社ムサシノ、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に委託した。
- 5 写真撮影は発掘調査時の撮影を赤熊、渡辺が行い、遺物写真を新屋が行った。
- 6 出土品の整理および図版の作成は新屋、渡辺、大屋道則が行った。本書の執筆はⅠ-Ⅰを埼玉県生涯学習部文化財保護課が、Ⅱを新屋が、Ⅲ～Ⅴを渡辺が、近世の遺物について大屋が行った。
- 7 本書の編集は、資料部資料整理第1課の新屋が行った。
- 8 本書にかかる資料は平成7年以降県立埋蔵文化財センターが保管する。
- 9 本書の作成にあたり下記の方々から御教示、御協力を賜った。
田中和之 小宮雪晴 平田重之 蓮田市教育委員会

凡 例

- 1 X・Y座標による表示は、国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
- 2 縮尺は全測図を1：300、住居跡・炉穴・土坑を1：60、溝を1：150、縄文土器実測図を1：4、拓影図を1：2、石器を2：3、1：2、1：4、近世の遺物を1：2、1：3で示した。
- 3 全測図等を示す遺構の略号は以下のとおりである。
住居跡＝S J 炉穴＝F P 土坑＝S K 溝＝S D
- 4 遺構平面図中の網かけは焼土の範囲を示した。

目次

口絵	(1) 住居跡	10
序	(2) 炉穴	15
例言	(3) 土坑	18
凡例	(4) 遺構外出土遺物	22
目次	3 近世以降の遺構と遺物	40
I 調査の概要	IV 久台遺跡	44
1 調査に至る経過	1 概略	44
2 発掘調査報告書作成の経過	2 縄文時代の遺構と遺物	46
3 発掘調査整理報告書刊行の組織	(1) 土坑	46
II 立地と環境	(2) 遺構外出土遺物	47
III 堂山公園遺跡	3 平安時代の遺構と遺物	48
1 概略	4 近世以降の遺構と遺物	49
2 縄文時代の遺構と遺物	V 結語	54

表 目 次

第1表 遺構外出土石器観察表	39
----------------------	----

挿 図 目 次

第1図 埼玉の地形	4
第2図 周辺の関連遺跡	5
第3図 遺跡位置図	7
堂 山 公 園 遺 跡	
第4図 堂山公園遺跡全測図	9
—縄文時代—	
第5図 第1号住居跡	11
第6図 第1号住居跡出土遺物(1)	12
第7図 第1号住居跡出土遺物(2)	13
第8図 第2号住居跡	14
第9図 第2号住居跡出土遺物(1)	15
第10図 第2号住居跡出土遺物(2)	16
第11図 第2号住居跡出土遺物(3)	17
第12図 炉穴	19
第13図 炉穴出土遺物	20
第14図 土坑	21
第15図 土坑出土遺物	21
第16図 遺構外出土遺物(1)	24
第17図 遺構外出土遺物(2)	25
第18図 遺構外出土遺物(3)	26
第19図 遺構外出土遺物(4)	27
第20図 遺構外出土遺物(5)	28
第21図 遺構外出土遺物(6)	31
第22図 遺構外出土遺物(7)	32
第23図 遺構外出土遺物(8)	33

第24図 遺構外出土遺物(9)	34
第25図 遺構外出土遺物(10)	35
第26図 遺構外出土遺物(11)	36
第27図 遺構外出土遺物(12)	37
第28図 遺構外出土遺物(13)	38
—近世—	
第29図 土坑	40
第30図 溝(1)	41
第31図 溝(2)	42
第32図 柱穴群	42
第33図 近世以降の遺物	43
久 台 遺 跡	
第34図 久台遺跡調査区位置図	45
第35図 久台遺跡全測図	46
—縄文時代—	
第36図 土坑	47
第37図 土坑・遺構外出土遺物	47
—平安時代・近世—	
第38図 平安時代の遺構	48
第39図 土坑	49
第40図 溝(1)	50
第41図 溝(2)	51
第42図 近世以降の遺物(1)	52
第43図 近世以降の遺物(2)	53

図版目次

- 図版1 堂山公園・久台遺跡航空写真（南西から）
堂山公園・久台遺跡航空写真（南東から）

堂 山 公 園 遺 跡

- 図版2 堂山公園遺跡航空写真（西から）
堂山公園遺跡航空写真（南から）

- 図版3 第1号住居跡
第1号住居跡遺物出土状況
第1号住居跡炉跡

- 図版4 第2号住居跡
第6号土坑

第9号土坑

第2号炉穴

第3号炉穴

第5号炉穴

- 図版5 第3号土坑
第4号土坑

第1～4号溝（東から）

第1号溝（北から）

第1～4号溝（西から）

第5号溝

- 図版6 第1号住居跡出土土器
第2号住居跡出土土器
遺構外出土土器

- 図版7 第1号住居跡出土土器
第2号住居跡出土土器

- 図版8 炉穴・土坑出土土器
遺構外出土土器

- 図版9 遺構外出土土器

- 図版10 遺構外出土土器

- 図版11 遺構外出土土器

- 図版12 遺構外出土土器

- 図版13 遺構外出土土器

久 台 遺 跡

- 図版14 久台遺跡発掘区全景

第17号住居跡

第28号住居跡状遺構

第6号土坑

第8・9号土坑

- 図版15 第61号土坑

III区第5号溝

III区第3号溝

III区第3・5号溝

III区第6号溝

III区第7号溝

- 図版16 縄文時代の遺物
近世以降の遺物

I 調査の概要

1 調査に至る経過

東北縦貫自動車道の開通に伴い一般国道122号線の交通量は一段と増加した。特に蓮田市内においては渋滞が著しく、交通量緩和の対策が要望されている。

埼玉県では、このような状況に対処するため、一般国道122号線蓮田市内のバイパス建設を計画した。道路建設などの開発事業にたいして、文化財保護課では、文化財の保護に支障がないよう事前に連絡調査を密に実施している。

昭和50年10月29日付け道建第543号をもって「一般国道122号（蓮田市）建設予定地内の埋蔵文化財の所在について」、道路建設課長から文化財保護課長へ照会がなされた。文化財保護課では遺跡地図と照会した結果、昭和51年2月4日付け教文第960号をもって概ね下記のとおり回答した。

①建設予定地内には現在7箇所の周知遺跡が存在する。

1. 蓮田市No.24遺跡
2. 蓮田市No.16遺跡
3. 蓮田市No.20遺跡
4. 蓮田市No.10遺跡
5. 蓮田市No.11遺跡
6. 蓮田市No.4遺跡
7. 蓮田市No.3遺跡

②詳細については、さらに現地調査を実施する必要があること。

その後、文化財保護課と道路建設課では現地確認を含めた調査を行いながら、これらの遺跡の取扱いについての協議を重ねた結果、路線変更が困難であるために、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することが決定した。

この決定を受けて、道路建設課長から昭和54年4月19日付け、道建第120号をもって「一般国道122号（蓮田市地内）道路改良事業区域内における埋蔵文化財発掘調査について」協議がなされた。文化財保護課では、昭和54年10月1日付け教文第704号により、調査の期

間、範囲、経費と文化財保護課が直営で実施することを回答した。

法的手続きを終了した後、昭和54年11月からNo.7遺跡の調査を実施し、以後、順次発掘調査を実施していった。

また昭和55年度からは、増大する公共事業に対処するために設立された財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査が引き継がれた。

本書で報告する堂山公園遺跡は平成6年に発掘調査を実施した遺跡であり、埼玉県教育委員会教育長名にて平成6年5月17日付け教文第2-31号をもって発掘調査届を受理した旨の通知がなされた。

また久台遺跡は、既に昭和57年1月から7月にかけて発掘調査が実施され、その成果については埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第36集として公にされたところであるが、一部、用地の関係で未調査区域が残った。今回、この問題が解決して平成6年4月から7月にかけて隣接する堂山公園遺跡と共に発掘調査が実施され、埼玉県教育委員会教育長名にて平成6年5月17日付け教文第2-22号をもって発掘調査届を受理した旨の通知がなされた。

2 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成6年4月1日から7月31日までの4か月間にわたって実施された。調査対象区面積は堂山公園遺跡が2500㎡、久台遺跡が800㎡である。

4月上旬。杉戸土木事務所担当者と現地にて打ち合わせを行う。プレハブの設置、囲柵・防塵ネット付設、補助員募集など調査の準備を行う。

4月中旬。久台遺跡の表土掘削を重機によって開始する。溝、土坑などが確認された。

4月下旬。堂山公園遺跡の表土掘削を開始する。久台遺跡は補助員による遺構の精査作業を開始する。精査後、遺構の調査に着手する。溝、土坑などの調査を行う。土坑から縄文時代晩期の土器片、近世の遺物が検出された。また近世の遺物は溝からも検出された。これらの遺物の取り上げ、遺構の土層断面図作成を順次進めた。

また4月から5月の作業に並行して方眼杭の設置を行った。グリッドは10mとして堂山公園遺跡の北西の隅を1Aグリッドとし、北から南へABC……、西から東へ123……と名称を付けた。

5月上旬。久台遺跡の遺構平面図作成、写真撮影等を主として行う。堂山公園遺跡の重機による掘削を引き続き行う。JR宇都宮線の線路南側部分については精査を行うものの、攪乱が著しく、遺構の検出はなかった。重機を線路の北側に回送して掘削作業を行う。

5月中旬～下旬。久台遺跡の調査を完了する。調査の主体は堂山公園遺跡の線路北側部分に移る。精査後、遺構の調査に移行する。住居跡、炉跡、土坑、溝が確認され、遺構外にも縄文土器が分布する状況を確認する。

6月。堂山公園遺跡の遺構の調査を行う。住居跡、炉穴、土坑、溝をそれぞれ発掘し、遺物の取り上げ、土層断面図作成、写真撮影、平面図作成等の作業を行う。炉穴からは縄文時代早期の条痕文土器、土坑からは縄文時代前期の土器が主体的に出土した。第1号住居跡の床面からは縄文時代前期の深鉢形土器が検出された。第2号住居跡からはやはり前期の土器が主として出土した。遺構外からも縄文時代早・前期の土器のほか中期～晩期の土器片も少量ながら出土した。溝からは近世の遺物が検出された。

7月上旬。平面図作成を主として行う。

7月中旬。堂山公園遺跡の調査がほぼ終了に向う。空撮のための清掃を行い、航空写真撮影を行う。

7月下旬。平面図作成等の作業をすべて終了する。図面、器材等の搬出を行う。事務所等の設備の撤去を行い、発掘調査事業の全行程を終了する。

整理作業

平成7年4月1日から7月31日の4か月間にわたって実施した。

4月は出土遺物の水洗い、注記、接合作業を行った。同時に図面、写真類の整理を行った。

5月は遺構の第2原図の作成を行い、トレースに着手した。遺物は接合・復元後、時期毎に分類して拓本、実測作業を行った。

6月は遺構図の版組作業、遺物のトレース作業、遺物の写真撮影を行った。また原稿の執筆も行った。

7月は遺物の版組、写真図版作成に並行して、原稿執筆・割付の作成を行った。入稿後校正作業を行い、10月に報告書を刊行した。

3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

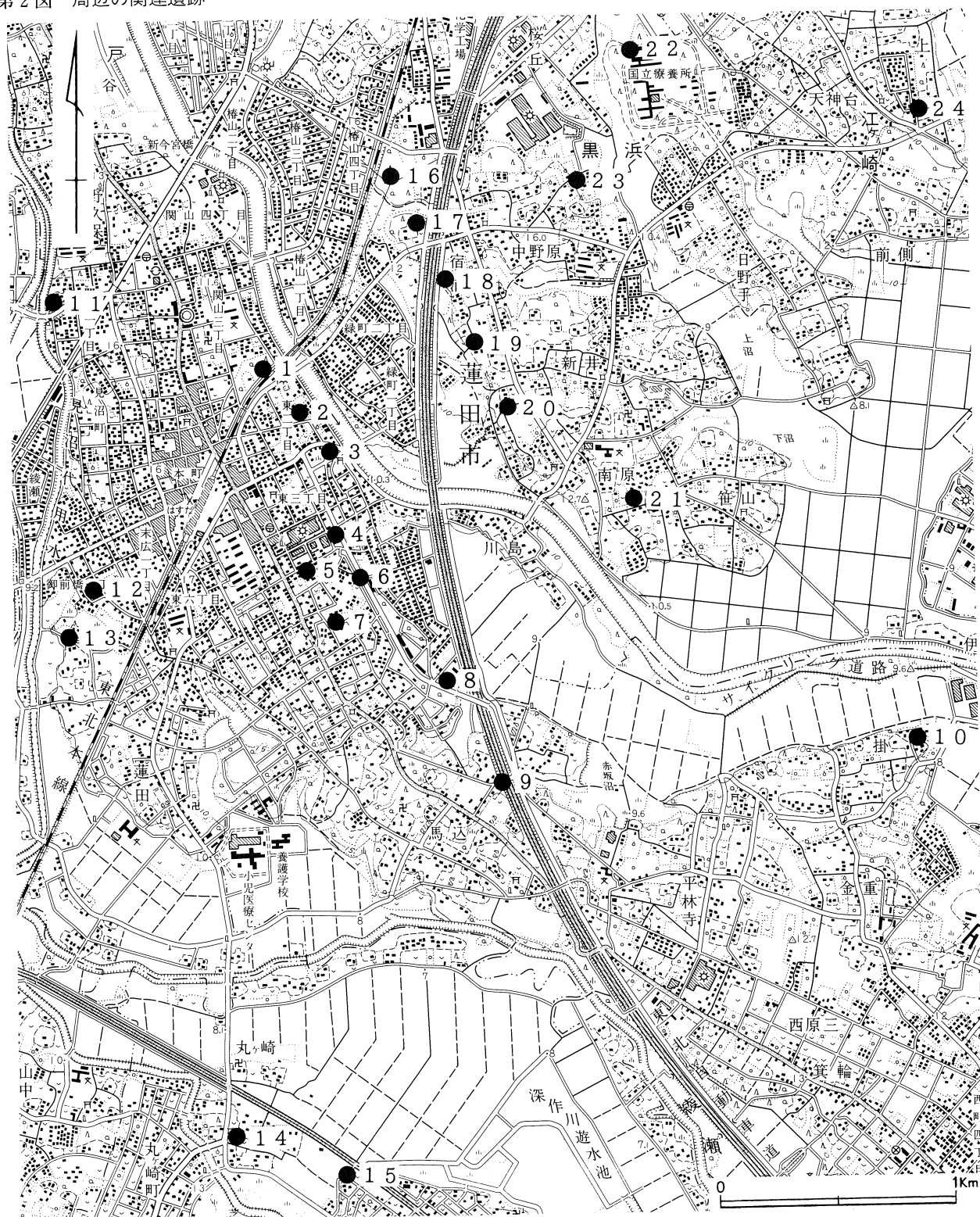
(1) 発掘調査（平成6年度）

理事長	荒井 桂
副理事長	富田真也
専務理事	枋原嗣雄
常務理事兼管理部長	加藤敏昭
理事兼調査部長	小川良祐
管理部	
庶務課長	及川孝之
主査	市川有三
主事	長滝美智子
主事	菊池 久
専門調査員兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
調査部	
調査部副部長	高橋一夫
調査第一課長	坂野和信
主任調査員	赤熊浩一
調査員	渡辺清志

(2) 整理事業（平成7年度）

理事長	荒井 桂
副理事長	富田真也
専務理事	吉川國男
常務理事兼管理部長	新井秀直
理事兼調査部長	小川良祐
管理部	
庶務課長	及川孝之
主査	市川有三
主任	長滝美智子
主事	菊池 久
専門調査員兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
資料部	
資料部長	塩野 博
主幹兼資料部副部長	
兼資料整理第一課長	谷井 彪
主任調査員	新屋雅明

第2図 周辺の関連遺跡



- | | | | | | | |
|----------|-----------|-----------|---------|----------|----------|----------|
| 1 堂山公園遺跡 | 2 久台遺跡 | 3 ささらⅡ遺跡 | 4 ささら遺跡 | 5 馬込八番遺跡 | 6 帆立遺跡 | 7 帆立山遺跡 |
| 8 馬込大原遺跡 | 9 馬込遺跡 | 10 掛貝塚 | 11 関山貝塚 | 12 宮の前遺跡 | 13 八幡溜遺跡 | 14 丸ヶ崎遺跡 |
| 15 貝崎貝塚 | 16 椿山遺跡 | 17 炭釜屋敷貝塚 | 18 宿上遺跡 | 19 宿下遺跡 | 20 天神前遺跡 | 21 山の内遺跡 |
| 22 雅楽谷遺跡 | 23 亀の子山遺跡 | 24 江ヶ崎貝塚 | | | | |

おきたい。

堂山公園・久台遺跡と同じ元荒川沿岸の岩槻支台にはささら遺跡、馬込八番遺跡、帆立遺跡、帆立山遺跡、馬込大原遺跡、馬込遺跡などが既報告の遺跡として知られている（第2図1～10）。

ささら遺跡では、後期初頭の土坑群が発掘されている。また、早期の条痕文系土器群がまとまって出土している（藤原他1983）。ささらII遺跡では晩期の包含層の堆積が確認されており、土器、土製品、石器等が出土している（橋本他1985）。馬込八番遺跡では中期の住居跡10軒、後期の住居跡1軒、中期から後期の土坑82基が発掘されている（寺内1994）。

また下流の岩槻市域には掛貝塚があり、前期の住居跡5軒が発掘されており、黒浜式期から諸磯式期に相当する3つの住居跡において貝層が見つかった（岩槻市1983）。

綾瀬川の谷に面した遺跡として、関山式土器の標式遺跡として知られる関山貝塚がある（庄野1974）。関山式期の住居跡と貝層が発掘されている。関山貝塚の下流にあたる台地上には後期前葉の住居跡が見つかった宮の前遺跡（田中他1992 小宮他1992）、八幡溜遺跡（田中他1992）などがある（第2図11～13）。

綾瀬川対岸の大宮市域には住居跡から関山式期の貝層を検出した貝崎貝塚（下村他1978）、後期前葉の住居跡が発掘された丸ヶ崎遺跡（宮内他1976）などが分布する（第2図14、15）。

一方、元荒川対岸の黒浜支台には前期を中心とする遺跡が分布している。旧石器時代から平安時代にいたる複合遺跡として知られる椿山遺跡や「黒浜貝塚群」として総称される炭釜屋敷貝塚、宿上遺跡、宿下遺跡、天神前遺跡（第2図16～20）が分布している。

椿山遺跡では前期から後期の住居跡12軒が発掘されている。内訳は前期の関山式期5軒、中期の加曽利E式期5軒、後期の堀之内式期2軒である（大塚他1989）。

天神前遺跡では住居跡26軒、土坑39基が発掘されている。早期～後期の遺構が見られるが住居跡は前期中

葉に最も多く、16軒の住居跡が報告されている（田中他1991）。

宿下遺跡は早期末葉から後期初頭の遺物が出土し、第12地点からは前期から後期の住居跡3軒が発掘されているほか、中期の集落跡の存在が知られている（寺内他1991）。

黒浜支台の既報告の遺跡には諸磯a式期の主鹹貝塚として知られる江ヶ崎貝塚（野中1983）、中期を中心とした亀の子山遺跡（寺内1987）、山の内遺跡（寺内他1992）、後晩期を中心とした雅楽谷遺跡などがある（第2図21～24）。

大宮台地における一般的な状況と同様であるが、周辺の縄文時代の遺跡は海進時の前期に集落跡が増加し、その後やや住居跡の数を減少しながらも縄文時代中期後葉から後期前葉にかけて、増加に転じる傾向にあるといえよう。

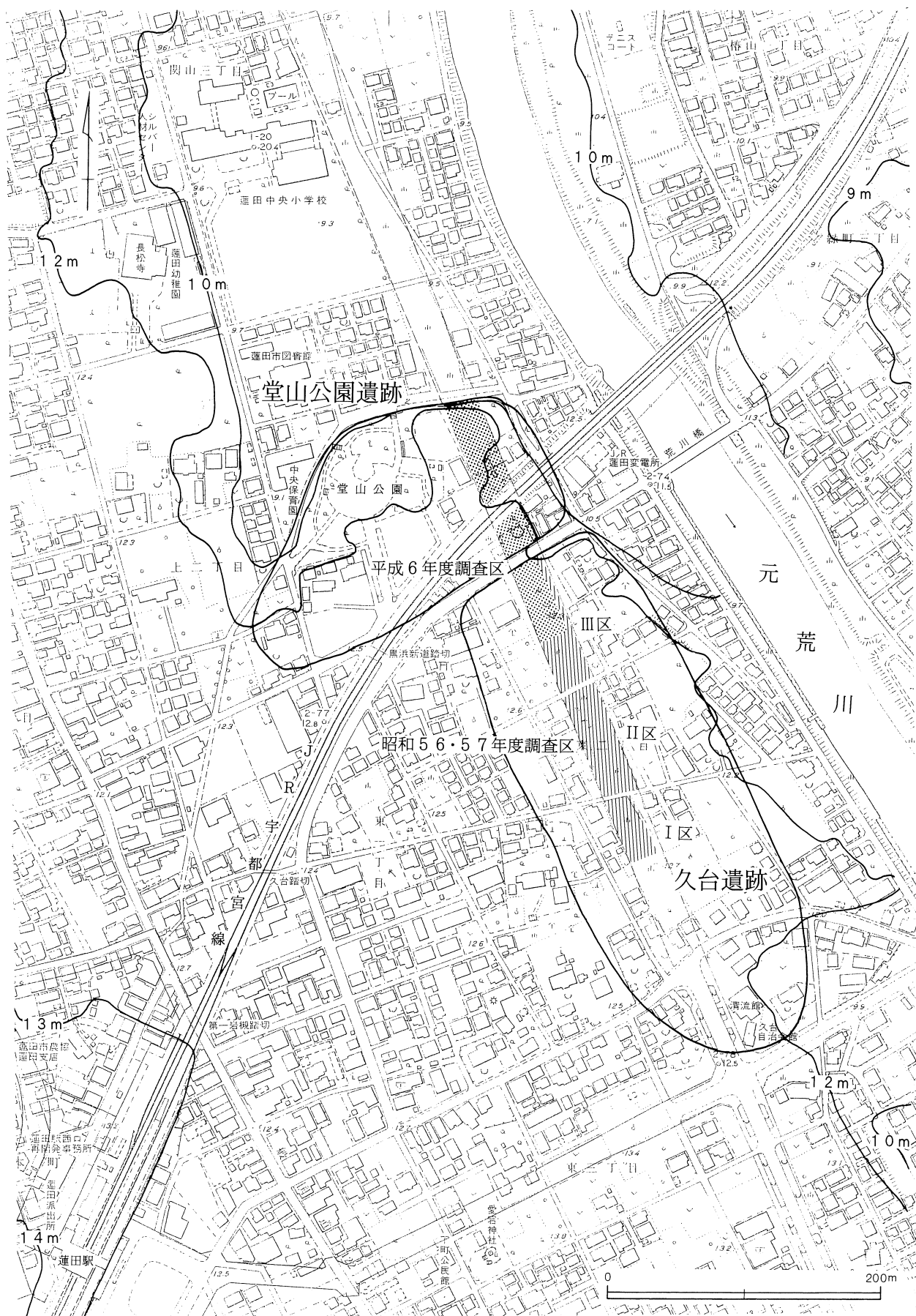
最後に久台遺跡のこれまでの調査についてここでふれておきたい。久台遺跡は昭和57年1月から昭和57年7月まで、国道122号線バイパス建設に先立つ一連の調査の一環として調査が実施され、すでに報告書が刊行されている（橋本1984）。

昭和57年の調査においては南北200mに及ぶ調査区は事業道路に直行する道路を基準として便宜上3分し、南からそれぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と呼称した。今回調査の対象となったのはⅢ区の北西隅で、前回未買収部分のため発掘できなかった約800㎡の部分である。

久台遺跡は後期前葉の称名寺～堀之内1式期の集落跡である。前回の調査により、住居跡が25軒見つかった。この集落跡はⅠ区とⅡ区の南端を中心に展開しており、Ⅲ区には延びていない。今回の調査区でもこの時期の遺構、遺物の検出は認められなかった。

Ⅲ区の前回調査区で平安時代の住居跡、近世以降の遺構が発掘されており、後述するように今回の調査においてもこの時期の遺構が見つかった。

第3図 遺跡位置図



III 堂山公園遺跡

1 概略（第3・4図）

堂山公園遺跡は元荒川に望む台地上に所在し、遺跡の標高は11m前後であった。調査区北端は崖線を経て沖積面に至る。この部分は昭和初年までは元荒川に沿った沼沢地であった。東はやや急峻な斜面を経て元荒川沿いの低地に至り、台地はいくつかの小谷をはさんでさらに南へと延び、南東の緩斜面を経てごく浅い谷地形へと続いている。遺跡はこの台地縁辺に沿って所在し、久台遺跡とは小谷をはさんで対峙している。

今回の発掘調査では周辺の状況から当初縄文時代中・後期の遺構・遺物の検出が見込まれていたが、調査の結果、縄文時代前期諸磯a式期の住居跡2軒と、早期末葉の炉穴7基、前期の土坑7基が発見された。また、遺物包含層中からは縄文時代早期前半から晩期中葉に至る各時期の土器片多数が出土した。

また、近世以降に属する溝5条・土坑4基・柱穴群1カ所が発見され、これらの遺構に伴って陶磁器片などが出土した。

遺跡の基本層序は、次の通りである。

表土層は砂の若干混じる腐食質の黒色土で、厚いところでも30cm前後である。この下に縄文時代の遺物包含層である暗黄褐色土が10～20cmの厚さで広がり、以下若干の漸移層をはさんで、ローム上面にいたる。後述するようにD列以南では暗黄褐色土層はほとんど失われていた。

ローム層は第2黒色帯上面までが風化しており、ほとんど単層である。遺構調査終了後試掘坑を設けてローム層の掘り下げを行ったが、旧石器時代の遺物は見つからなかった。

調査区は、JR宇都宮線の線路をはさんで南北に分断されているが、このうち線路南側の一角は、近現代の墓地・宅地などに伴う攪乱が全面を覆っており、遺構検出もままならない状態であった。このため、調査は線路北側の、現堂山公園裏手の山林部分を中心に行った。

縄文時代の遺構は、A・B・C列を中心とした調査区域北半で比較的密に見つかったが、近世の遺構が集中し、また攪乱による徹底した破壊を被った調査区域南半にも本来縄文時代の遺構・遺物が存在していた可能性は高い。調査区南半で発掘された第1号炉穴は、表土を除去した時点で覆土の大半を失っていた。

調査区北縁の崖下にも同時代の遺物包含層などの存在する可能性を考慮して、2カ所のトレンチ調査を行ったが、いずれの地点でも表土中から若干の遺物を得たものの縄文の包含層以下が削り取られ、比較的新しい時期に地形の改変が行われていることが判明した。このため崖面の調査はそれ以上行わなかった。

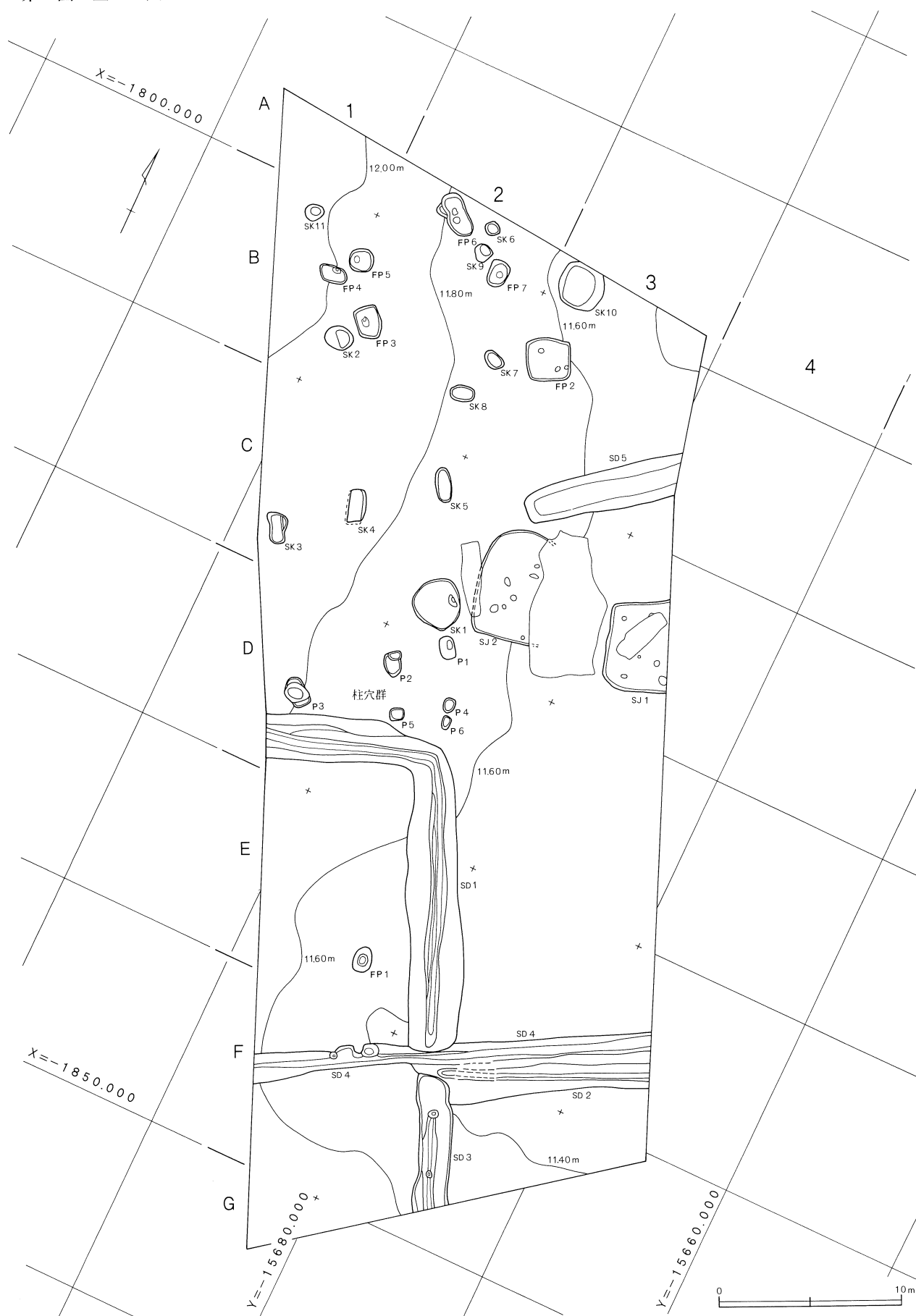
以下、本遺跡で検出された縄文時代の遺構について、時期ごとに概観する。

炉穴は7基が発掘された。楕円形プランの一端に燃烧部をもつ最小単位のタイプが5基、切り合いなし再利用に伴う複合的なものが2基が発見された。

住居跡は2軒が発見され、いずれも時期は前期後半の諸磯a式期で、ほぼ同時期のものと考えられる。攪乱や調査範囲の制約などから、いずれも不完全なかたちでの発掘調査であったが、平面形は隅丸方形であるものと思われた。長軸は北北西を指し、等高線の方角とほぼ平行している。また、長軸北壁寄りに地床炉を持つ点も共通している。

縄文時代の土坑は7基が発掘された。いずれも炉穴と考えて発掘を開始したが、燃烧部が見つからなかったものである。遺物はいずれも前期前半から後半にかけて各時期の土器片が出土しており、土坑そのものも住居跡と大差のない時期のものと考えられる。

第4図 堂山公園遺跡全測図



2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡（第5～7図）

4 Cグリッドに位置する。住居跡東壁が調査区域外にはずれているが、ほぼ隅丸方形を呈するものと思われる。また、床面はほぼ中央部を後世の攪乱により大きく破壊されている。

長径4.8mで短径は不明、深さは0.3mである。主軸方向はN-22°-Wを指す。北壁寄りの2基の柱穴の中間に炉が見つかった。前述の攪乱によって大半を失っているが、径約40cm、深さ約10cmの円形の地床炉であったと推定される。床面上に7基のピットが発見された。うち4基(P 1～4)は主柱穴であると思われるが、P 1は他のピットに比べて極端に浅い。このほか、床面中央部やや南寄りに一対のピットが存在する。

南壁寄りの2基の主柱穴のうちP 2の脇から、胴下半部を欠失する粗製深鉢形土器（第6図）が正位で出土した。位置的には住居跡の床面直上であったが、掘り込みは検出できなかった。また、破損した口縁部破片数点が周辺の床面直上から出土し、接合していることから、いわゆる埋甕とは異なり、住居跡の廃絶時に、床面上に置き去られたものと判断した。

住居跡の時期は床直及び覆土中の遺物から判断して、諸磯a式期と考えられる。

第1号住居跡出土遺物（第6・7図）

第7図1・2は早期末葉の条痕文系土器である。胎土に多量の繊維を含み、内外面に貝殻の条痕が施される。1の表面は粗雑な擦痕状の条痕が施文される。

3～8は胎土に繊維が混入される。無文地に半截竹管状工具による集合沈線が施されるもの（3・5・8）と、ごく粗い縄文のみが施されるもの（4・6・7）が存在する。4・6の原体は付加条の縄文である。以上は前期前半の黒浜式土器と考えられる。

9・10は爪形文が施文される破片で、10は文様帯の下にLR横位回転の縄文が施文される。諸磯a式であ

ろう。

第6図および第7図11～23は縄文のみの破片である。第6図は床面直上で正位に出土した深鉢形土器で、胴下半部を失っている。器形は口縁が外反し、胴上半部でくびれを持つ。口端部は平坦である。

第7図11～23のうち無節の第7図23を除いても単節の斜行縄文であるが、11・12・17・18は0段の縄を3本以上用いた0段多条の縄であると思われる。

第7図24・25は底部である。24は浅鉢形土器で、典型的な0段多条の縄文が施文される。25は無文で研磨され、下端部が軽く張り出している。

これらは胎土や縄文の特徴から、いずれも諸磯a式に属する粗製の土器か、文様意匠の施文されない胴下半部であるものと思われるが、第7図22は諸磯b式である可能性もある。

第2号住居跡（第8～11図）

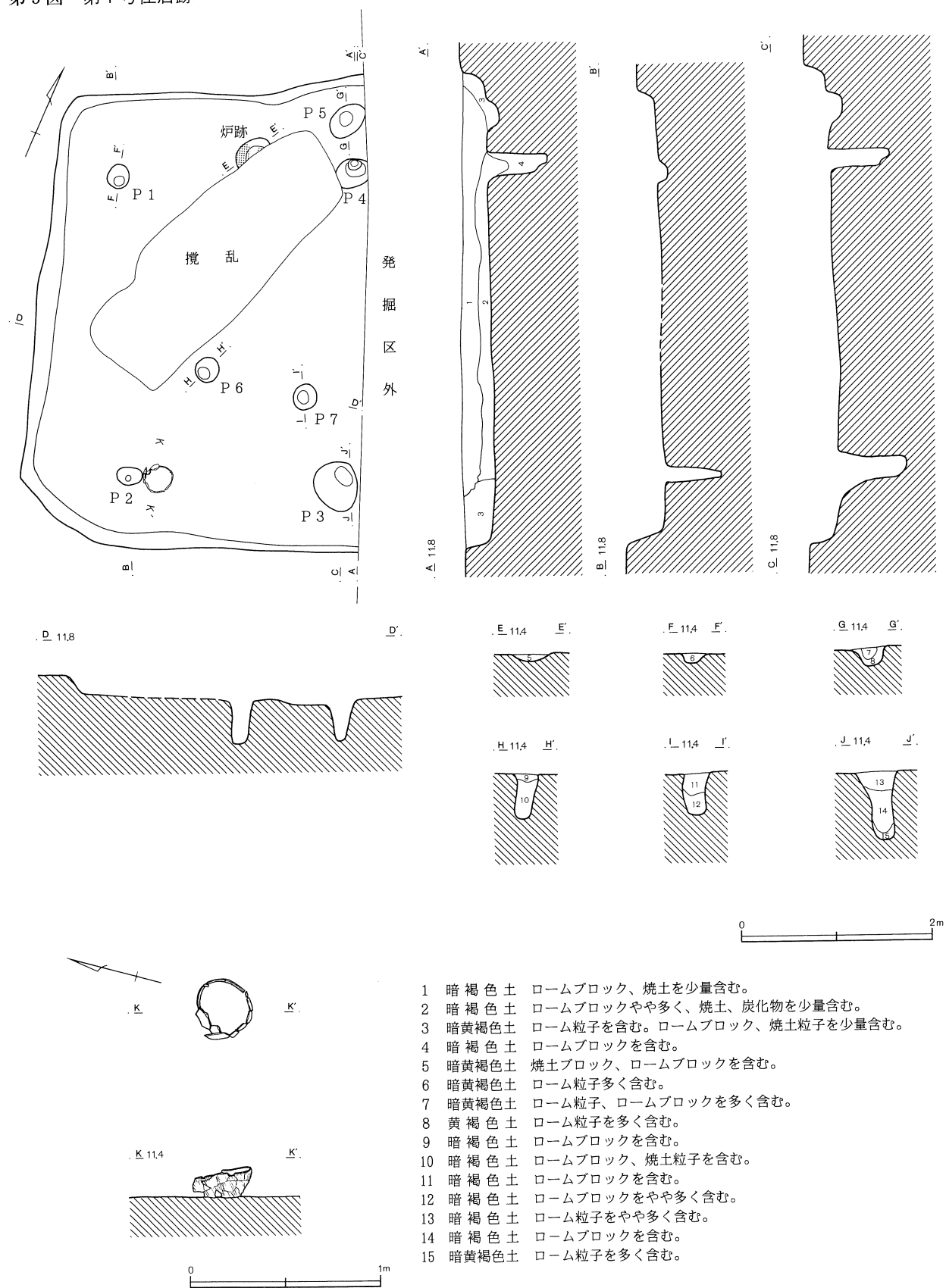
3 Cグリッドに位置する。東西の壁を攪乱により失っているが、やや台形に近い隅丸方形を呈するものと思われる。長径6.4mで短径は不明、深さは0.2mである。主軸方向はN-5°-Wを指す。

床面上の長軸やや北寄りで炉跡1基が検出されている。炉は地床炉で、深さ60cmの袋状に掘り込まれ、開口部で皿状に開く特異な形態である。開口部付近は熱を受けていたが、炉床部はほとんど焼けていなかった。また、掘り込みの内部には多量の焼土ブロックが詰まっていた。

ほかに床面上の施設として6基のピットが存在した。P 1～5が床面中央部付近に不規則に集中する。いずれも規模は貧弱であり、その配置のうえからも主・副柱穴の別は明らかではない。壁溝・壁柱穴は見つからなかった。

覆土は住居跡中央部分の暗褐色土と壁寄りに堆積する黄褐色土の二層に分けられる。いずれも遺物が多数出土した。遺物はほとんどが土器片で、早期末から前

第5図 第1号住居跡



期後半にかけての各時期のものが出土しているが、全体の量的な比率や、復元個体の時期などから判断して、本住居跡は前期諸磯a式期に営まれたものとする。

第2号住居跡出土遺物（第9図～第11図）

第10図1～6は早期末葉の条痕文系土器群である。胎土に多量の繊維を含み、内外面に縦位の条痕文が施文される。4・5は表面に擦痕がみられ、6では幅の狭い単位の条痕を間隔をあけて施文することで、集合沈線的な効果を生んでいる。1は横位の隆帯と、この隆帯の下に沿って幅広の凹線がみられる。内外面に横方向の研磨を施して、地文の条痕を擦り消している。

同図7～10は前期前半の羽状縄文系土器群である。7の原体は正反の合で、0段多条であると思われる。8は同じくRの縄とLの縄を左捻りに捻り合わせたものである。9はループ文が施文される。10は正反の合をさらに捻り合わせた異節の縄文である。

第9図3・第10図11～21は諸磯a式である。半截竹管による平行沈線文が施文され、多くは地文縄文を持つ。図示した縄文の原体は、無節である第9図3を除く

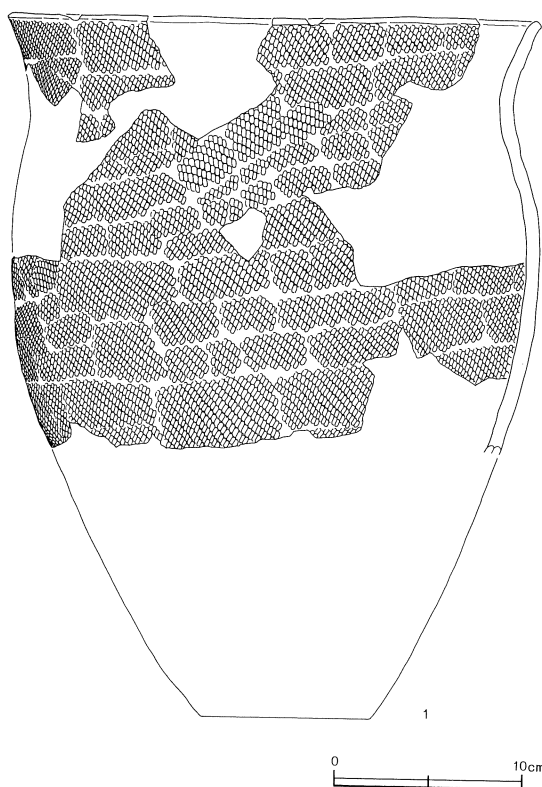
いてすべてRL単節の横位回転である。

14・18などは0段多条である。

復元個体である第9図3は、円筒状の小型深鉢である。地文としてL無節の縄文を横位に施文し、原体末端部処理の結節回転文が観察される。口縁下には2段の平行沈線が間隔をおいて巡らされ、この部分の地文が擦り消されている。11・13・14は口縁部である。11は半截竹管による楕円文がみられる。13は口縁下に平行沈線を2段に巡らせる。14は波状口縁で、口縁下に3段に巡らせ、波底部には円形の刺突列が縦位に施文される。

なお、19の胴部も異個体ながら、同一のモチーフを有するものと思われる。12は胴部上半部で、無文地に縦位の円形刺突列と、これを起点とする肋骨状の平行沈線が施文されている。

15も胴上半部で、RLの縄文が施文される。文様帯の上下を半截竹管による平行沈線で区画し、内部には同一施文具による樹枝状のモチーフが描かれている。区画の上下は地文が擦り消され、また樹枝状モチーフの中央垂線の下端では、区画下の擦り消し部分に指頭



第7図 第1号住居跡出土遺物(2)



によると思われる円形の圧痕が施されている。16～18・20は地文縄文上に平行沈線文が施文される。21は爪形文が施文される胴部破片である。

同図22は同時期の無文浅鉢形土器の口縁部である。口端上は平坦かつやや内そぎ状に整形され、内外面に横位の磨きが認められる。

第9図1・2、第10図23から第11図14までは、縄文のみが施文されるもので、諸磯式に伴う粗製のなものや、胴部下半部などが含まれる。

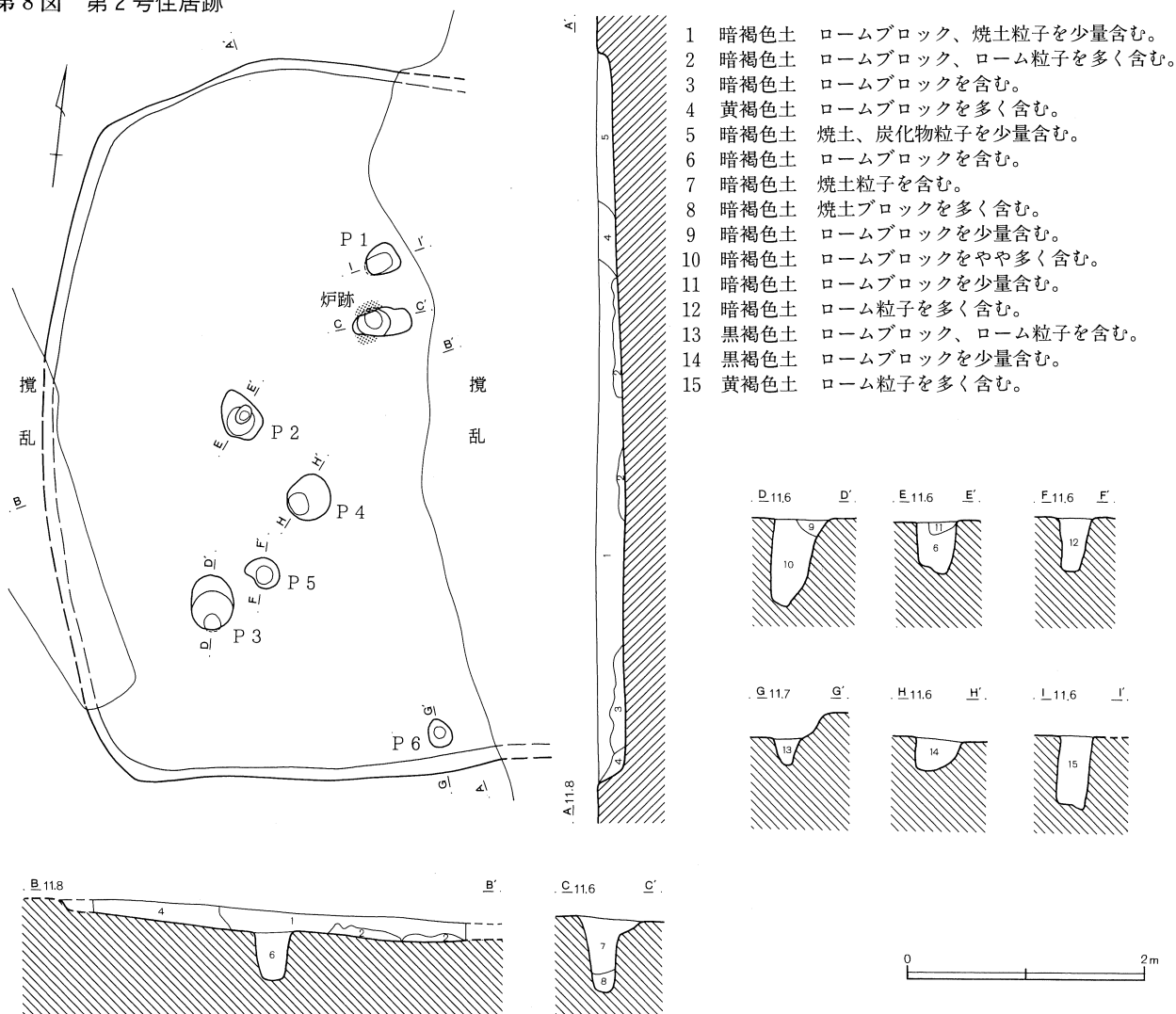
第9図1は胴上半部から口縁にかけての破片で、RLの縄文が横位に施文され、直線的に開く器形で、口端は平坦である。2は円筒形の深鉢の胴部下半部でやはりRLの縄文が施文される。

第10図23～26は口縁部である。23・24は口端上に刻みを有する。第11図1～14は胴部破片である。1はL無節の縄文が横位に施文され、また結節回転文がみられる。2以下は単節の縄文が施文される。

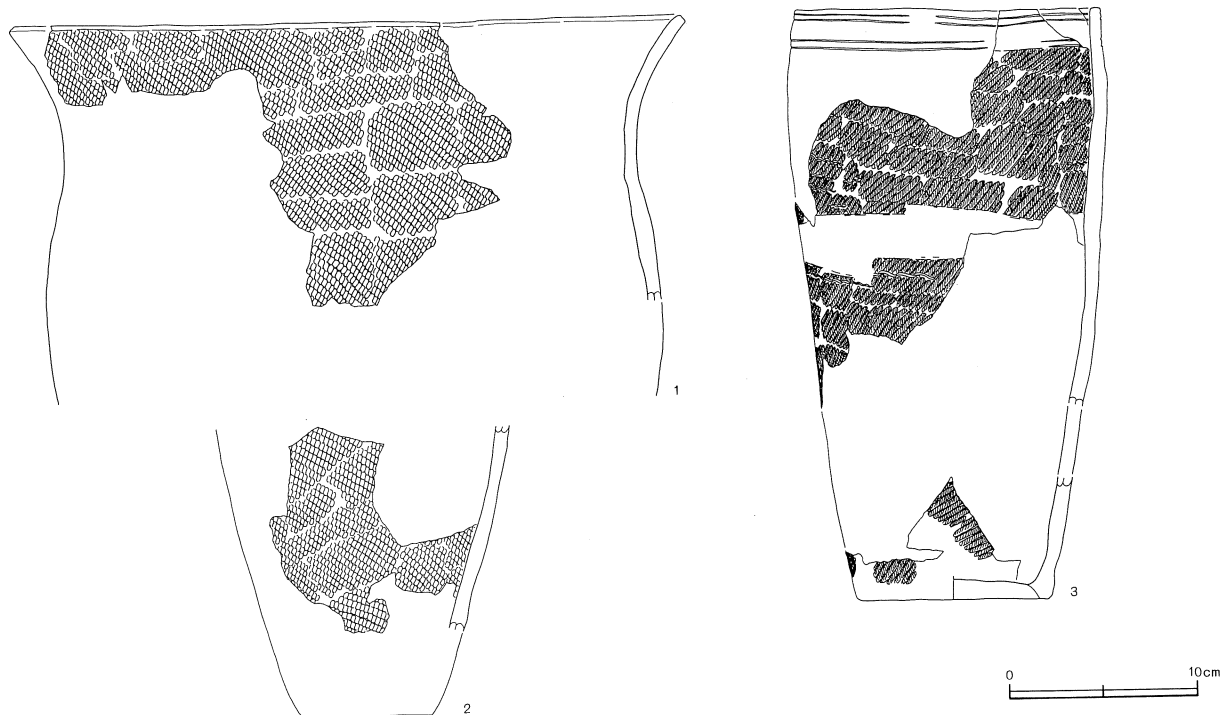
これらの土器の施文原体はRLが量的に卓越している。また、0段多条がしばしば見られる。回転方向は基本的に横位回転である。地文や胎土の特徴からいずれも諸磯a式と思われるが、第11図1・2・5・10などは諸磯b式の可能性がある。

第11図15は諸磯b式である。胴部中央部分の大破片で、粘土紐の貼り付けによる浮線文が数段にわたり横走している。浮線上には斜め方向の刻みが施され、矢羽根状である。地文はRLの縄文が横位に施文される。

第8図 第2号住居跡



第9図 第2号住居跡出土遺物(1)



第11図16は諸磯c式である。半截竹管による集合沈線が間隔をあけて垂下し、間に斜方向の集合沈線が充填される。

第11図17・18は地文のみの底部である。

17はほとんど無文で、胴部下半部にかけて緩やかに膨らむ器形である。全体にRLの縄文を施したうえで底部周辺の地文を擦り消したもので、拓影図上方に若干縄文が残存する。胎土は砂質である。

18はRLの縄文を下端にまで施した底部で、この原体は0段多条であると思われる。17に比べて一層強く膨らむ器形である。

(2) 炉穴

第1号炉穴(第12・13図)

3Eグリッドで発見された。後世の攪乱により覆土の大半を失っている。

遺構検出時の平面形は長径1.3m、短径1mの不整円形で、ほぼ中央に径50cmの円形の燃焼部を持つ。深さは0.2mで、これはほとんどが燃焼部に伴う掘り込みであった。主軸方向はN-20°-Wを指す。燃焼部上面から、尖底部(第13図1)1点が出土した。

第2号炉穴(第12・13図)

3Bグリッドに位置する。長径2.5m、短径2.3mの隅丸方形で、深さ0.2mである。主軸方向はN-70°-Eを指す。

東西の対角線上の両端に径約35cmの不整円形の燃焼部2基を持つ。両者の新旧関係は不明である。覆土中から少量の土器片(第13図2~4)が出土した。

第3号炉穴(第12・13図)

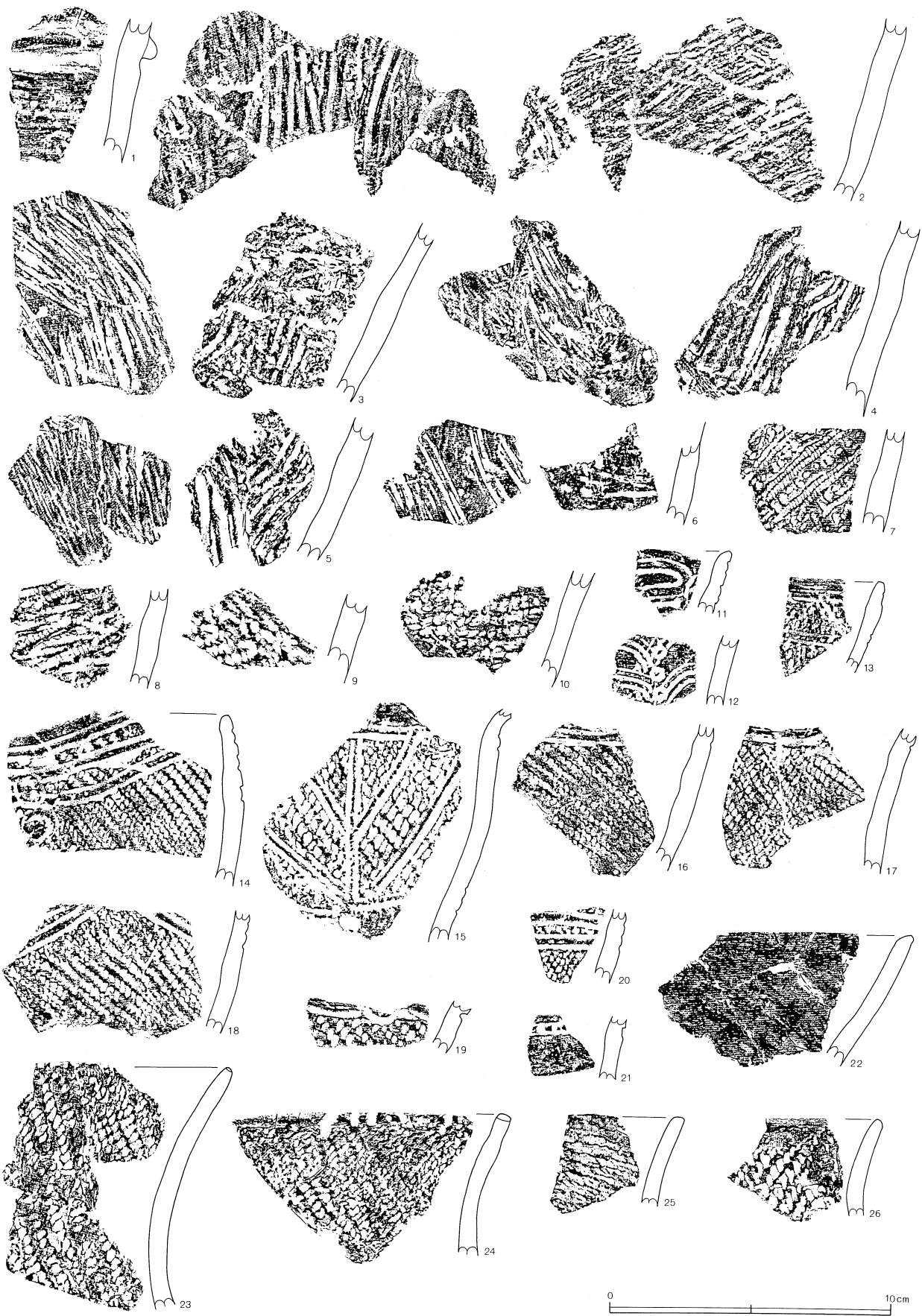
2Bグリッドに位置する。長径1.8m、短径1.4mの不整楕円形で、深さ0.2mである。主軸方向はN-35°-Wを指す。

中央やや南西寄りに径約52cmの不整円形の燃焼部を持つ。覆土中から少量の土器片(第13図5)が出土した。

第4号炉穴(第12・13図)

1Bグリッドに位置する。長径1.6m、短径1mの不整楕円形で、深さは0.2mである。主軸方向はN-75°-Eを指す。中央部やや北寄りに長径約58cmの長楕円形の燃焼部を持つ。覆土中から少量の土器片(第13

第10図 第2号住居跡出土遺物（2）



第11図 第2号住居跡出土遺物(3)

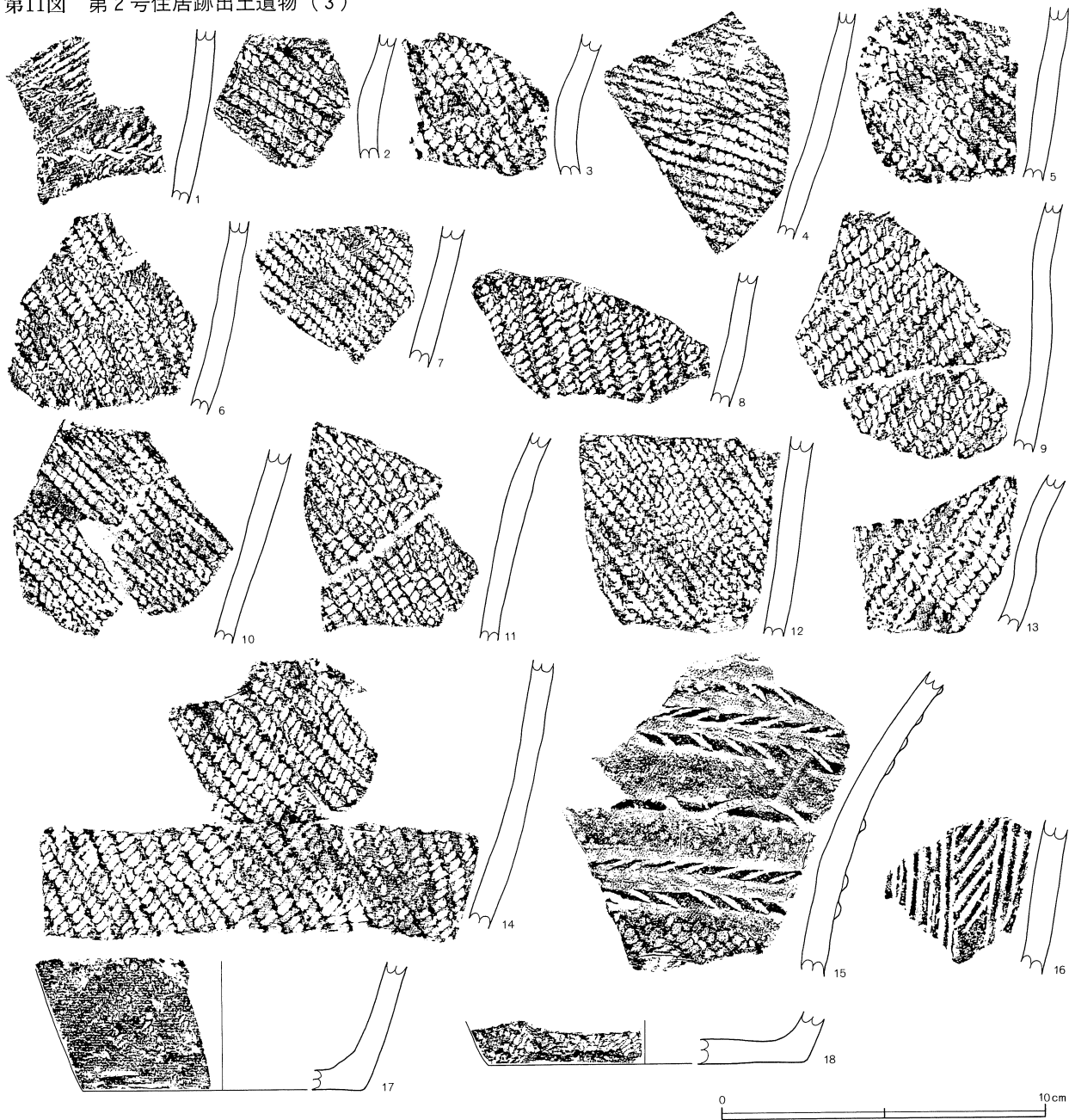


図6)が出土した。

第5号炉穴 (第12・13図)

1 B、2 Bグリッドに位置する。長径1.4m、短径1.2mの不整楕円形で、深さは0.2mである。主軸方向はN-60°-Eである。

中央やや西寄りに径約30cmの円形の燃焼部を持つ。覆土中より少量の土器片(第13図7~9)が出土した。

第6号炉穴 (第12・13図)

2 Aグリッドに位置する。長径2.5m、短径1.2mの不整な長楕円形で、深さは0.3mである。主軸方向はN-43°-Wを指す。

中央部で長径約50cmの楕円形の燃焼部2基が隣合って検出され、一端に燃焼部を有する楕円形の炉穴2基の切り合いと判断された。土層断面から、北西に設けられたものがより新しいように思われた。覆土中から少量の土器片(第13図10~12)が出土した。

第7号炉穴（第12・13図）

2 A、2 Bグリッドに位置する。長径1.5m、短径1.1mの不整楕円形で、深さは0.2mである。主軸方向はN-10°-Wを指す。

プラン中央部やや東寄りに径約50cmの不整円形の燃焼部を持つ。覆土中から少量の土器片（第13図13～14）が出土した。

炉穴出土遺物（第13図）

各炉穴覆土中から出土した遺物はいずれも土器片が少量であった。ほとんどが条痕文系の土器で、内外面に条痕や擦痕がみられ、胎土には繊維と少量の砂粒が混入されている。

第13図1は第1号炉穴の燃焼部上面から出土したもので、尖底部である。内外面に疎らな条痕が施され、胎土中には多量の繊維を含み、器面の荒れが目立つ。また、全体が二次的に熱を受けて脆くなっている。

同図2～4は第2号炉穴の覆土中から出土したもので、2・3はいずれも内外面に単位の幅の狭い条痕が縦に施文される。4は表面に縦位の密な条痕が施文され、裏面には擦痕がみられる。

5は第3号炉穴の覆土中の遺物で、表裏とも無文である。

6は第4号炉穴の覆土中から出土したもので、表面に擦痕がみられ、裏面には横位の雑な条痕文が施文される。

7～9は第5号炉穴の覆土中から出土したもので、7は表面に条痕が施文され、裏面は擦痕がみられる。8・9は表面に擦痕、裏面には縦位のごく荒い条痕が施文される。

10・11・12は第6号炉穴の覆土中から出土したものである。10は内外面に擦痕がみられ、表面にへら状工具先端を用いた斜めの刺突列が2段に施文される。11は表面には条痕が交錯して施文され、裏面には擦痕がみられる。12は内外面にごく淡い条痕が観察される。

13・14は第7号炉穴の覆土中から出土したものである。13は内外面にごく淡い条痕が観察される。14は黒

浜式の口縁で、棒状工具による斜位の沈線が施文されるもので、上層からの混入であると思われる。

これらの土器片は14を除いていずれも茅山上層式である。したがって本遺跡出土の炉穴群の所属時期は縄文早期末葉に位置づけられる。

（3）土坑

第2号土坑（第14・15図）

2 Bグリッドに位置する。長径1.6m、短径1.4mの不整円形で、深さは0.3mである。主軸方向はN-60°-Eを指す。覆土中から少量の土器片（第15図1・2）が出土した。

第6号土坑（第14図）

2 Aグリッドに位置する。径0.9mの円形で、深さは0.4mである。主軸方向はN-45°-Eを指す。覆土中から少量の土器（第15図3～5）片が出土した。

第7号土坑（第14・15図）

2 Bグリッドに位置する。長径1.1m、短径0.9mの楕円形で、深さは0.3mである。主軸方向はN-85°-Wを指す。覆土中から少量の土器片（第15図6・7）が出土した。

第8号土坑（第14・15図）

2 Bグリッドに位置する。長径1.4m、短径0.8mの不整楕円形で、深さは0.1mである。主軸方向はN-65°-Wを指す。覆土中から少量の土器片（第15図8・9）が出土した。

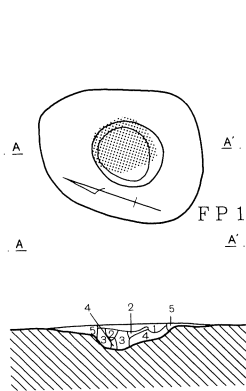
第9号土坑（第14・15図）

2 Aグリッドに位置する。長径1.1m、短径1mの不整円形で、深さは0.5mである。覆土中から少量の土器片（第15図10～12）が出土した。

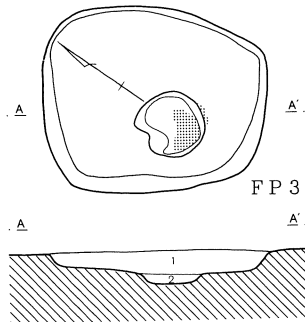
第10号土坑（第14図）

3 Aグリッドに位置する。長径2.6m、短径2.5mの

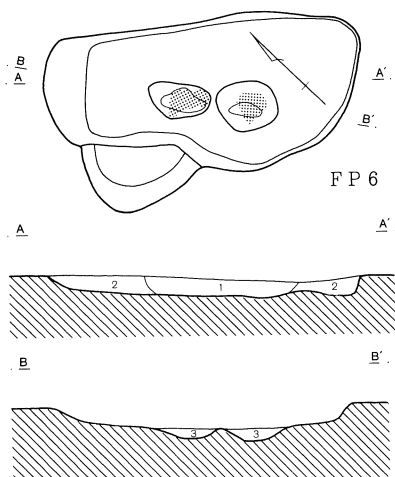
第12図 炉穴



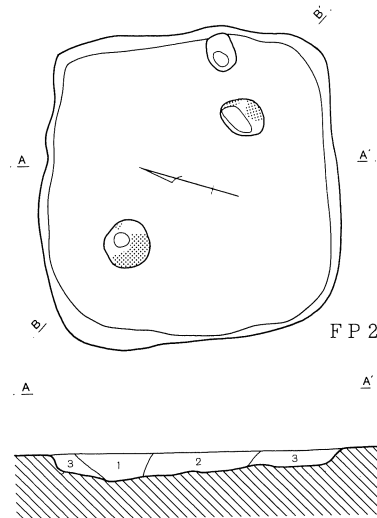
- 1 赤褐色土 焼土粒子、ブロックを多く含む。
- 2 赤色土 焼土ブロックを主体とする。
- 3 明褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックからなる。
- 5 褐色土 炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。



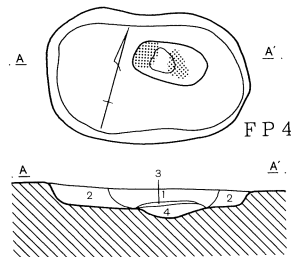
- 1 暗褐色土
ロームブロック、焼土ブロックを少量含む。
- 2 暗黄褐色土
焼土ブロックを含む。



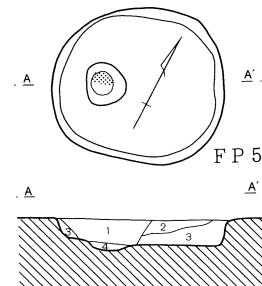
- 1 暗黄褐色土
焼土ブロックを含む。ローム粒子を多く含む。
- 2 暗黄褐色土
ロームブロック、ローム粒子を多く含む。
- 3 暗黄褐色土
焼土ブロックを多く含む。



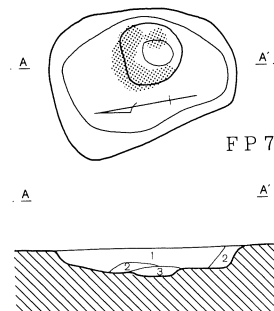
- 1 暗褐色土 焼土ブロック、ロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 焼土ブロック、ロームブロックを含む。
- 3 暗黄褐色土 焼土ブロックを少量、ローム粒子を多く含む。
- 4 暗褐色土 焼土ブロックを含む。



- 1 褐色土
ロームブロック、焼土ブロックを少量含む。
- 2 暗黄褐色土
ローム粒子を含む。焼土ブロックを少量含む。
- 3 褐色土
焼土ブロックを非常に多く含む。
- 4 暗黄褐色土
焼土ブロックを含む。

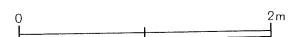


- 1 暗黄褐色土
ロームブロック、
焼土ブロックを含む。
- 2 暗黄褐色土
ローム粒子を含む。
焼土ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土
ローム粒子を含む。
焼土ブロックを少量含む。
- 4 暗赤褐色土
焼土ブロックを含む。

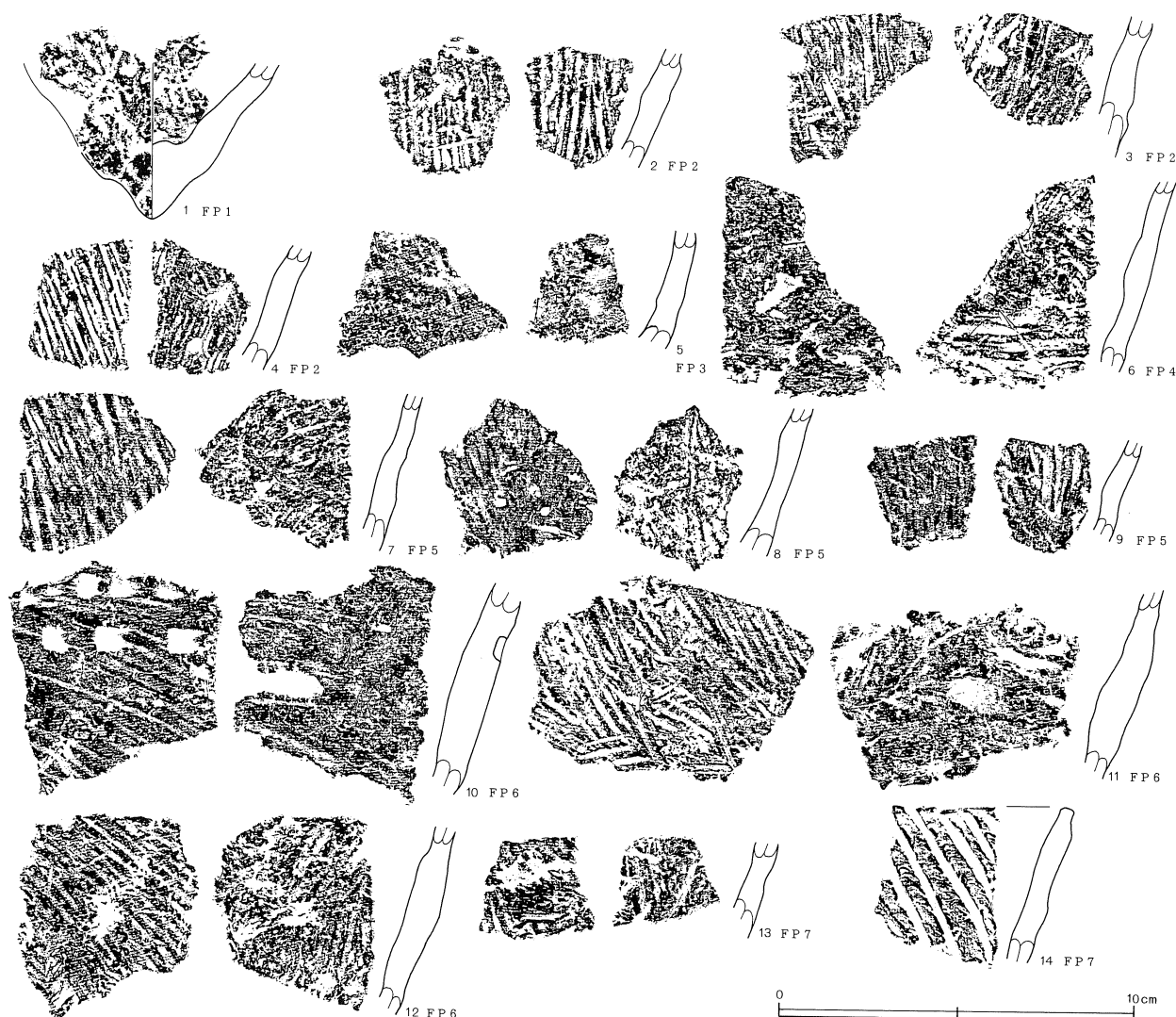


- 1 暗黄褐色土 ローム粒子を多く含む。
焼土ブロックを少量含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック、粒子を
多く含む。焼土ブロックを少量含む。
- 3 暗黄褐色土 焼土ブロックを含む。

L=12.1m



第13図 炉穴出土遺物



不整円形で、深さは0.3mである。主軸方向はN-7°-Eである。覆土中から少量の土器片が出土したが、いずれも小破片で、図示し得なかった。

第11号土坑 (第14図)

1 Bグリッドに位置する。長径1 m、短径0.9mの不整円形で、深さは0.1mである。主軸方向はN-5°-Wを指す。覆土中から少量の土器片が出土したが、いずれも小破片で、図示し得なかった。

土坑出土遺物 (第15図)

土坑覆土中からはいずれも少量の土器片が出土した。

1・2は第2号土坑から出土したものである。1は関山式である。RLとLRの縄を左捻りにした正反の

合の縄を横位に回転させる。2は口縁下に断面三角形の隆帯を巡らせ、へら状工具による刻みを施す。後期の土器片と思われ、混入の可能性はある。

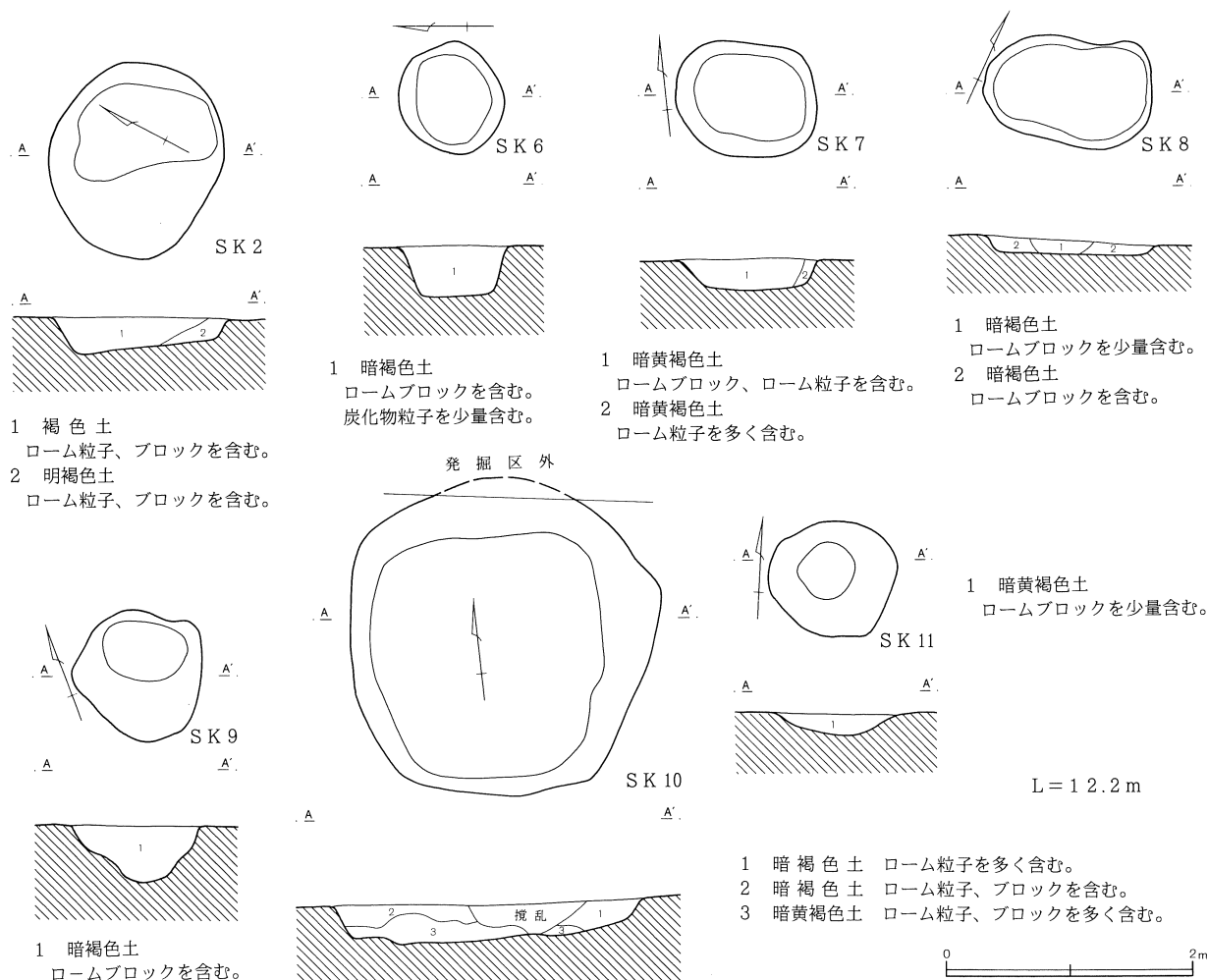
3～5は第6号土坑から出土した。3は黒浜式で、付加条の縄文が重複して施文される。4は諸磯b式で、キャリパー形深鉢の口縁である。5は縄文のみを施文する胴部で、諸磯式である。

6・7は第7号土坑から出土したものである。諸磯b式で、半截竹管による平行沈線文が施される。

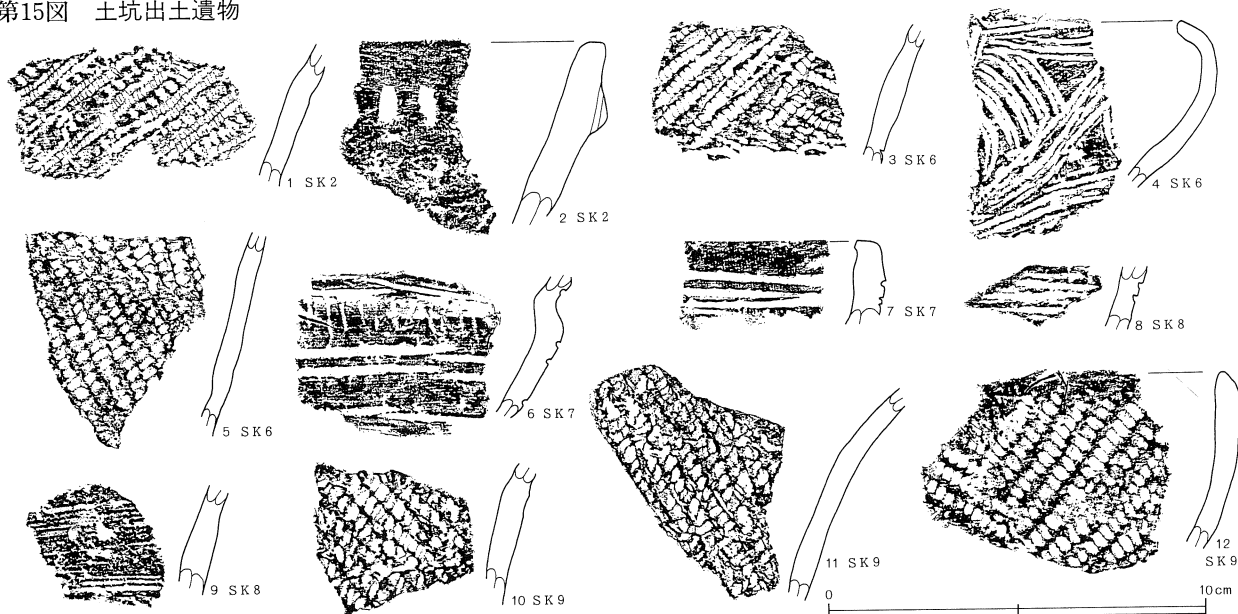
8・9は第8号土坑覆土中から出土した。いずれも諸磯b式で、横走する集合沈線文が施文される。

10～12は第9号土坑から出土したものである。10・11は縄文のみを施文する胴部で、諸磯式である。12は黒浜式。付加条の羽状縄文が施文される口縁部である。

第14図 土坑



第15図 土坑出土遺物



(4) 遺構外出土遺物

出土土器 (第16～27図)

第Ⅰ群 (早期前半の土器群)

1類 (第16図1～6)

撚糸文系土器群を一括した。いずれも口縁部破片である。

1・2は口唇上に地文が施文されるものである。1は口唇部上にRL横位回転の縄文が施文され、口縁以下には同一原体による縦位回転の縄文が施文される。口唇部は肥厚する。2はRLの緻密な縄文が縦位に施文され、口唇部上にまで廻り込んでいる。口縁は軽微に外反する。いずれも井草式である。

3～5はほぼ口縁部直下から縄文ないし撚糸文が施文される。3はRL縦位回転の縄文が施文され、口縁部は肥厚しつつ外反する。4もRL縦位の縄文が施文される。口唇部は肥厚し、直線的に開く。口端部は丸みを帯びる。5はRの撚糸文を施文し、口端部は丸みを帯び、裏面に稜を有する。夏島式であると思われる。

6は軽く外反する口縁で、RL縦位回転の疎らな縄文が口縁直下から施文され、器面全体に研磨が施される。稲荷台式に位置づけられよう。

2類 (第16図7～21)

沈線文系の土器群である。同図7～9は無文の個体で、表面に荒い横方向の削りの痕を残し、これに伴う砂粒の流れが観察される。これに対し、裏面は平滑である。これらは前段階の無文土器群の特徴を残すものであろう。

10は口縁部破片である。口唇部は若干肥厚する。口端上は平坦に整形される。口縁直下に横位の細沈線列を巡らせ、その下には斜方向の細沈線列を施文する。

12・13は同一個体と思われる胴部破片で、間隔をおいて巡らされた細沈線帯の間に縦位の短沈線列を充填するものである。16は同様の短沈線列が、斜行する平行沈線による三角形の区画内に充填される。

14は格子目状をなす縦位の細沈線列の間に、同一施文具によるとと思われる斜めの刺突が乱雑に施文される。

15、17～20は丸棒状の工具による幅広の沈線により

横位の平行沈線文が描かれる。

15は口縁部で、施文後に器面が研磨される。直線的に外反する器形で、口端部は丸みを帯びる。17以下は胴部破片で、平行沈線以外の文様はみられない。

本類はいずれも三戸式と考えられる。

第Ⅱ群 (早期後半の土器群)

1類 (第16図22～28、第16図30～36、第17図1～11)

条痕文系土器群のうち鶉が島台式と、これに伴うと思われる地文のみの土器片である。

第16図22～28は文様を有する土器片である。

22～25は口縁部である。22は平口縁上に小突起を配する。口縁下に1条の沈線が巡り、以下に縦位の沈線が間隔をおいて垂下する。この縦位の沈線上には半截竹管先端による刺突文が並ぶ。

23は口唇上に刻目を有し、口端部は平坦に整形される。口縁下に沈線による区画が描かれ、内部を集合沈線で充填する。区画線上には円形竹管の刺突を施す。

24・25は口唇上に刻目のみが付される。口縁直下に横方向の条痕文がみられる。胴部の条痕がいずれも縦位ないし斜位に施文されるのとは対照的である。

26以下の胴部破片には23と同様の文様が描かれる。

第16図30～第17図11は、条痕文のみを施文する破片である。表裏に密な条痕が施文され、黄褐色～橙色の比較的硬質な器壁である。胎土に繊維と白色の砂粒を混入する。胴部の条痕文は縦位・斜位に施文され、特に右下がりの斜位の条痕が表裏ともに卓越している。

11は上げ底状の底部で、横位の条痕が施文される。

2類 (第16図29、第17図12～15、第18図、第19図1～7)

条痕文系土器群で、茅山上層式とこれに伴うと思われる地文のみの土器片である。胎土に多量の繊維を含むほかは、砂粒・礫などの混入は少ない。器壁の色調は灰白色～黄褐色などの明色系のものと、茶褐色～黒褐色などの暗色系のものがほぼ同量共存している。

第16図29は唯一文様の見られる破片で、へら状工具の先端による刺突列が施文される。

第17図12～15、第18図1～7、第19図3は外面の条

痕が擦痕状となるものである。こうした擦痕状の器面調整は、多くの場合器外面に限られ、内面には粗雑な条痕が施文される。

第17図13は口縁部である。頸部で外反して口縁に向かって直線的に開く器形である。口端は平坦に整形される。表裏共に横位のごく淡い擦痕がみられる。

第18図3・4の胴部は外面のみ擦痕がみられ、内面は平滑である。第19図3は尖底部である。外面に擦痕、内面には条痕のほかに指頭による整形の跡がみられる。

第18図8～16、第19図1・2・4～7は表裏に条痕文を施文するものである。1類に属するそれに比べ、一回に施文される条痕の距離は短く、施文方向もしばしば交錯している。

第18図8は内湾する口縁部で、口縁下には横位の条痕文が表裏とも比較的密に施文される。第19図7は底部付近の破片である。カーブの緩やかな、丸底に近い器形になると思われる。

第Ⅲ群（前期前半の土器群）

1類（第19図8～22、第20図、第21図1～10）

羽状縄文系土器群で、関山式と考えられる。胎土に植物繊維を混入する。

第19図8は正反の合による異条羽状縄文のみられる口縁である。口縁直立し、口端部は平坦に整形され、内面稜を成す。

同図9～12は半截竹管文が施文される。横位の平行沈線間に鋸歯状モチーフが描かれる。10・12は、三角形の区画内部に同心円文ないし渦文が充填されている。12は下端をコンパス文により区画する。

同図13～19はコンパス文を施文するものである。半截竹管を器面に垂直に当て、反転しつつ移動させたものだが、18は櫛歯状の施文具で同じ作業を行ったもので、またループ文と併用している。地文は単節の羽状縄文のほか、異条羽状縄文がみられる。

16は1段と2段の縄による正反の合で、複節1条と無節2条が繰り返して現れる。同図20～22はループ文が重畳して施文される。20は外反する胴部、21は中央の

張り出す胴部で、キャリパー形深鉢の一部と思われる。

第20図1～4は異条羽状縄文が施文される胴部である。2は1段と2段、それ以外は1段の縄どうしを用いた正反の合である。5～7はRLとLL、正と反の撚りを別個に用いた羽状縄文である。5は胴部上半部で、頸部に無文帯を有する。

第20図8～12は三本組紐の回転圧痕が施文される。8・10は口縁直下から施文が開始され、9・11は口縁下に擦り消しによる無文帯を有する。いずれも口端部が平坦に整形される。9・12はコンパス文が併用される。

第20図23は、正反の合をさらに左撚りに撚り合わせた異節の縄文である。15も異節の縄文であろう。

同図14は刻みを有する幅広の突起を付した水平口縁である。羽状縄文が施文されるが、うち口縁直下に施文されるRL単節は明らかに0段多条である。

第21図1～5は底部で、いずれも上げ底である。1以外は裾が軽く張り出している。

1・4・5は単節、2・3は異条羽状縄文で、裾部まで密に施文される。なお、5には結節回転文がみられる。

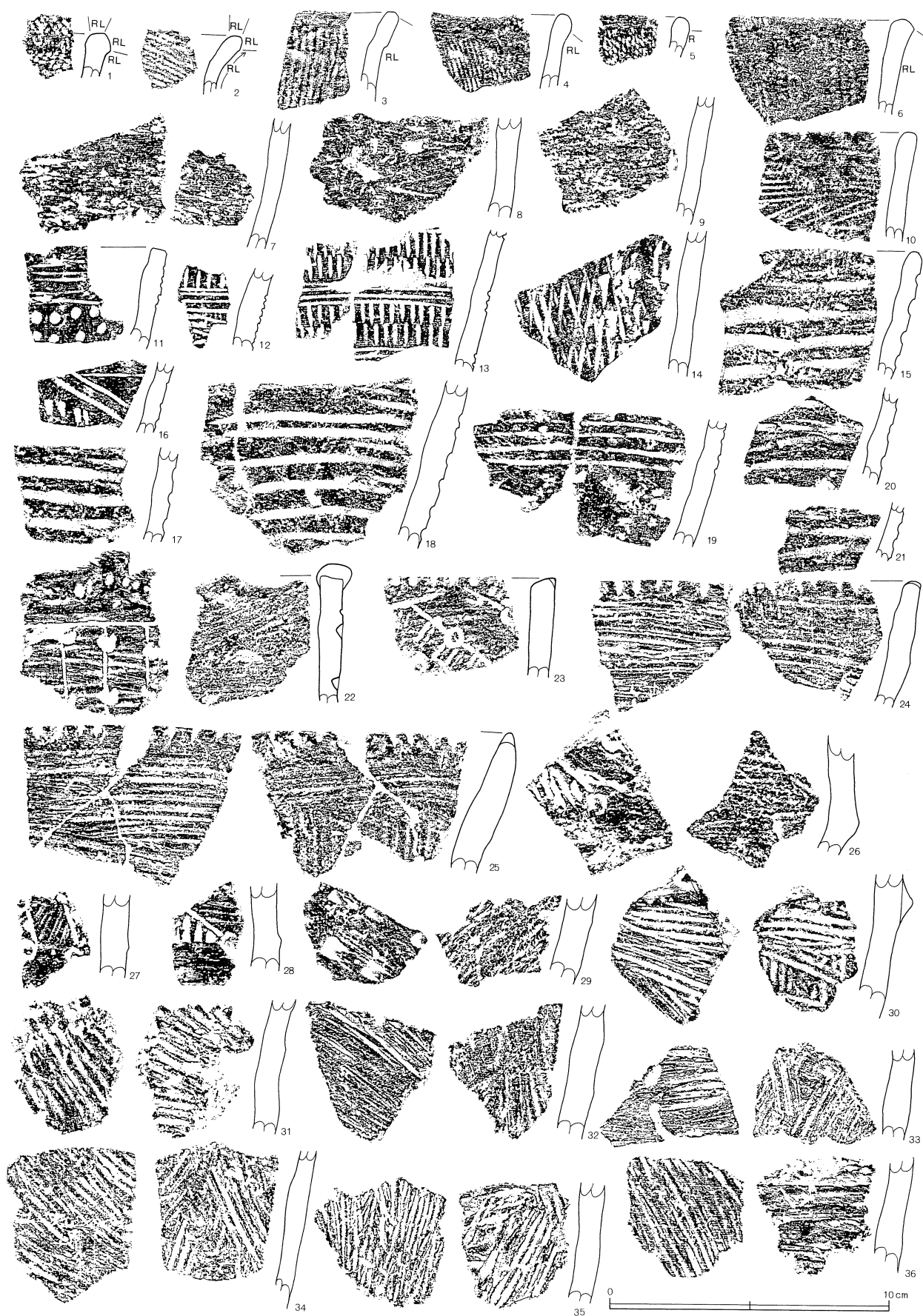
第21図6～10は底面を含む器面全体に貝殻背圧痕文が施文される。6・7は先細りしつつ外反する口縁部、8は胴部、9・10は底部で、裾が軽く張り出す。9は上げ底の底部である。いずれも貝殻文以外の文様は一切施文されないが、胎土や焼成の特徴から、関山式とした。

2類（第21図11～30）

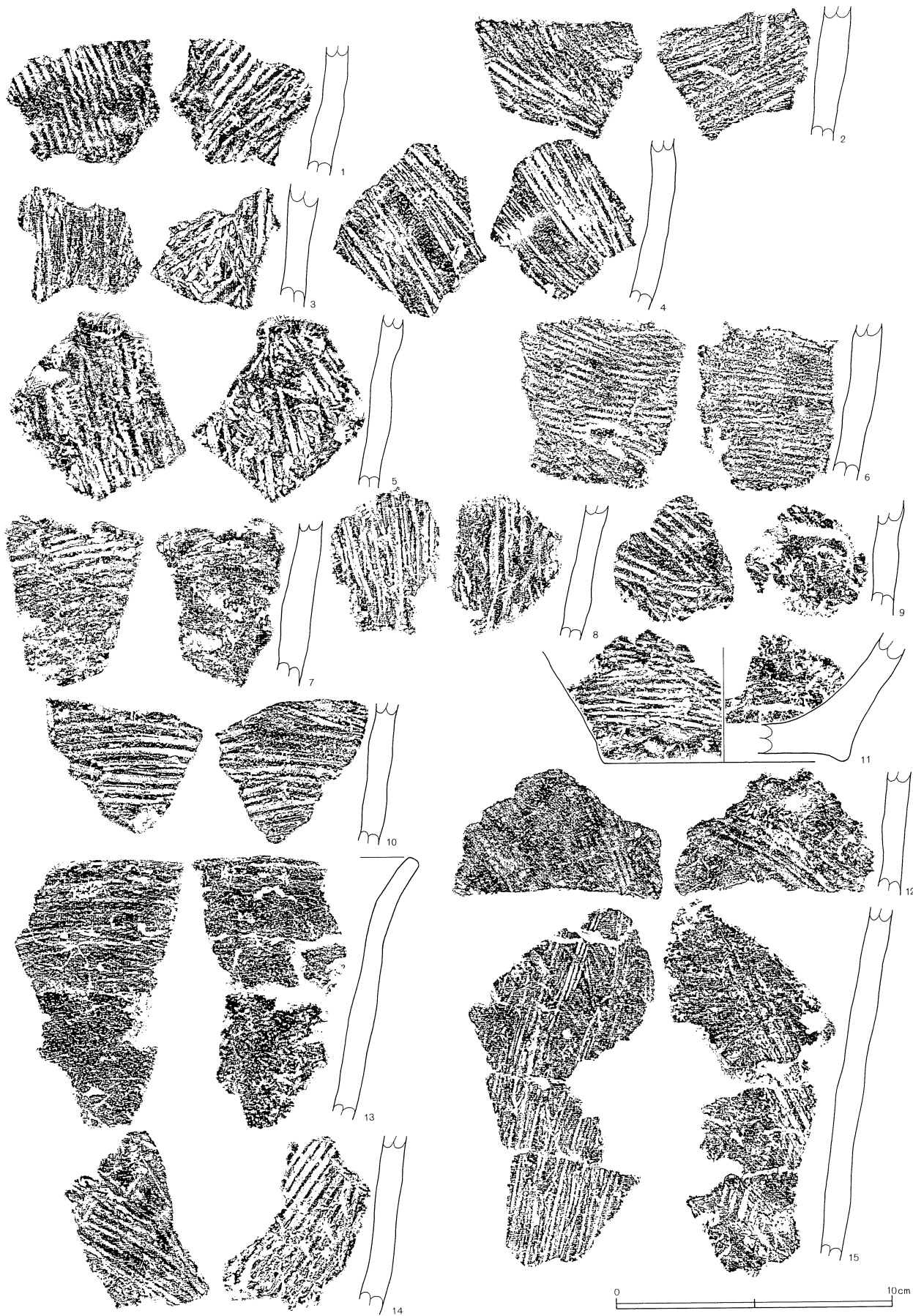
羽状縄文系土器群で、黒浜式と考えられるもの。竹管文が施文され、地文として付加条縄文が多くみられる。

11～15は半截竹管による沈線が施文される。12の口縁では、口縁直下で斜行、頸部でほぼ垂直に垂下する。15の胴部では「米」字に近いモチーフが描かれる。16～19はへら状工具による沈線が施文される。18は斜行する平行沈線上に縦位の沈線が垂下する。19は綾杉状のモチーフが描かれる。

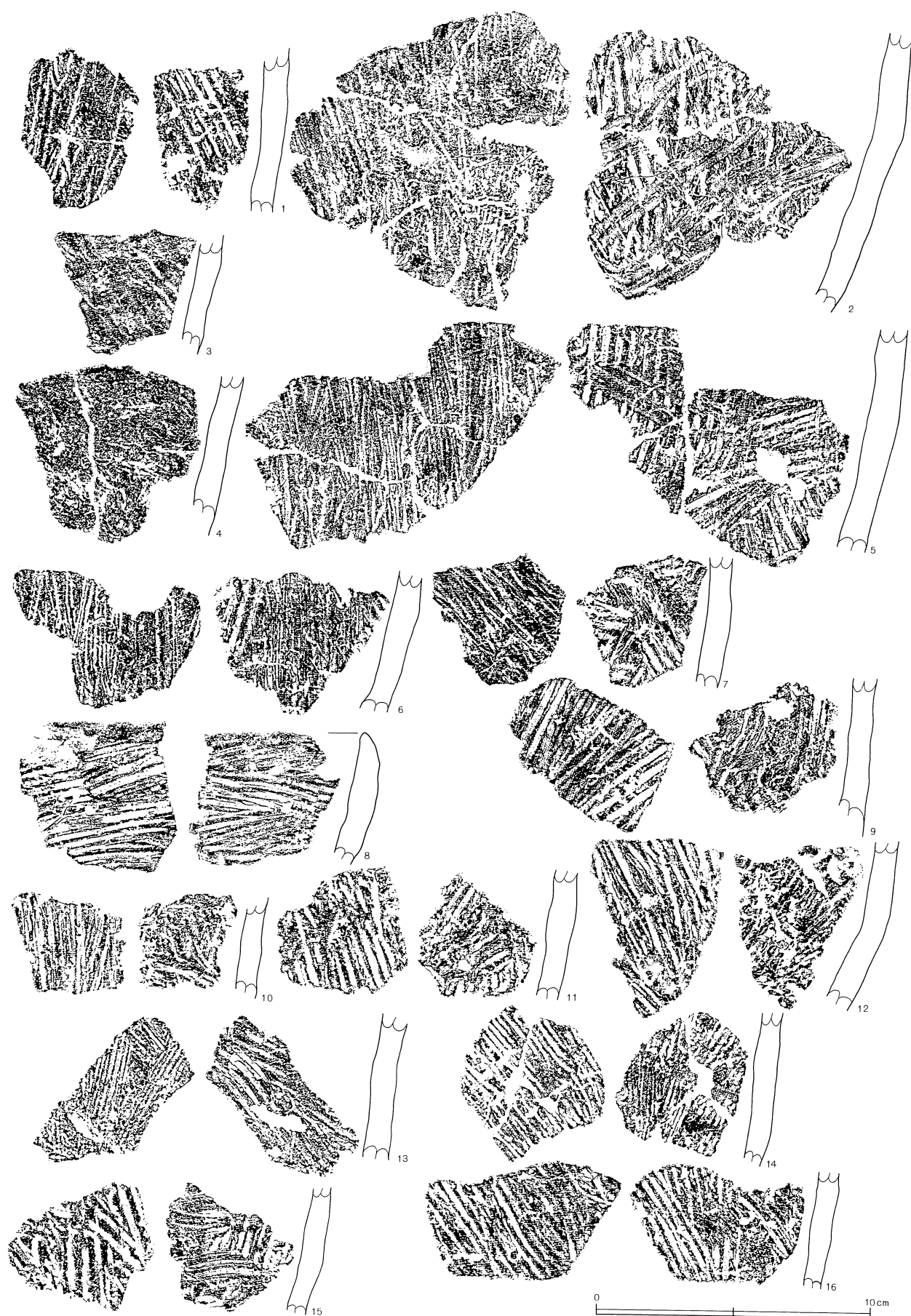
第16図 遺構外出土遺物 (I)



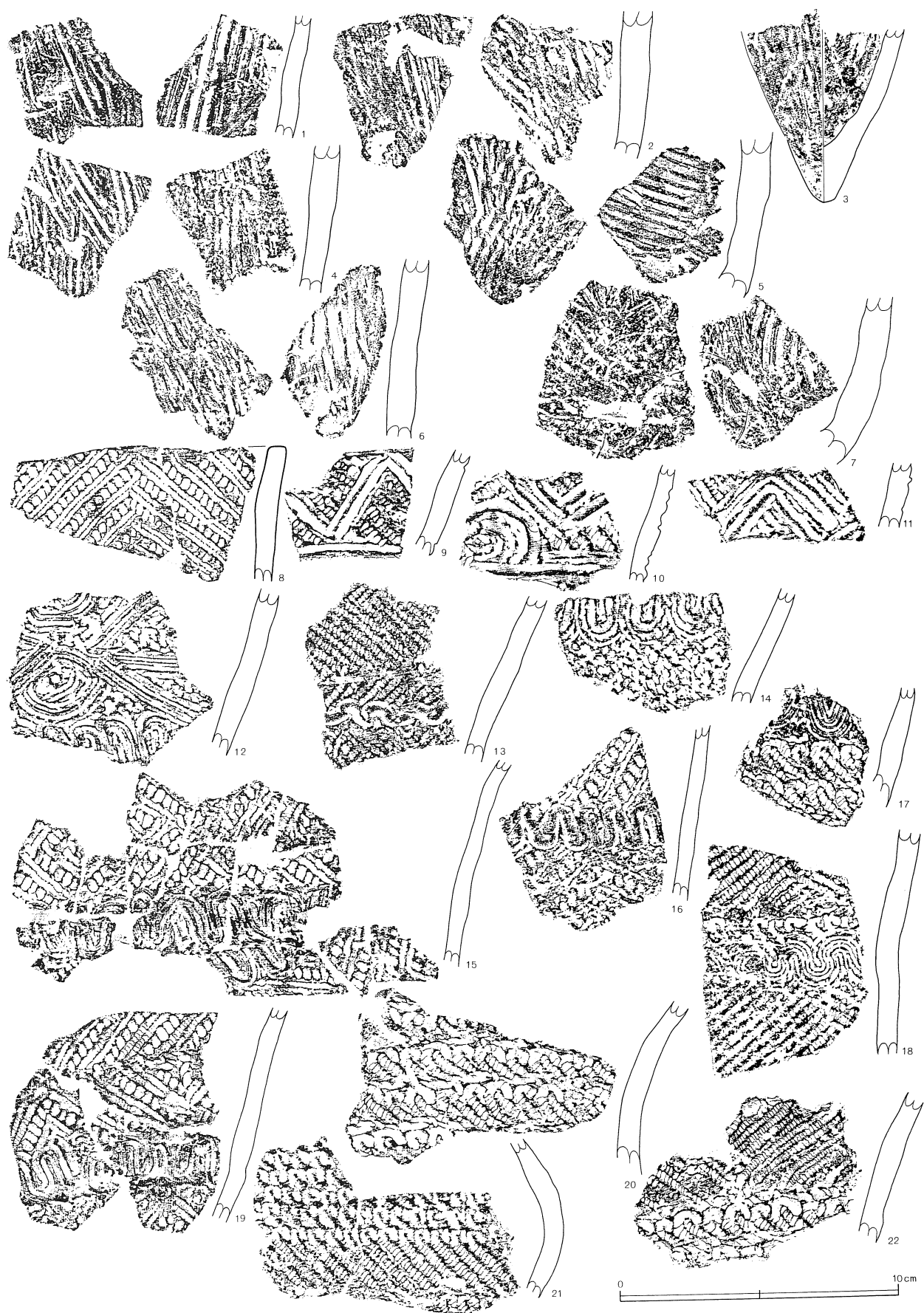
第17図 遺構外出土遺物（2）



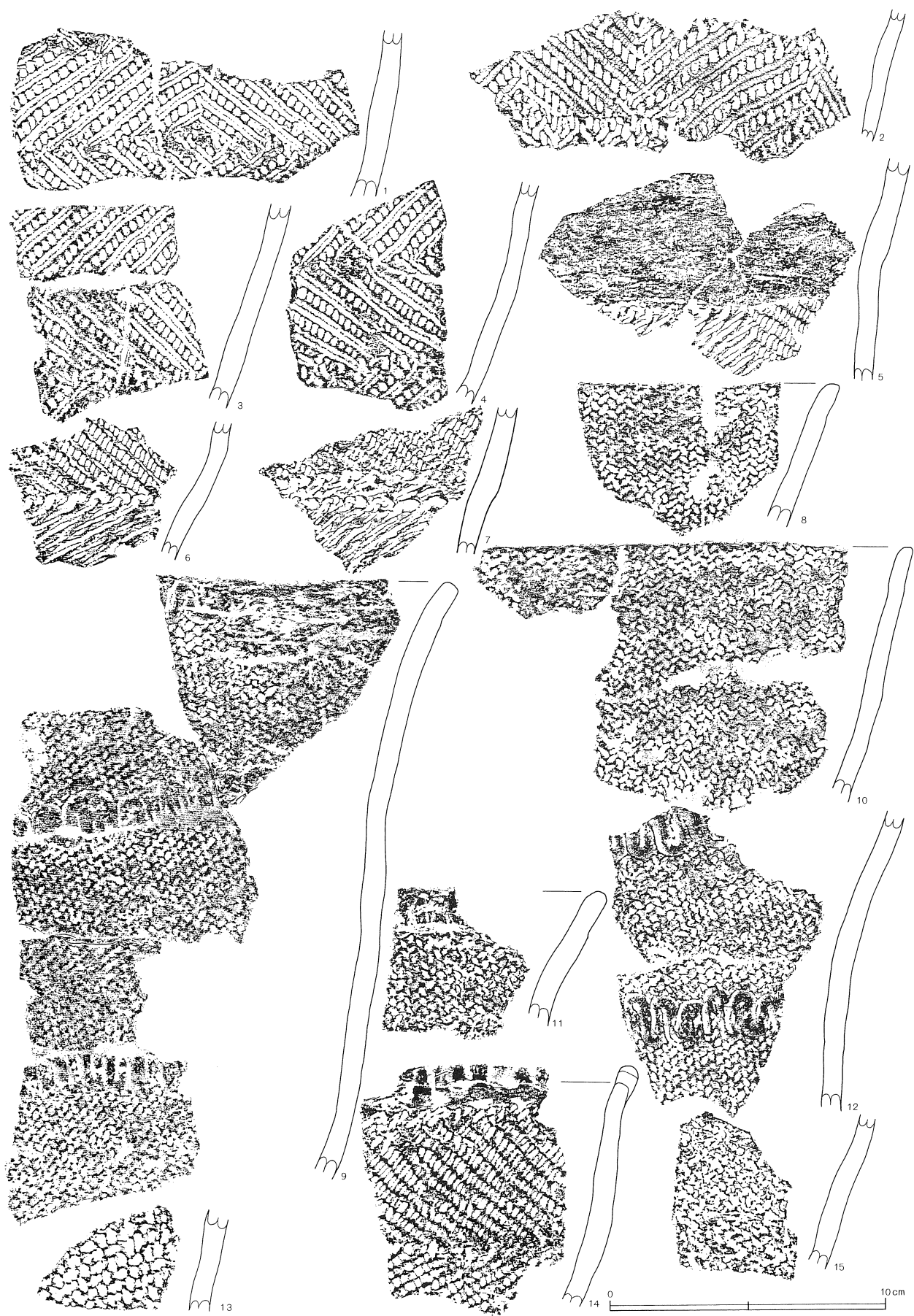
第18図 遺構外出土遺物（3）



第19図 遺構外出土遺物（4）



第20図 遺構外出土遺物（5）



20・21は半截竹管による集合沈線により綾杉状のモチーフが描かれるものである。20は縦位の沈線上に、同一施文具による斜めの刺突が等間隔で施される。21は下半部に付加条の縄文が施文される。

22・23は同一個体で、付加条の縄文が施文され、口縁部及び頸部に円形竹管による刺突列が巡らされる。24・25も同一個体と思われる。口縁直下に爪形文によって文様が描かれ、指頭圧痕が付される。

26はRL単節の縄文が施文される。27・28の胴部と29の底部は付加条である。30は無文の口縁部である。

第IV群（前期後半の土器群）

1類（第21図31～38、第22図1～11）

半截竹管文が施文される。胎土は砂質で、繊維は含まれない。諸磯a式である。

第21図31・32は内湾する口縁で、同一個体である。RL横位回転の縄文が施文され、ところどころに結節回転文がみられる。口唇は内面で稜をなし、口端部直下に半截竹管による刺突列が巡らされる。

33も口縁で口縁下に2条の爪形文が巡り、この部分の縄文が擦り消される。口端部は平坦に整形される。

35は貫通孔をもつ波状口縁で、口唇部直下に爪形文が巡らされる。34、36～38は地文上に爪形文のみられる胴部である。地文は34がRLで、それ以外はLRであるが、うち38は直前段3条の縄を用いている。

第22図1～11は沈線文が施文されるものである。1は半截竹管を用いた沈線で、楕円形の区画がみられる。地文はRL単節の縄文である。2は縦位の沈線の間を半截竹管による弧状の集合沈線で繋いでいる肋骨文で、円形の刺突がみられる。

3は爪形文による横位の区画の内部を擦り消し、ここに半截竹管による弧線文が連続する。地文はRL単節で、結節回転がみられる。4は半截竹管の集合沈線により肋骨状のモチーフが描かれるものと思われる。

5以下はへら状工具による沈線文が施文される。

5・6はRLの縄文が施文され、その他は無文である。

2類（第22図12～36、第23図、第24図1～6）

諸磯b式で、胎土に結晶片岩などの小礫を混入して

いる。

同図12～27は諸磯b式古段階で、主として胴部上半部に文様が集中し、下半部には縄文のみが施文される。茶褐色や暗褐色の胎土である。12～21は爪形文の土器である。12は口縁で、楔状に張り出す口唇の直下に2条の隆帯が巡らされ、以下に爪形文が施文される。

13・14は同一個体で、爪形文と、竹管による入り組み木の葉文が描かれる。17・18も同一個体と思われ、幅広で非常に密な爪形文が重なる。18はL無節の縄文が施文され、2条の結節回転文がみられる。

16・19・20は幅広の爪形文によって三角形や菱形の区画が構成され、20では菱形の区画内部に入り組み状のモチーフが描きこまれる。21は平行して走る3条の爪形文の間に半截竹管の背面圧痕が充填されている。

22・23は扁平な浮線文によって文様が描かれる。地文はRLの縄文で、器面のほか浮線上にも施文される。

24～26は半截竹管による平行沈線文が施文されるもので、いずれも口縁部である。24は水平口縁で、口唇部直下に平行沈線がめぐり、以下に斜行する平行沈線が密に施文されている。25は刻みを有する平口縁で、直下に平行沈線が巡らされている。26は波状口縁の波頂部で、無節の縄文の上に平行沈線が巡らされる。

27は無文の口縁で、口唇部に刻みがあり、頸部に1条の沈線が巡らされている。

第22図28～36、第23図1・2は諸磯b式新段階の資料である。器面全体に地文とともに文様が描かれ、黄褐色や灰褐色の明色系の色が目立つ。

同図28～32は浮線文の土器である。地文縄文上に斜位の刻みを有する浮線がある。隣りあった浮線上で刻みの向きを変化させ、綾杉状の構成をつくりだしている。28・29は浮線間に円形刺突を伴っている。

なお、第24図1は同種の口縁であるが浮線が細く扁平で、綾杉状の刻みも形骸化しており、L字に近い口縁部の屈曲など、より新しい段階かもしれない。また、第23図2は諸磯b式に共伴する円盤形の特殊な浅鉢で、新段階の所産である。口縁に刻みを有する浮線が二巡するほかはまったくの無文である。全面に横方向

の磨きが徹底され、肩部に稜をもつ。この個体は浮線上の刻みが同一方向で、他の個体のように綾杉状にならない。スクリーントーンで表現したのは器面が摩滅・剥落した部分である。復元径約27cm。

第22図33～36は沈線文の土器で、地文縄文上に半截竹管による集合沈線で文様が描かれるものである。

横走する集合沈線で器面を何段かに分割したうえ、内部に縦位や斜位の集合沈線で三角形などの区画をつくっている。区画内部には弧状や入り組み状のモチーフが描かれる。33・34は同一個体と思われる口縁部で、キャリパー形の深鉢である。口端上に繊細な浮線による装飾が施される。33は大型の突起が剥落した跡がみとめられ、あるいは後述の獣面突起が存在したかもしれない。

第23図1はほぼ全体の構成を知り得る復元個体で、この時期に特有のいわゆる獣面突起を付した深鉢である。キャリパー形で、四単位の大波状口縁である。また波底部にも隆起が配される。口唇上にはへら状工具による刻みが施される。器面全体にRL横位回転の縄文が施文され、これを横位の平行沈線によって数段に分割する。沈線間には斜位の短沈線が綾杉状に施文される。最上段の区画内部にだけは、同様の平行沈線＋短沈線によって対弧状やX字状のモチーフが描かれている。浮線文による綾杉状の構成が沈線によって表現されたもので、比較的新しい要素と考えられる。

この土器の大波状口縁の波頂部に、何らかの獣の顔面を模したと思われる獣面突起が付されている。残存高約26cm、復元径約40cmである。

第23図3、第24図2～4は諸磯b式終末段階である。地文縄文は僅少となり、無文地に半截竹管による2本ないし4本単位の平行沈線が重なる。色調は前段階に引き続き明色系が目立つ。

第24図2は断面L字形の強い屈曲を示す口縁、他は胴部である。第23図3の復元個体は胴部中段の大破片で、復元した部分の最大径は約40cmである。

第24図5・6は諸磯b式の底部で、新～終末段階に属するものと思われる。いずれも半截竹管による横位

の平行沈線文が施文される。

5は極端に裾の張る器形で、底面は縁辺部が削り取られ、中央部にくらべ若干持ち上がっている。6は平底で、胴部にかけて直線的に開く。

3類(第24図7～20)

諸磯c式である。半截竹管による集合沈線が施文される。胎土に砂粒と小礫を含み、灰～黒褐色の硬質の器体である。

7・9・10は口縁部である。7は断面丸みを帯び、横位の集合沈線のみが施文される。

9・10は同一個体と思われる。口唇部が極端に肥厚して内面で稜をなし、この稜線の部分までが広く施文域となっている。口縁部に横位、胴部に縦位の集合沈線が施文され、口唇上にも綾杉状の集合沈線が施文される。口縁部から口唇上にかけて、ボタン状の貼付文と、円盤状の突起を施している。

8、11～20は胴部破片である。縦位の集合沈線間、対弧状や綾杉状の集合沈線が充填されている。20は集合沈線による菱形の区画内に縦位の集合沈線が施文されるもので、胴部上半部であろうと思われる。

4類(第24図21～37)

浮島・興津系の土器群である。21～25は浮島式である。21は波状貝殻文である。22～23は輪積み痕を段状に残し、接合部に半截竹管などによる抉り状の刺突を巡らせている。22・23は口縁部、24もこれに近い胴部上半部の破片であろう。25はいわゆる三角文である。

26～37は興津式である。26～29は口縁部である。口縁下に半截竹管による縦位の集合沈線が施文され、以下に竹管の背面を用いた陰刻文や、サルボウガイ類による貝殻腹縁圧痕が巡らされる。29は貝殻腹縁圧痕のみが施文される口縁で、同一施文具による抉り状の陰刻がみられる。

30以下は胴部破片である。半截竹管による沈線間に貝殻腹縁圧痕が充填される。圧痕はほぼ垂直に押されたものの以外に、34は押し引き状に施文し、36はロッキングによって施文されている。

5類(第25図)

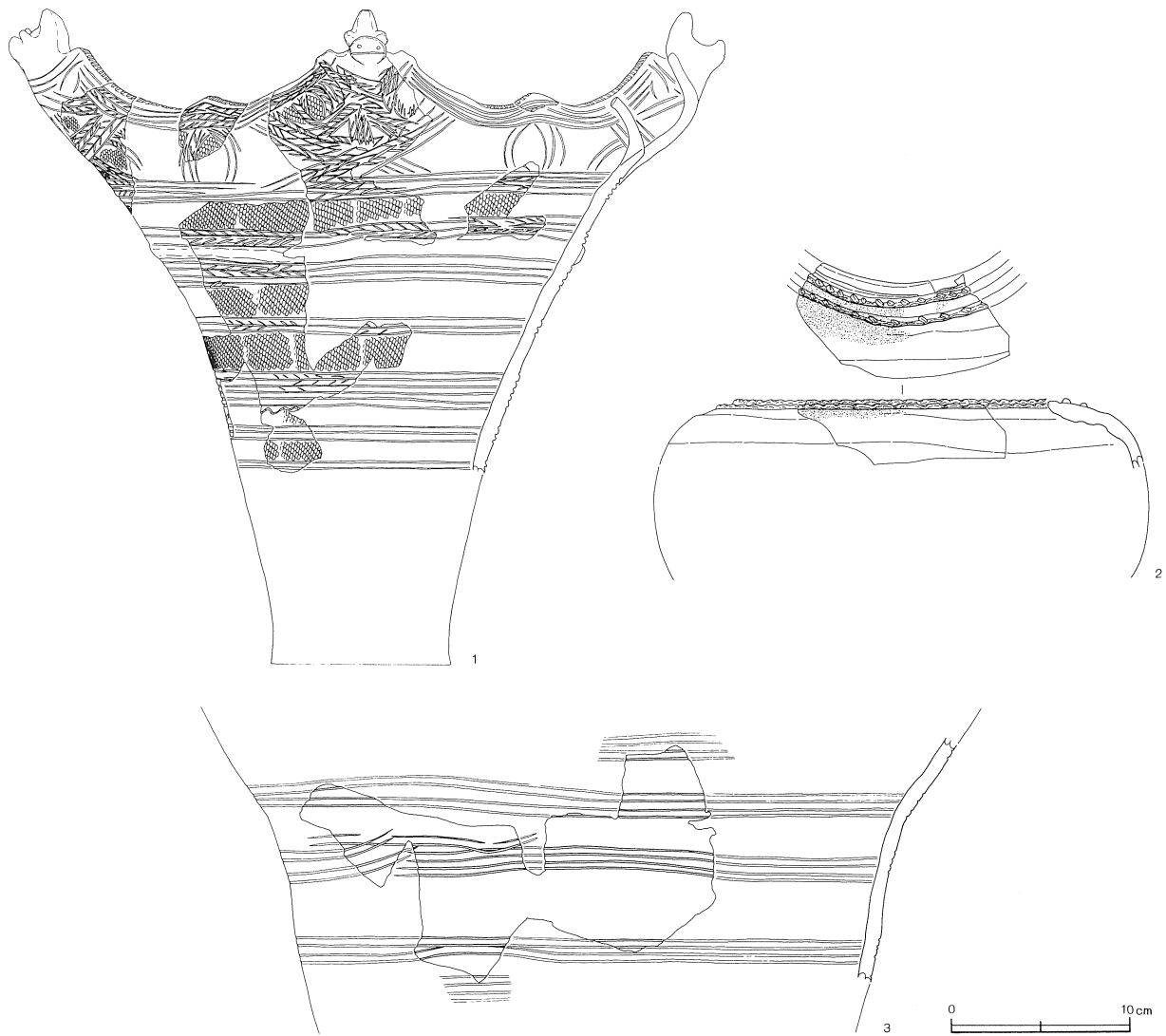
第21図 遺構外出土遺物（6）



第22図 遺構外出土遺物（7）



第23図 遺構外出土遺物(8)



前期後半に属する縄文のみの破片を一括した。諸磯式の粗製の土器と、竹管文などが施文されない胴部下半部が存在するものと思われる。胎土や地文などの特徴から3時期に分けることができる。

5-1類 (1~8)

胎土が砂質で茶褐色~暗褐色であり、本遺跡出土の諸磯a式に類似する。地文はいずれも単節の縄文で、RL横位回転が卓越する。

1は口縁部で、RL横位回転の縄文が口端上にまで廻り込んで施文される。施文原体はおそらく0段多条の縄である。7は底部で、裾が若干張り出し、RL横位回転の縄文が粗に施文される。8も底部で、胴部下半にかけてふくらみを持った器形である。RLの縄文が密に施文される。

5-2類 (9~24・26)

胎土中に礫片が目立ち、黄褐色~茶褐色で、本遺跡出土の諸磯b式に類似する。

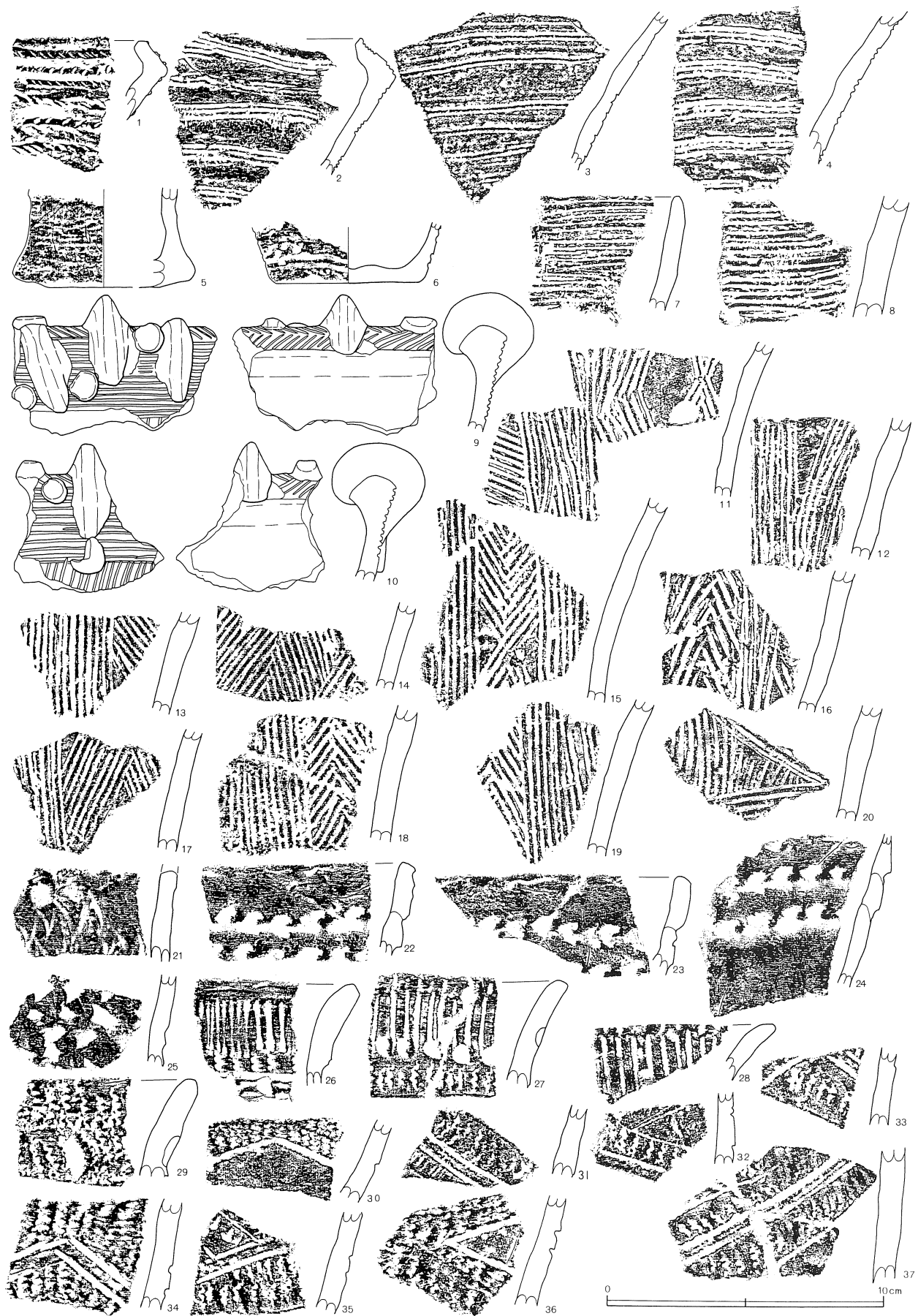
地文はやはりRL横位回転が卓越し、10・25等、0段多縄と思われるものが混じる。全体に節が粗大で、施文も疎らなものが目立つ。22・23・26等、無節の縄文もみられる。22には結節回転がみられる。

口縁は丸みを帯びるものと、平坦に整形されるものの両者が存在する。縄文は口唇部以下全面に施文されるが、口端上にまで施文の及ぶものはない。17は口端部に刻みを施す。

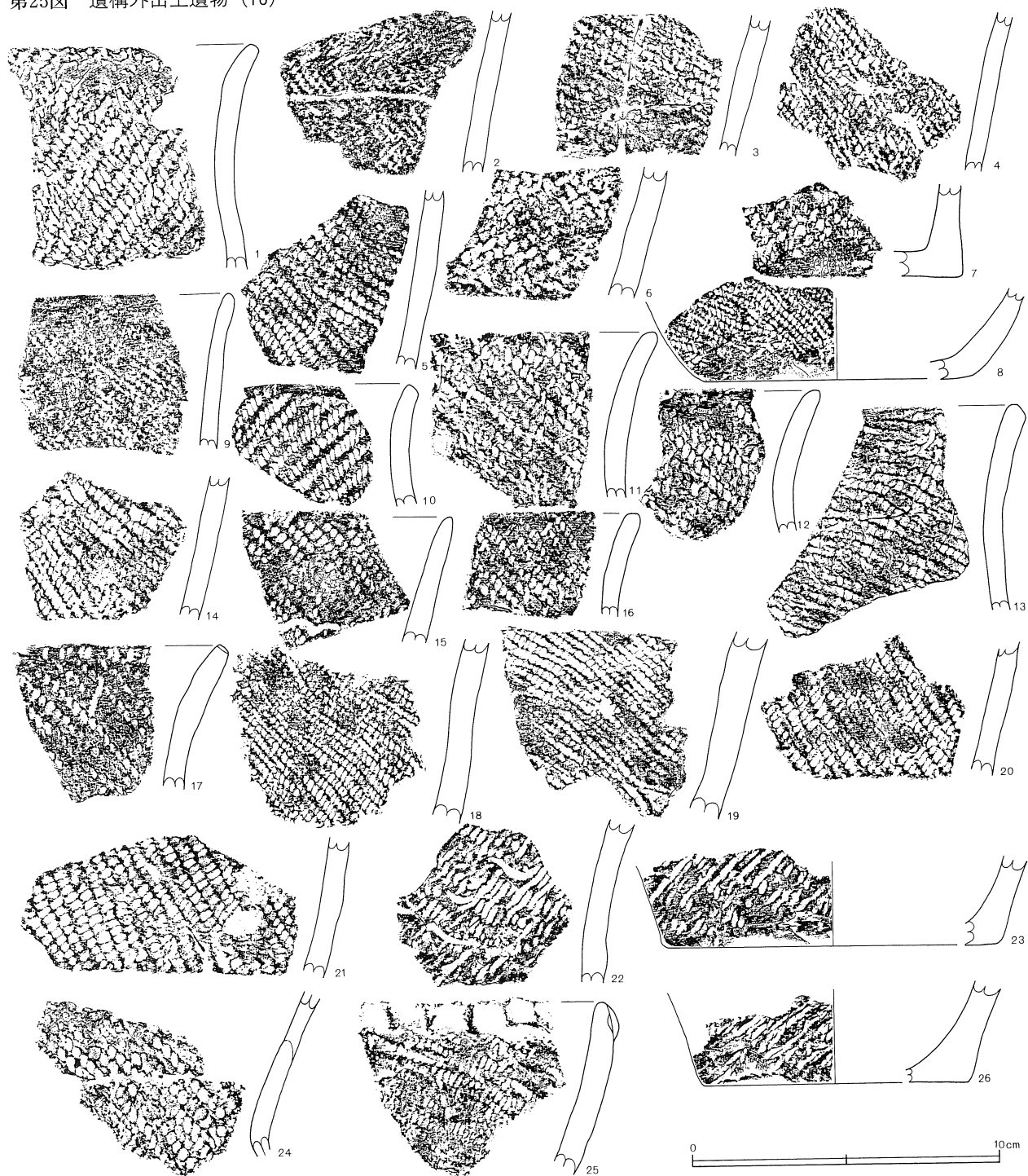
5-3類 (25)

口唇部直下に、竹管背面を用いた斜位の刺突を巡らせる。前期末のものと思われる。

第24図 遺構外出土遺物（9）



第25図 遺構外出土遺物 (10)



第Ⅴ群 (中期の土器群)

1 類 (第26図1・2)

勝坂・阿玉台系の土器群である。1は阿玉台式の口縁で、微隆起線による楕円形の区画内部に縦の刻みを充填している。2は勝坂3式で、文様帯の下端を1条の沈線で区画し、同心円文や平行沈線文が施文される。

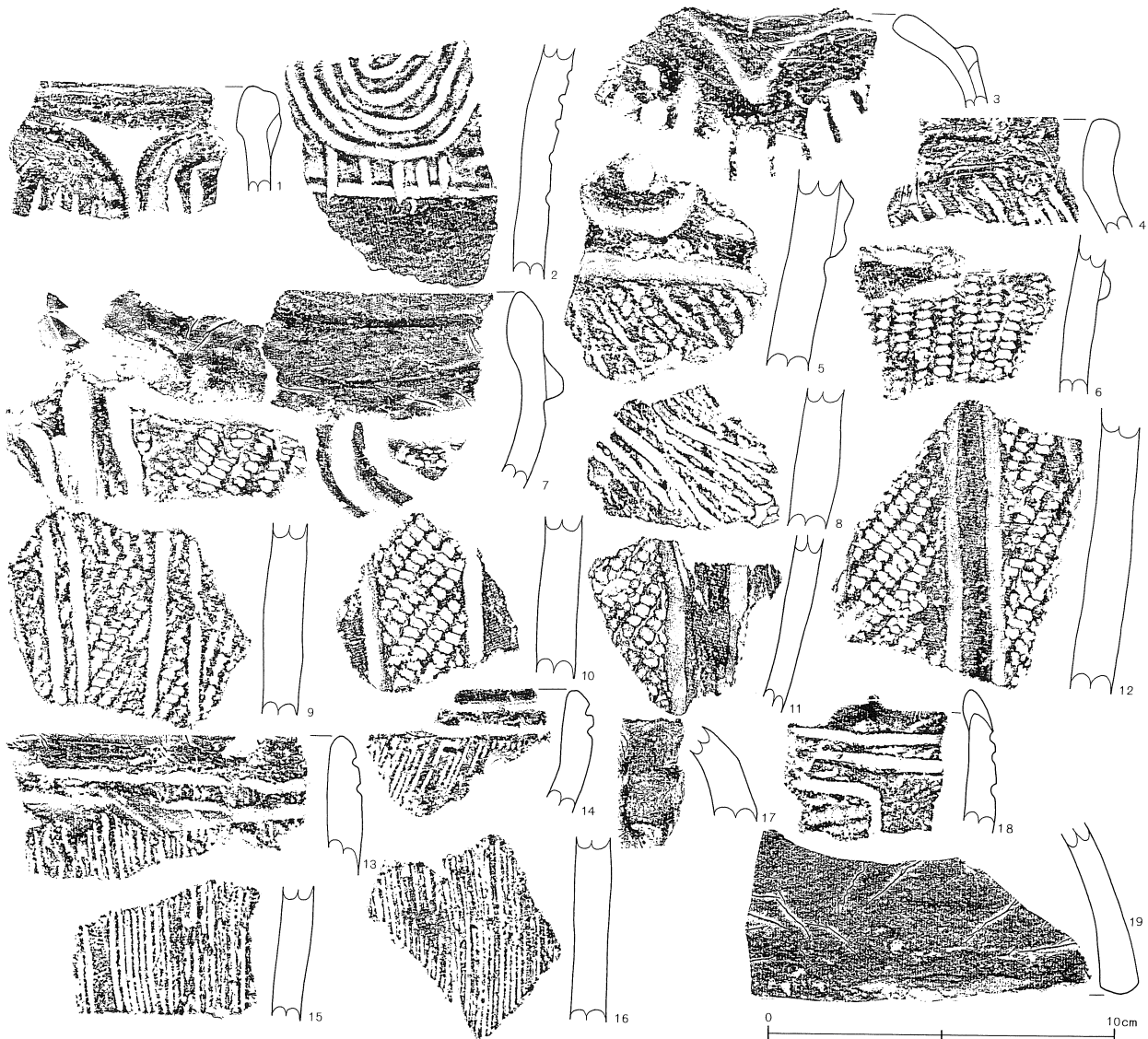
2-1 類 (第26図3~5)

曾利系の土器群である。

3は内側に強く屈曲する口縁である。櫛歯状の隆帯と円形の貼付文がみられる。4はRの撚糸文が施文される口縁部、5は胴部で、横位の隆帯と、中央に刺突のあるボタン状の貼付文を持つ。いずれも勝坂式終末期に近い特徴を持つ。

2-2 類 (第26図6~8)

第26図 遺構外出土遺物 (11)



加曽利E系の土器群である。6は口縁部と胴部を区画する横位の隆帯がみられる。7は口縁部区画内にクランク状の隆線文が描かれる。8はL横位回転の撚糸文で、口縁部区画内に施文されるものと思われる。いずれも加曽利E I式に位置づけられる。

9～12は懸垂文のみられる胴部で、加曽利E II式と思われる。また、18は口縁は低い突起を持ち、逆U字形の沈線の内部を擦り消している。加曽利E III式であろう。

13～16は櫛歯状工具による条線が施文されるものである。13・14は口縁部で、口唇部直下に2条の沈線を巡らせ、以下に縦位の条線を施文している。15は条線の間に縦位の空白部分を残し、この部分に研磨を施

して擦り消し懸垂文と同様の効果をねらったものと思われる。加曽利E III式と考えられる。

17は把手、19は器台形土器の裾の部分である。

第VI群 (後期の土器群)

1類 (第27図1)

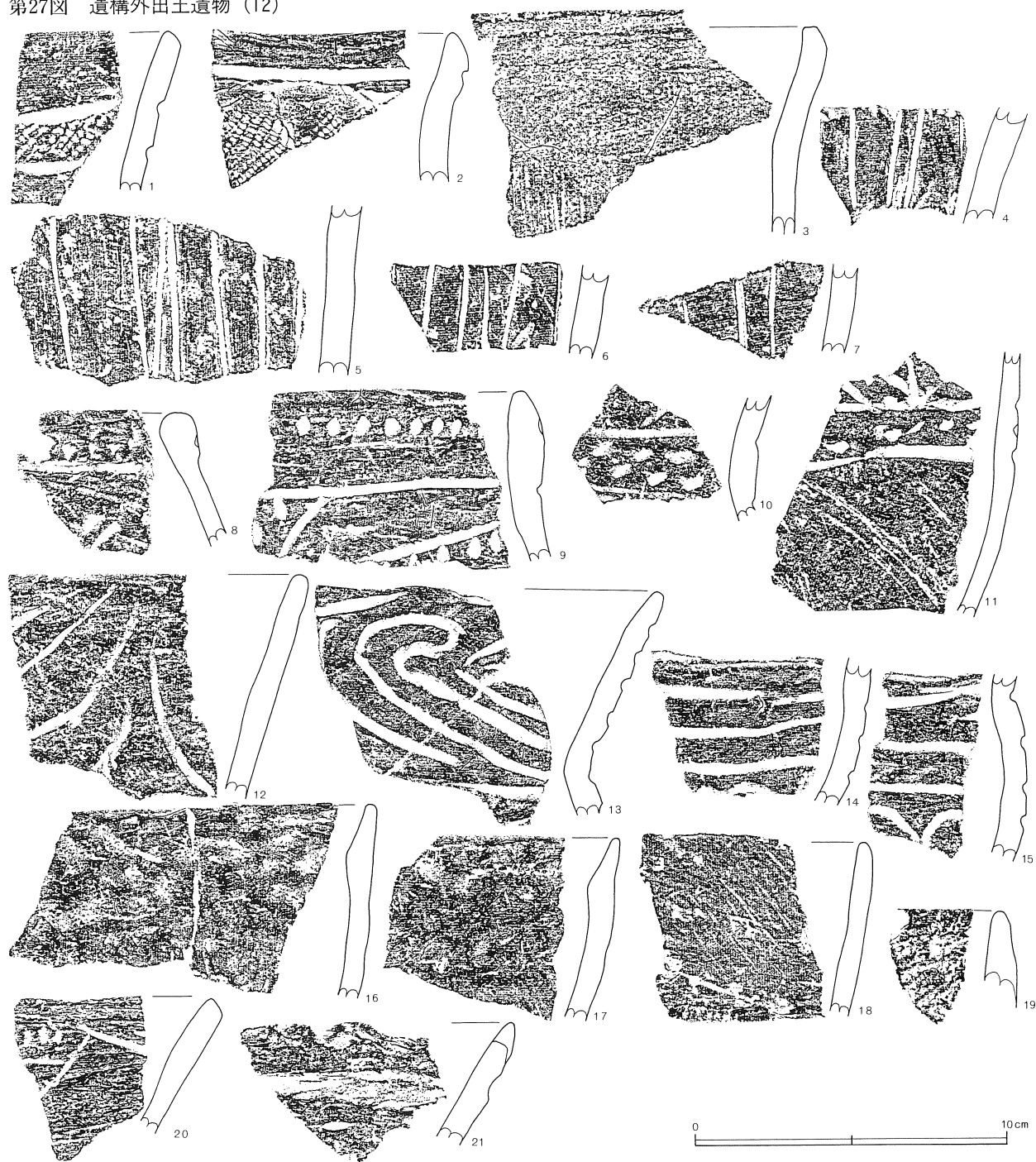
並行沈線間にRLの縄文が充填される。灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。称名寺式に位置づけられる。

2類 (第27図2～7)

2は口縁下に沈線が巡らされ、RL縦位回転の縄文が施文される。黒褐色を呈する。堀之内1式に位置づけられる。

3～7は丸棒状工具による縦位の集合沈線が施文される。3は無文の口縁だが、胎土や器面調整の特徴か

第27図 遺構外出土遺物 (12)



らここに一括した。いずれも堀之内1式であろう。

第Ⅶ群（晩期の土器群 第27図8～21）

晩期中葉の安行Ⅲc式が出土している。文様のあるものは頸部から胴部上半部に集中する。胎土は砂質で、器面に削りの痕を残している。

8～11は平行沈線間に米粒状等の列点を充填して文様を描き出し、また、口縁下にも同様の列点を巡らせるものである。

8は極端に口縁のすばまった砲弾形の深鉢の口縁で、紐線文系土器の系統を引くものである。口縁は肥厚して段を成し、三角形の刺突を巡らせている。

9も砲弾形の深鉢で、口縁はほぼ直立する。口唇は肥厚して米粒状の列点文が巡り、頸部との境を1条の沈線で区画する。10・11は胴部との境を区画する平行沈線で、内部に1段ないし2段の列点が充填される。11の胴部には斜位の削りが明瞭に残される。

第28図 遺構外出土遺物 (13)



第1表 遺構外出土石器観察表

番 号	出土地点	器 種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	備 考
第28図 1	3 E	石鏃	1.7	(1.3)	0.3	(0.5)	黒曜石	
2	3 C	石鏃	1.7	1.3	0.3	0.8	チャート	
3	4 E	削器	(3.6)	3.0	0.8	(10.2)	チャート	
4	2 B	石匙	5.8	1.9	0.7	10.0	チャート	
5	4 C	剥片	4.5	2.1	0.9	10.8	黒曜石	
6	3 C	打製石斧	8.7	5.3	1.9	98.1	ホルンフェルス	
7	3 B	打製石斧	(8.5)	5.2	1.9	(91.5)	ホルンフェルス	
8	表採	打製石斧	7.7	4.5	1.0	55.8	凝灰岩	
9	4 C	磨石	13.2	6.9	3.8	566.1	安山岩	
10	表採	石皿	(6.2)	(5.7)	3.5	(225.7)	砂岩	
11	3 C	凹み石	(10.0)	(9.5)	8.0	(1009.3)	安山岩	
12	3 C	石皿	(6.2)	(6.7)	3.9	(201.7)	安山岩	

12～15は棒状工具による幅広の沈線文のみが施文される土器である。12・13は口縁で、頸部で屈曲して直線的に開く。集合沈線による入り組み状のモチーフが描かれる。14・15は胴部上半部で平行沈線のみが重畳し、無文部との境に逆U字状の短沈線が巡らされる。

16～19は無文の口縁部である。いずれもほとんど直立するか、軽微に外傾する。

16・17は内そぎ状で内面稜を成し、18・19は口端部に丸みを帯びている。全体に横方向の研磨が施される。

20・21は浅鉢形土器の口縁である。

20は平行沈線による入り組み状のモチーフが描かれ、内部に列点文が充填される。21は無文で口縁直下に段を形成し、口端上に二個一単位の突起が付される。器面全体に横位の研磨が徹底され、焼成は良好である。

石器（第28図）

いずれも遺構外の遺物である。

第28図1・2は無茎の石鏃である。

1は片面からの調整剥離によって凹基がつくり出されており、片方の返しが欠損している。

2は両面からの剥離によって二等辺三角形がつくり出される。

同図3は削器で、一方の側縁部だけに片側からの細かな剥離を施し、刃付けを行っている。

4は石匙である。大きめの摘み部と、これに比べて小型で先細りする本体を持つ。両側からの荒い剥離よ

って挟入部がつくられ、本体の先端および両側縁部には両面からの細かな交互剥離によって刃がつけられている。

5は縦長のフレイクである。断面台形を呈する。

6～8は打製石斧である。

6は小判形を呈し、表面に自然面を残している。先端に片刃状の刃部をつくり出している。

7は撥形で基部を欠損する。片面をほとんど自然面のまま残している。両側縁部は両面からの交互剥離によって挟り部をつくり出す。先端部は両面からのごく荒い剥離によって刃部をつくり出している。基部は欠損後、側縁を再加工している。

8は楕円形で、やはり片面を自然面のまま残している。刃部と、両側縁の一部に両面からの交互剥離がみられる。

9は小判形の磨石で、両面使用され、また凹石として転用されている。

10・12は石皿片で、いずれも縁辺部である。12は凹石に転用されている。

11は凹石で、石皿片などを転用している可能性もある。

3 近世以降の遺構と遺物

第1号溝 (第30図)

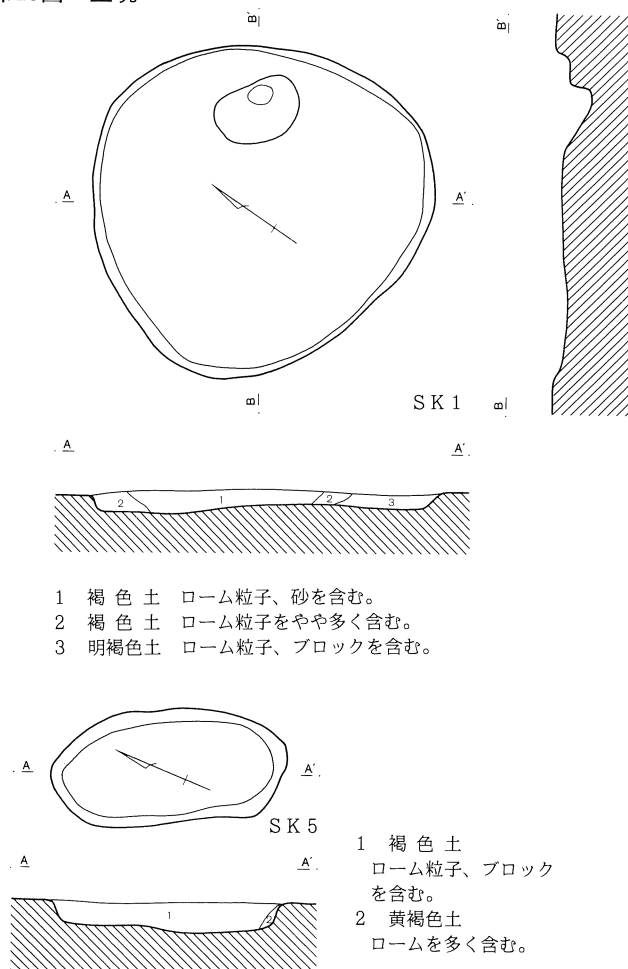
2 D、3 D、3 E、4 Eグリッドに位置する。断面葉研状である。はじめ2 Dから北東に走り、3 Dグリッドにおいて直角に曲がり南東方向に延びている。発掘した全長は25.2mで、幅3.0m、深さ0.8mである。南端で第4号溝と接している。時期は、出土遺物 (第33図) 等から近世以降と考えられる。

第2号溝 (第30図)

4 E、5 Eグリッドに位置する。断面葉研状である。発掘した全長は13mで、幅2.0m、深さ0.5mである。時期は、出土遺物などから近世以降と考えられる。

第3号溝 (第30図)

第29図 土坑



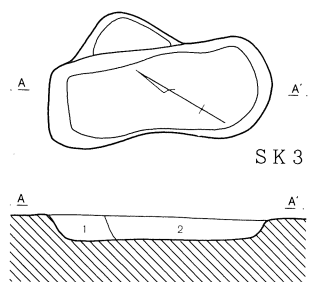
4 Fグリッドに位置する。浅い葉研状に2段に掘込まれている。発掘した全長は7.3mで、幅1.8m、深さ0.3mである。北端で第2号溝と接している。時期は、出土遺物等より近世以降と考えられる。

第4号溝 (第30図)

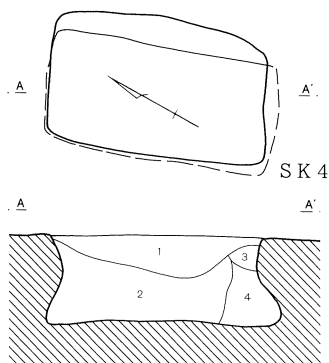
3 F、4 F、4 E、5 Eグリッドに位置する。発掘した全長は21.5mで、幅1.5m、深さ0.3mである。第2号溝と並行してこれに切られ、また西端で第1号溝に接している。時期は、出土遺物等より近世以降と考えられる。

第5号溝 (第31図)

3 B、3 C、4 Bグリッドに位置する。断面逆台形

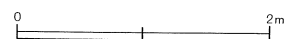


- 1 褐色土 ローム粒子、ブロックを含む。
2 黒褐色土 ローム粒子、ブロックを含む。

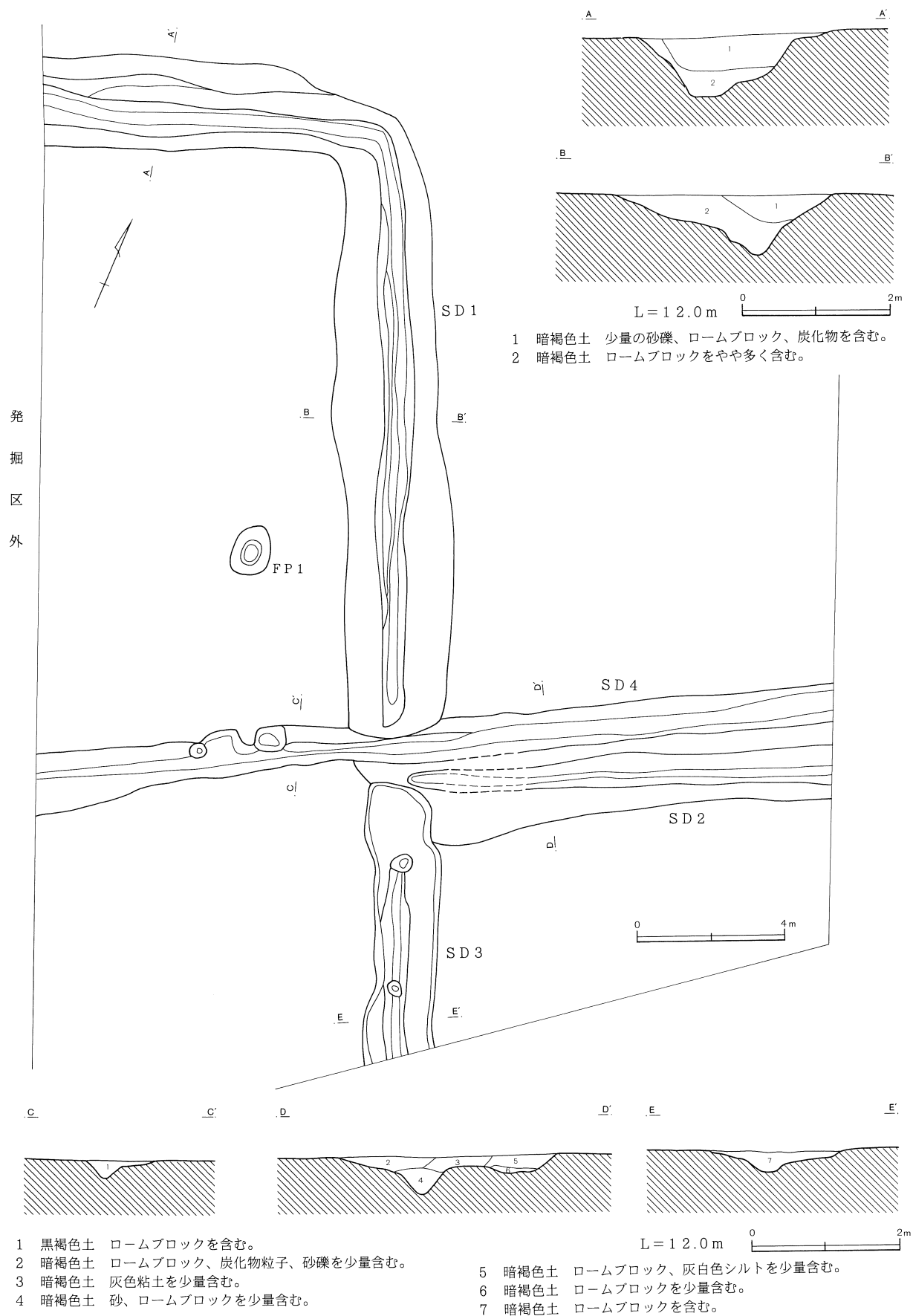


- 1 暗褐色土 ローム粒子、ブロックを含む。
2 暗褐色土 ローム粒子、ブロックを含む。
3 黄褐色土 ロームを多く含む。
4 暗褐色土 ローム粒子、ブロックを含む。

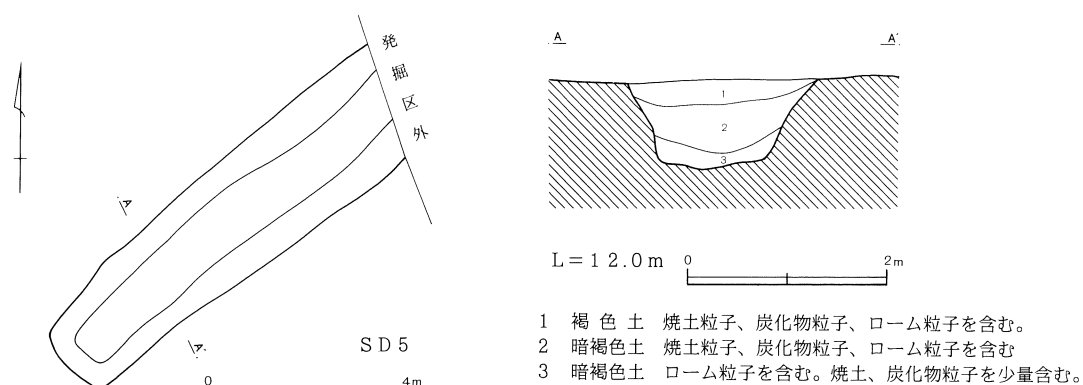
L = 12.2 m



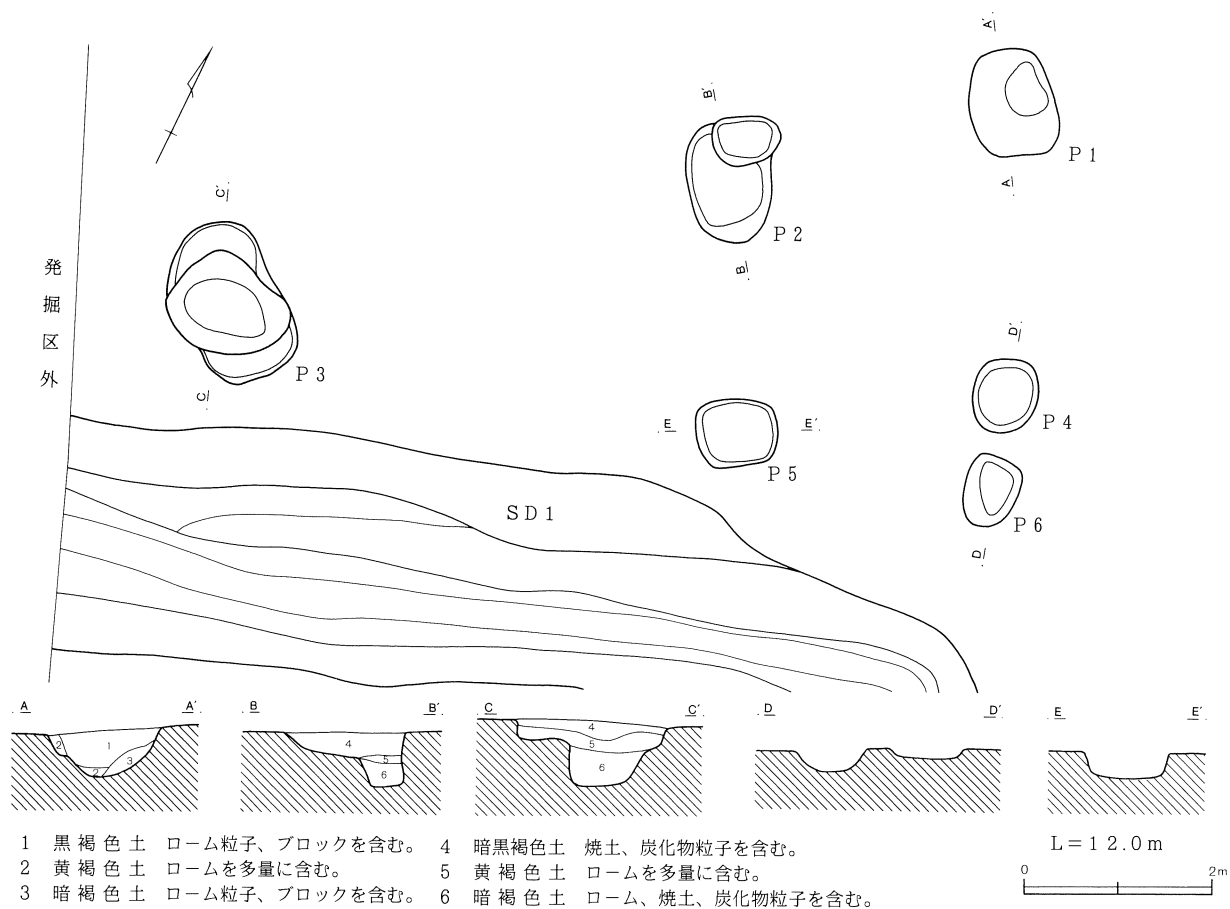
第30図 溝(1)



第31図 溝 (2)



第32図 柱穴群



で、発掘した全長は8.5mで、幅2.3m、深さ0.9mである。時期は、出土遺物等より近世以降と考えられる。

覆土の状態などから近世以降と考えられる。

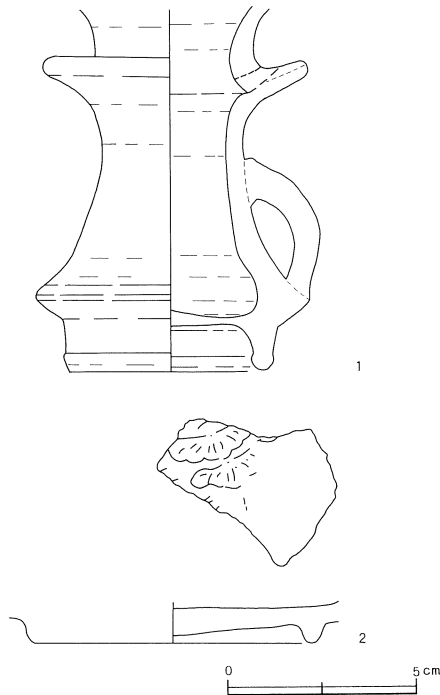
第1号土坑 (第29図)

3 Cグリッドに位置する。長径2.7m、短径2.6mの楕円形で、深さは0.2mである。主軸方向はN-33°-Wを指す。時期を判定し得る遺物は出土しなかったが、

第3号土坑 (第29図)

2 Cグリッドに位置する。長径1.8m、短径0.7mの隅丸方形で、深さは0.2mである。主軸方向はN-35°-Wを指す。時期を判定し得る遺物は出土しなかったが、覆土の状態などから近世以降と考えられる。

第33図 近世以降の遺物



第4号土坑（第29図）

2 Cグリッドに位置する。長径1.7m、短径1.1mの楕円形で、深さは0.7mである。

主軸方向はN-20°-Wを指す。時期を判定し得る遺物は出土しなかったが、覆土の状態などから近世以降と考えられる。

第5号土坑（第29図）

2 Cグリッドに位置する。長径1.8m、短径0.9mの楕円形で、深さ0.2mである。

主軸方向はN-23°-Wを指す。時期を判定し得る遺物は出土しなかったが、覆土の状態などから近世以降と考えられる。

柱穴群（第32図）

2 D、3 Dグリッドに位置する。東西約10m・南北約5m程の範囲に6基のピットが分布する。何らかの構築物に伴うものと思われるが、切り合いや攪乱のため全体の配置は明らかにし得なかった。遺物は出土していない。

近世以降の遺物

第33図1・2は近代の陶磁器である。III区第1号溝からの出土遺物である。

1は器種不明で、全体に黒色で釉薬が多くかかっている。底面にも釉薬がかかっており、内面にも若干の釉薬の垂れ込みが認められる。高台の設置面には、融解物が付着している。

2は皿かと考えられるもので、帯黄白色で、内面に灰釉を流している。底部内面には、松の絵柄を象眼している。またトチンの跡も見られる。ケズリ出し高台を持っている。

IV 久台遺跡

1 概略

久台遺跡は元荒川右岸、標高約12mの台地東縁辺に所在し、堂山公園遺跡の南隣に位置している。

両遺跡を乗せているこの台地は、岩槻支台がその東南隅で南北約500m、東西約100mほどの長方形に張り出した部分で、東縁はやや急峻な斜面をはさんで元荒川沿いの低地に至り、南はささら遺跡の所在する南東向けの緩斜面を経てごく浅い谷地形が入り込む。

北は現堂山公園の敷地北縁で急峻な崖となって、元荒川から入り込んだ低地部に面している。この低地については前段堂山公園遺跡の概略で触れたように、比較的最近まで沼沢地として残っていたとのことである。

久台遺跡はこの台地の中央平坦部から南縁にかけて広く展開している。この台地縁辺には櫛歯状に小規模な谷がいくつか入り込むものと思われ、今回調査した堂山公園遺跡と久台遺跡の間には現在市道に伴う切り通しが走っているが、調査区内における等高線の走行状態を見るかぎり、両遺跡はやはり本来的に谷地形により分断されていたものと思われる。

遺跡の基本層序はほとんど堂山公園遺跡のそれに準ずるが、今回の調査地点はほぼ全面的に宅地に伴う攪乱に覆われており、縄文時代の遺物包含層である暗黄褐色土層は部分的に残存するもののほぼ壊滅に近い状態であった。表土も薄く、多量の瓦礫を含んでいる。

遺構調査終了後、試掘坑を設定してロームの掘り下げを行ったが、旧石器時代の遺物は発見されなかった。

ロームは第2黒色帯上面までソフト化が進行しており、また6M・7M・8Mなど谷地形に面する部分では水つき状であった。

昭和56・57年度に行われた久台遺跡の発掘調査では、縄文時代後期初頭の大規模な集落跡が発掘されていることから、今次調査でも同時期の遺構、遺物の検出が予想されたが、実際に検出された縄文時代の遺構は晚期中葉の土坑1基のみであり、後期の遺構群は台地南の平坦地から緩斜面へと移行する部分を中心に展

開していたことが明らかになった。

縄文時代の遺物は土坑覆土のほか、近世以降の遺構覆土、攪乱、表土中などからごく少量が出土したが、一点のみ完形の定角形磨製石斧が出土した。

前回調査では古墳時代の住居跡が1基のみ調査されたが、今回同時期の遺構・遺物は検出されていない。

前回、平安時代と推定されたカマドを伴う住居跡及び住居跡状遺構は、今回の調査で全体の調査が完了した。前回同様時期判定可能な遺物は出土しなかった。

近世以降の遺構は、前回調査区域から延長する溝1条のほか、これにからむ大小の溝3条、土坑5基が検出された。溝はいずれもきわめて近接した時期の土地区画に基づくものと思われ、配置には統一性が感じられる。これらのうち大規模なものは断面葉研状の2段の掘り込みをなしている。土坑は柱穴状のものからごく浅いものまでさまざまであるが、うち2基は地下室（むろ）であり、谷地形に面して構築されていた。

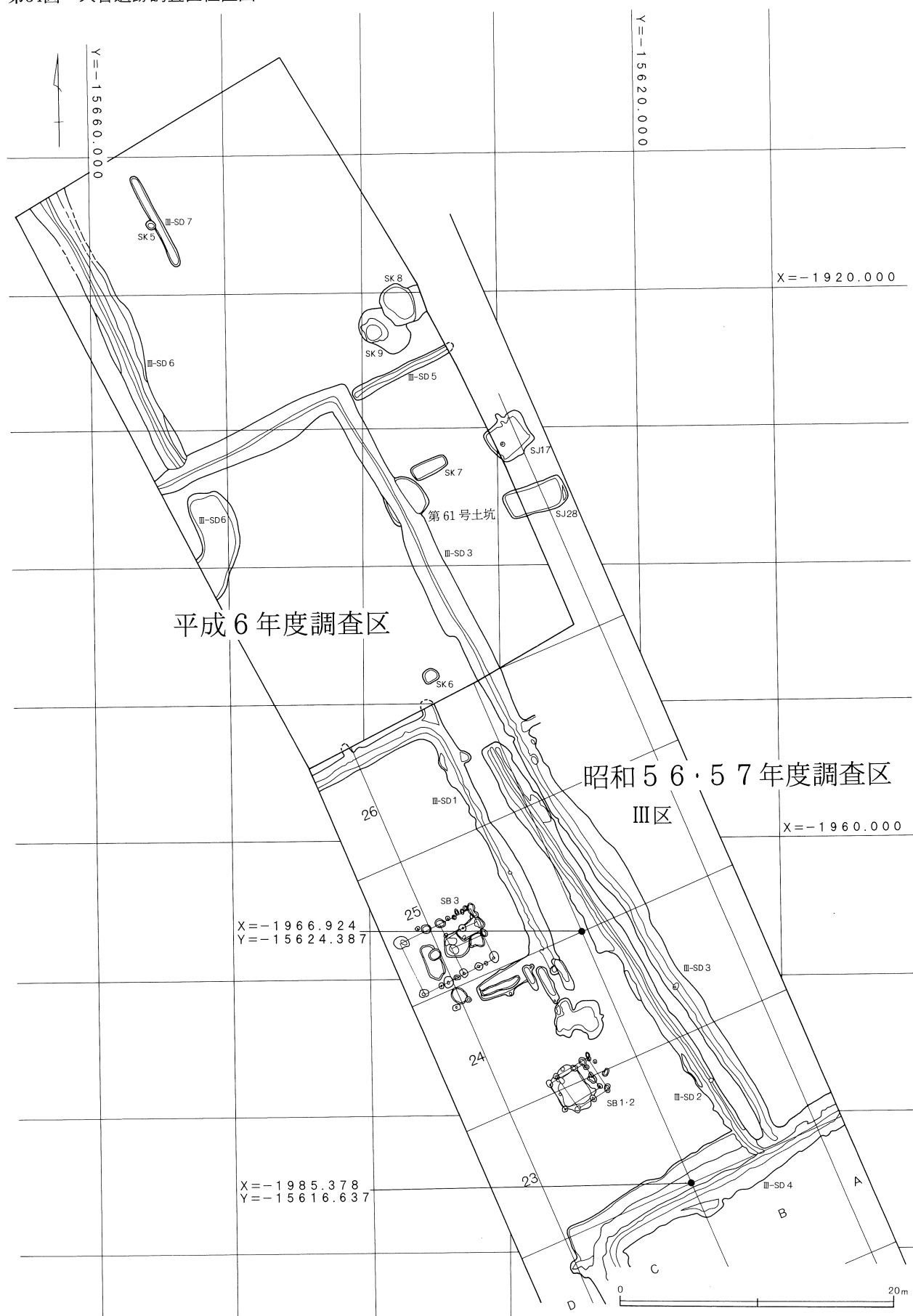
該期の遺物は陶磁器片のほか内耳鍋、播鉢、ほうろく、灯明具の類である。

遺構の名称は久台遺跡Ⅲ区（橋本1984）の名称に準じた。住居跡については前回調査したもの以外の検出はなかった。溝については前回調査を行ったⅢ区第3号溝以下、順次名称をつけた。また縄文時代の土坑については前回の報告と連番の第61号土坑を付け、近世以降の土坑については同様にSK5から順次付けた。

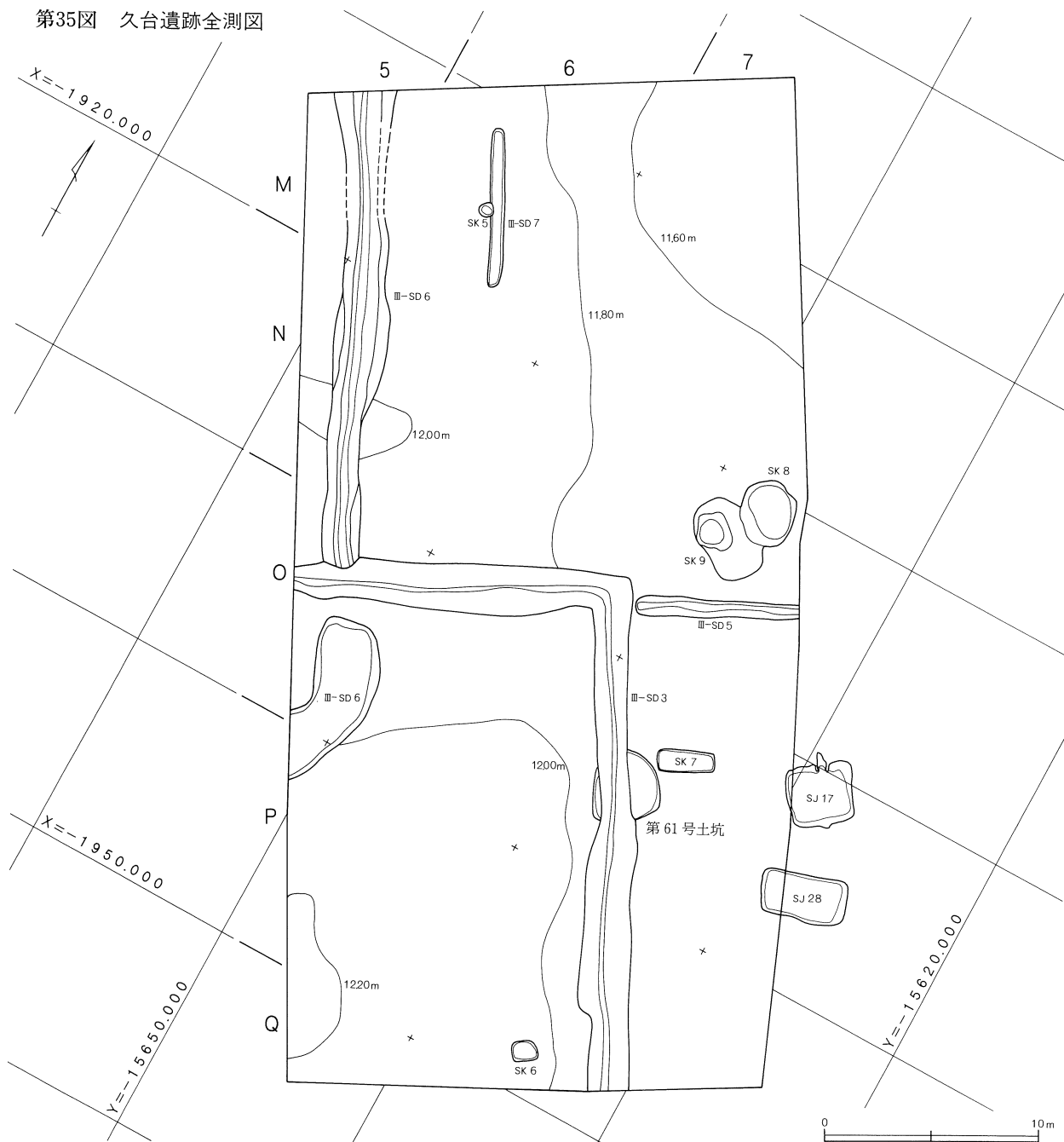
なお、土坑については統一を図るため、以下のよう

新番号	旧番号
SK5	SK8
SK6	SK10
SK7	SK11
SK8	SK12
SK9	SK13
第61号土坑	SJ29

第34図 久台遺跡調査区位置図



第35図 久台遺跡全測図



2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土坑

第61号土坑 (第36図)

8 Oグリッドに位置する。不整円形を呈するものと思われるが、プラン中央をⅢ区第3号溝に切られている。規模は長径3.1m、短径3 m、深さ0.2mである。

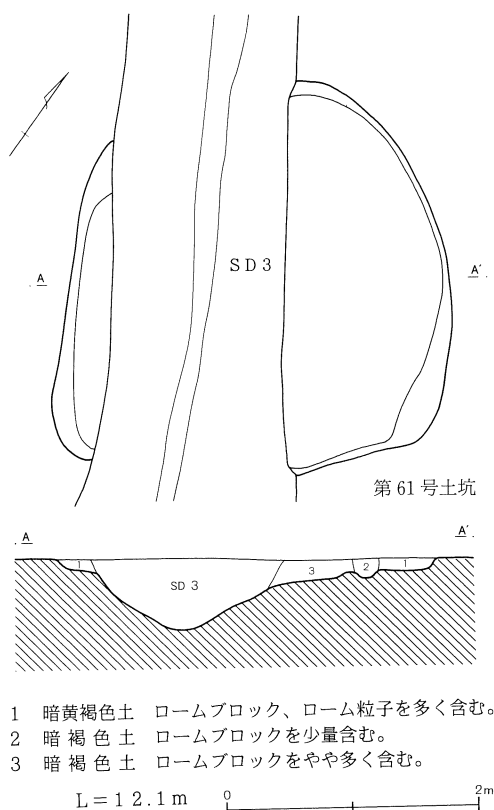
遺構検出当初は住居跡状遺構として調査を開始したが、炉跡・柱穴・壁溝などの施設が一切検出されなかったため、最終的に土坑と判断した。主軸方向はN-

53°-Eである。

覆土中から縄文土器小破片数点が出土したが、いずれも無文で、縦位の削りのみられる胴部下半部であり、安行Ⅲc式である。また、本土坑と重複する部分の溝底面からも同様の土器片が出土した。

第37図1は土坑覆土中の遺物のうち唯一文様を有するもので、沈線による区画内部に米粒状の列点が施文される。土坑の構築時期は、出土遺物から縄文時代

第36図 土坑



晩期中葉と考えられる。

(2) 遺構外出土遺物 (第37図)

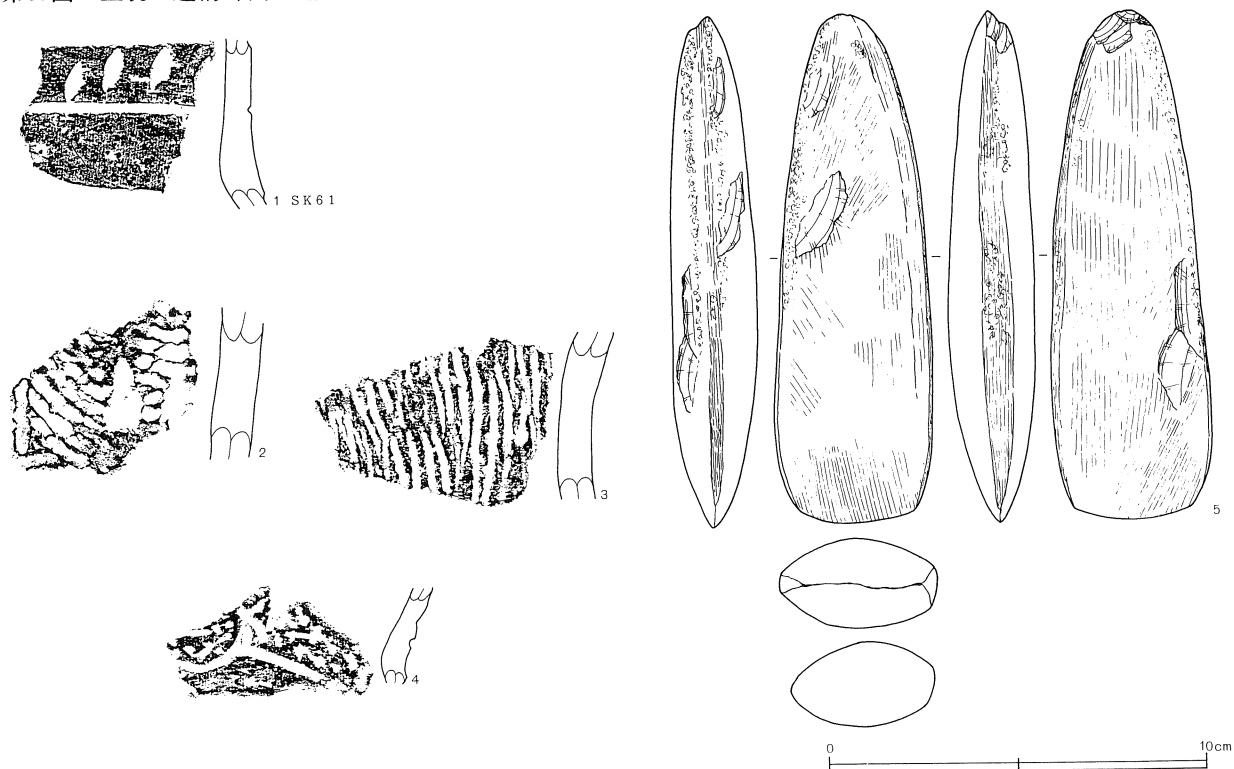
今回の調査区では、縄文時代の遺物包含層はほとんど失われていたが、それでも攪乱や近世以降の遺構覆土内から少量の遺物が得られた。

2～4は縄文土器である。2は加曾利EⅢ式で、L Rの縄文が縦位に施文され、左端に懸垂文の一部がみられる。3は加曾利EⅠ式で、縦位の撚糸文が施文される。4は入り組み三叉文で、三角形の刺突が充填される。安行Ⅲc式であろう。

5は凝灰岩製の磨製石斧である。断面が三味線胴形の、いわゆる定角形磨製石斧で、基部の片面に数度にわたる剥離がみられる。

表裏の平坦面に研磨調整の際の線状痕がみられるが、数カ所に石材の加撃整形の際つけられた周縁部から中央に向かう剥離が消しきれずに残り、また両側縁の角の部分には研磨調整直前の敲打整形に伴う細かな傷があばた状に残されている。重量は212.95 gを量る。

第37図 土坑・遺構外出土遺物



3 平安時代の遺構と遺物

今回、平安時代に属すると思われる住居跡1基、住居跡状遺構1基の調査を行った。いずれも前回調査では未買収地にかかっており、部分的な調査にとどまった遺構である。

今次調査では未調査部分の発掘と同時に、埋め戻された前回調査部分の再発掘を行い、あらためて記録作業を行ったうえで、前回の調査記録との照合を試みた。

第17号住居跡（第38図）

90グリッドに位置する。本住居跡は前回の調査で未買地にかかっていた西端コーナー部分の一角を調査し、前回の調査記録と照合したものである。

隅丸方形を呈し、北西方向にカマド1基を伴う。規模は長径3m、短径2.7m、深さ0.4mである。主軸方向はN-35°-Wを指す。

今回の調査では柱穴などの施設は検出されなかった。今回、本住居跡に伴う遺物は出土しなかった。また前回調査時にも鉄鎌片一点が出土したほか、時期判定可能な遺物は得られていない。このため、住居跡の正確な時期は不明であり、ここでは単に歴史時代の遺構と

記すにとどめる。

第28号住居跡状遺構（第38図）

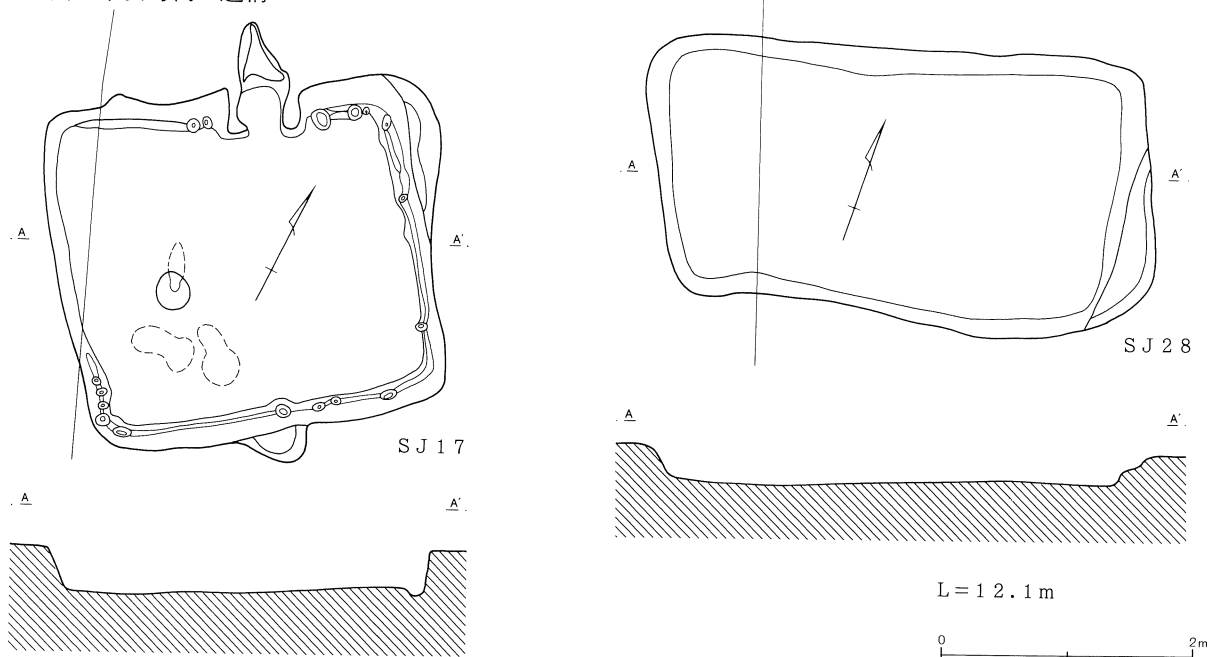
90グリッドに位置する。第17号住居跡同様、前回未買部分を補足調査したものである。

隅丸長方形を呈し、規模は長径3.9m、短径2.3m、深さ0.2mである。主軸方向はN-72°-Eを指す。

前回・今回の調査を通して、カマド・柱穴・壁溝などの施設類は一切検出されていない。

遺物としては今回土師器の小破片数点が出土したのみで、時期判定可能な遺物は出土しなかった。このため、住居跡状遺構の性格及び時期は不明であり、ここでは単に歴史時代の遺構と記すにとどめる。

第38図 平安時代の遺構



4 近世以降の遺構と遺物

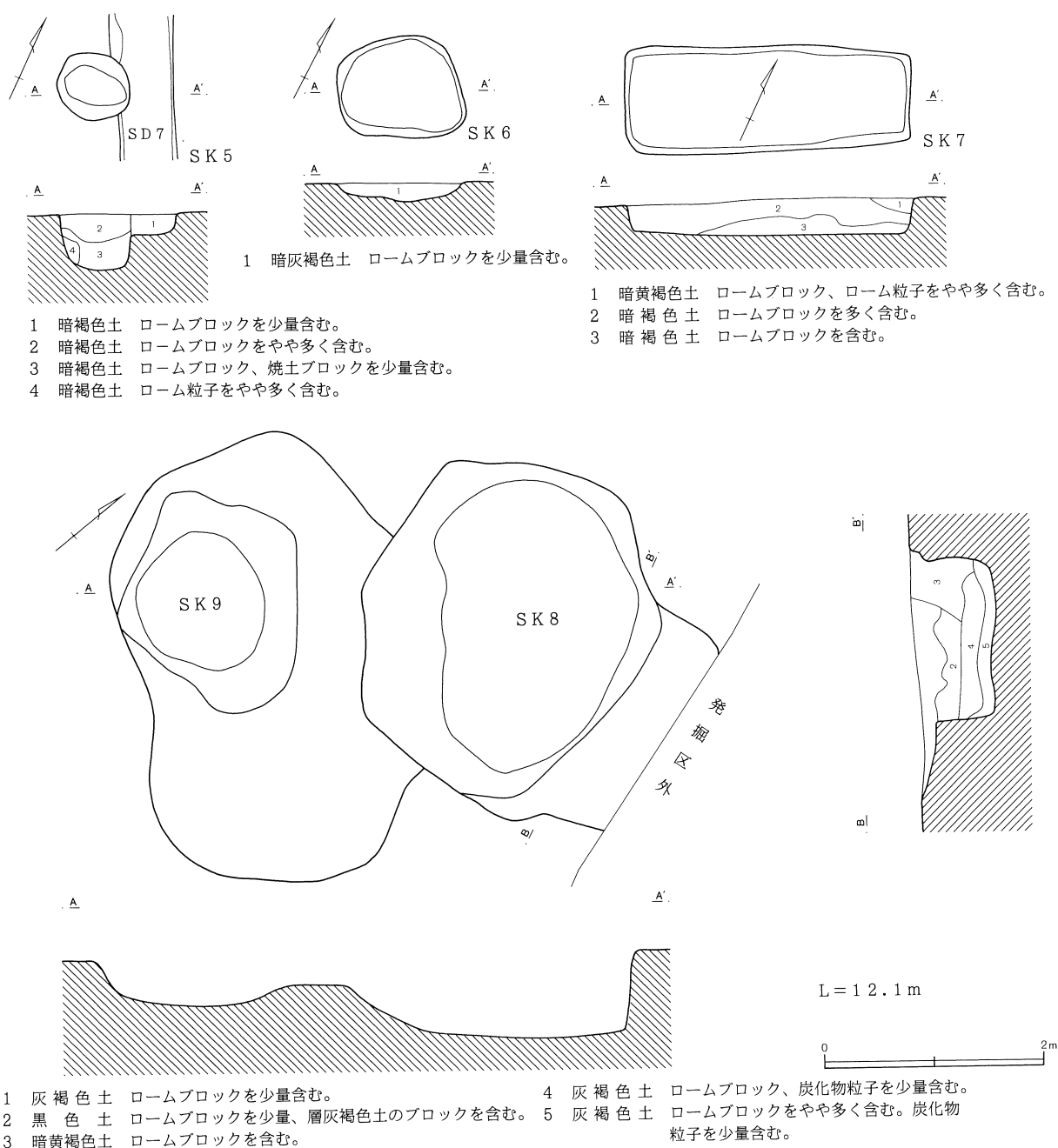
第5号土坑（第39図）

6 Mグリッドに位置する。長径0.7m、短径0.6mの不整円形で、深さ0.5mである。主軸方向はN-65°-Eを指す。III区第7号溝を切っている。遺物は出土していない。

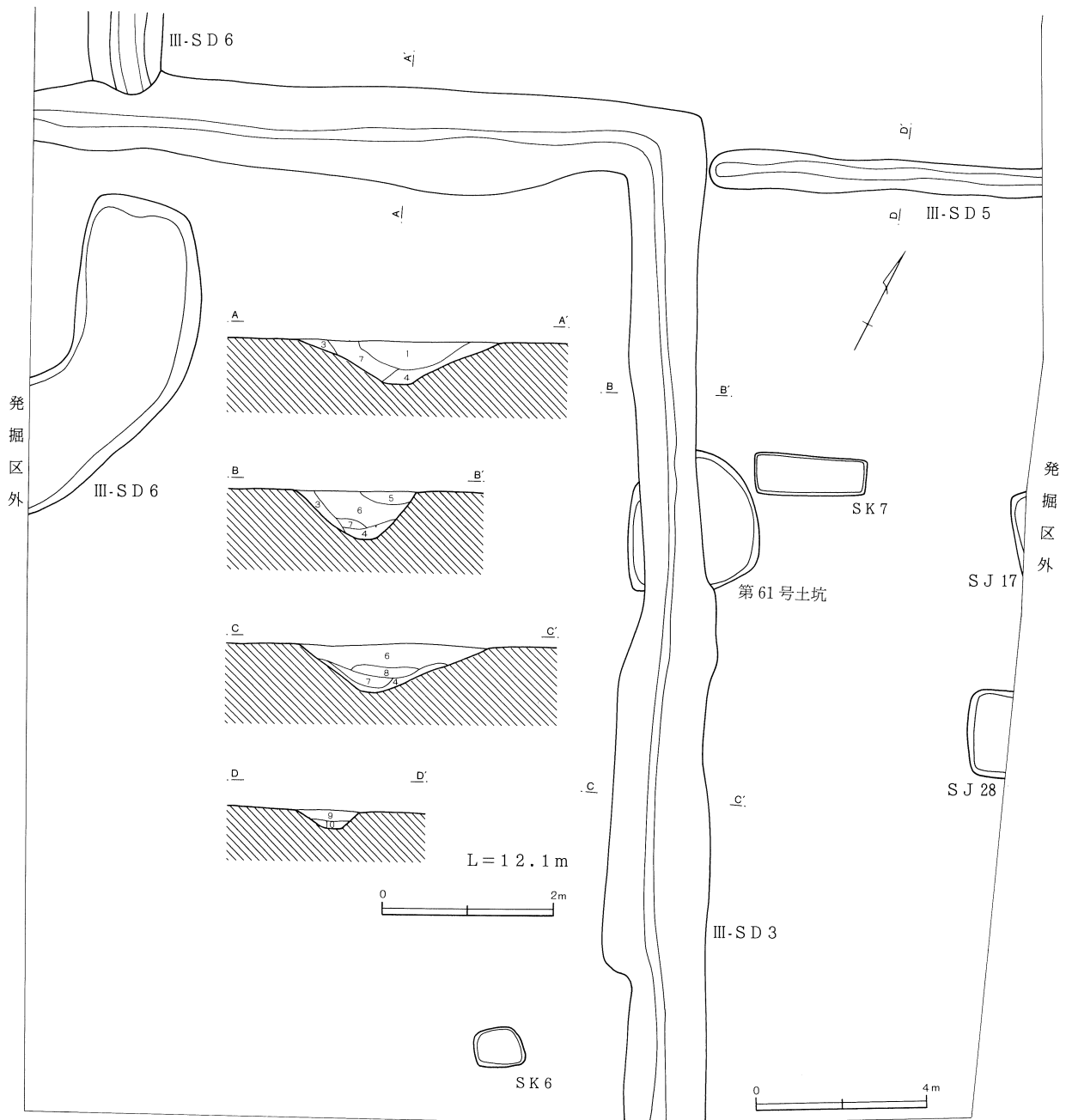
第6号土坑（第39図）

8 Pグリッドに位置する。長径1.1m、短径0.9mの不整円形で、深さ0.2mである。主軸方向はN-65°-Eを指す。遺物は出土していない。

第39図 土坑



第40図 溝 (I)



- 1 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックをやや多く含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームを多く含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックをやや多く含む。

- 6 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 7 暗褐色土 ローム等ほとんど含まない。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子、ブロックをやや多く含む。

第7号土坑 (第39図)

8 Oグリッドに位置する。長径2.6m、短径1.0mの隅丸長方形で、深さ0.3mである。主軸方向はN-65°-Eを指す。

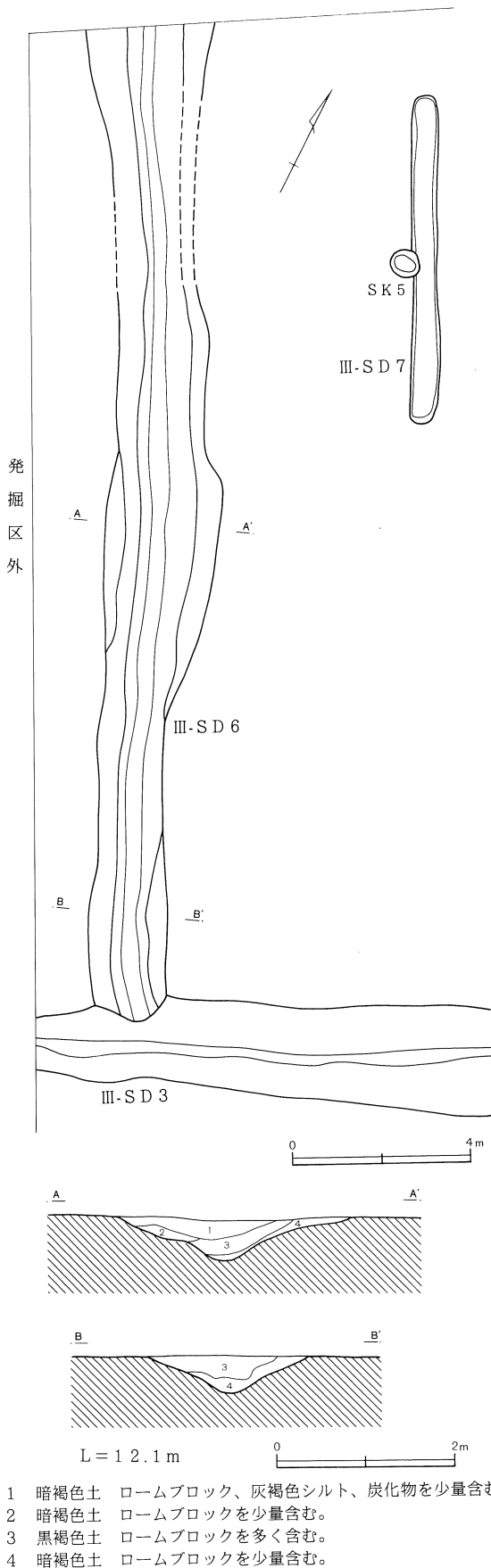
時期は、出土遺物 (第43図17) 等から近世以降と考えられる。

第8号土坑 (第39図)

8 M、8 Nグリッドに位置する。長径3.0m、短径2.5mの不整形円で、深さ0.8mである。主軸方向はN-17°-Wを指す。

いわゆる地下室で、出入口様の施設はみられない。また、本来開口部が若干閉じる袋状の施設であったと

第41図 溝(2)



思われ、土層断面では上部壁面が崩落した状態が観察された。第9号土坑と接するが、両者の新旧関係は不明である。

第9号土坑 (第39図)

7 N、8 Nグリッドに位置する。長径2.0m、短径1.7mの不整円形で、深さ0.7mである。周囲に最大径4.1mの不整形のごく浅い掘り込みを伴っている。主軸方向はN-55°-Wを指す。第8号土坑同様、地下室と思われる。

第8・9号土坑の時期は、出土遺物(第42図1・2・6~9、第43図11~16)等から近世以降と考えられる。第8号土坑と接するが、両者の新旧関係は不明である。

III区第3号溝

6 O、7 O、7 N、8 O、8 Pグリッドに位置する。6 Oグリッドから7 Nグリッドにかけて東北東へ延び、東南東へとほぼ直角に向きをかえる。今回調査した部分の全長は37.5m、最大幅2.5m、深さ約0.6mである。

時期は、出土遺物等から近世以降と考えられる。III区第6号溝と接しており、同時期のものと考えられる。また、第61号土坑を切っている。

III区第5号溝

7 N、8 Nグリッドに位置する。今回調査した部分の全長は8.0m、幅0.7m、深さ0.3mである。

時期は、出土遺物(第42図10)等から近世以降と考えられる。

III区第6号溝

5 M、6 M、6 N、6 O、7 O、6 P、7 Pグリッドに位置する。発掘した全長は29m、幅3m、深さ0.5mである。

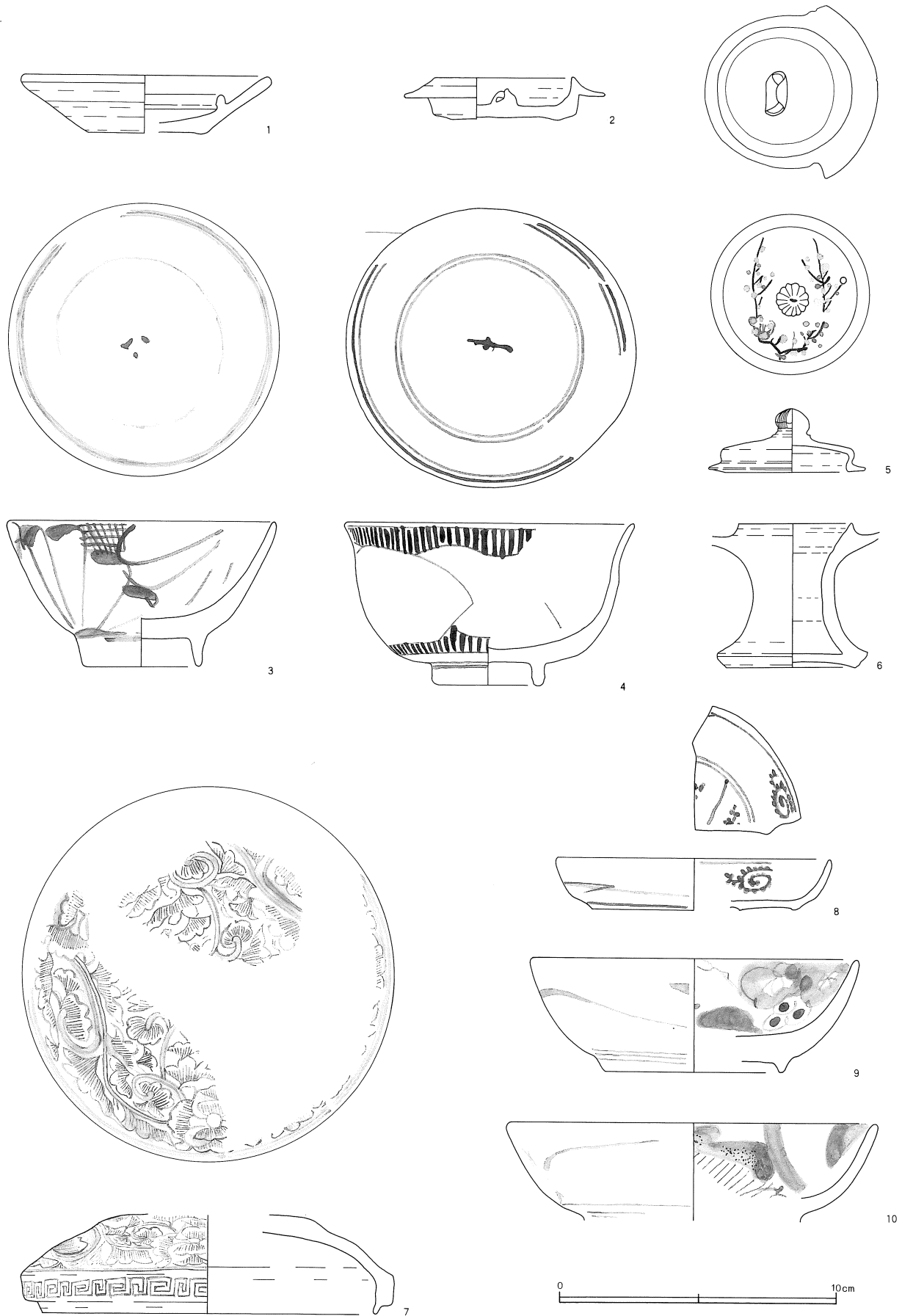
時期は、出土遺物(第42図3・4)等から近世以降と考えられる。III区第3号溝と接し、同時期のものと思われる。

III区第7号溝

6 Mグリッドに位置する。全長7.3m、幅0.8m、深さ0.3mである。

遺物は出土していない。第5号土坑に切られている。

第42図 近世以降の遺物（Ⅰ）



近世以降の遺物（第42・43図）

17は第7号土坑、1・2・6～9・11～16は第8・9号土坑、10は第5号溝、3・4は第6号溝、5は遺構外からの出土である。いずれも近世・近代の陶磁器である。

1は灯明皿と考えられる。全体に茶褐色で、体部外面の下位は釉薬のかかりが悪い。釉薬ははけ塗りかと考えられる。

2は容器の蓋と考えられる。釉は黄茶色で、内面には小さい摘みが付けられている。釉は外面のみにかけられている。

3・4は茶碗で、3はやや青白色、4は白色釉がかかり、模様は3では青灰色。4は青色で描かれている。

5は急須の蓋と考えられる。端の方に穴がみられ、中央には夏目玉状の摘みがある。摘みの頂部には箔押しが認められる。また、紅梅・白梅の模様がみられる。

6は燭台かと考えられる。内面に油煙付着の痕跡が認められる。

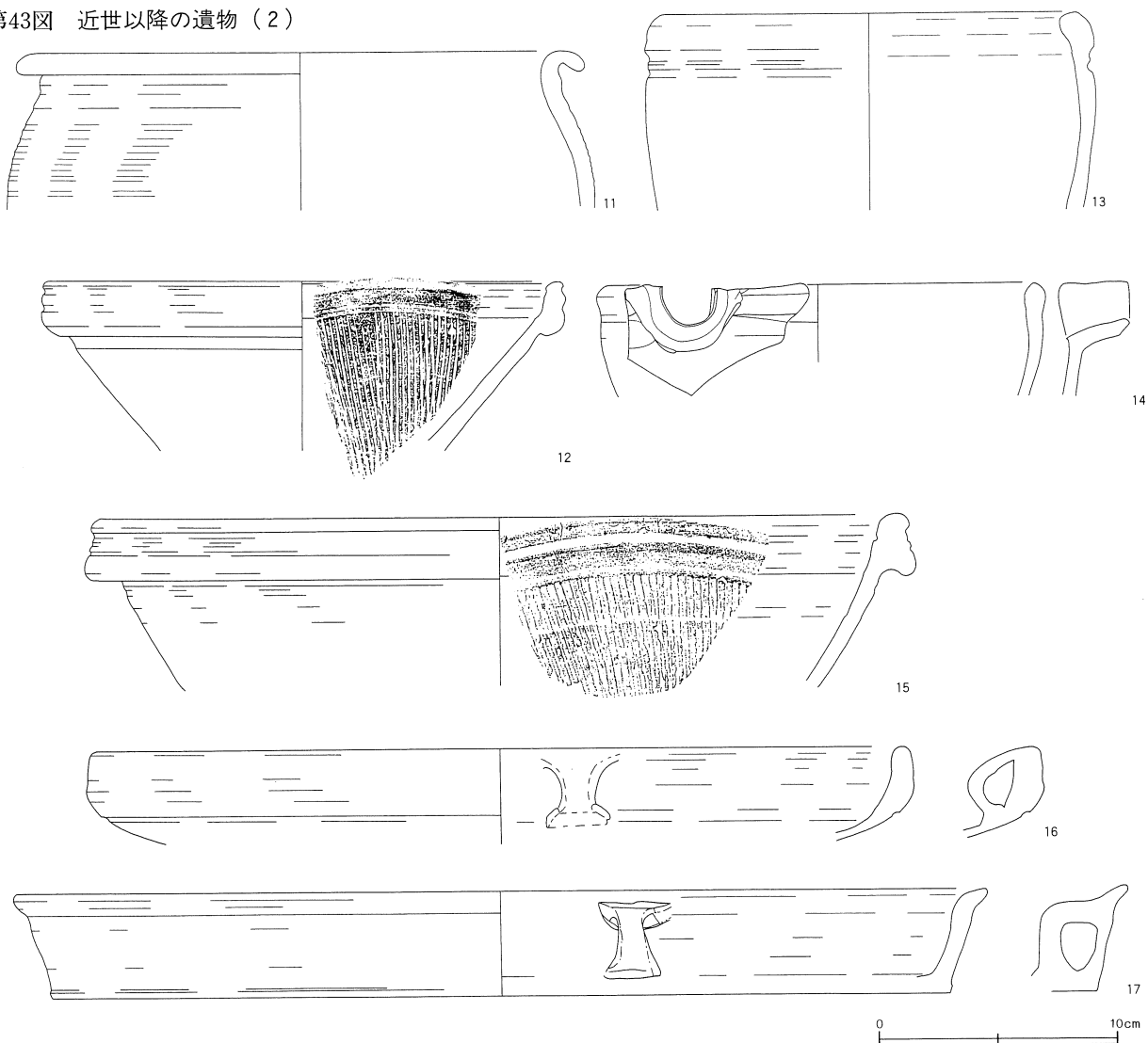
7は容器の蓋で、側面に雷文が認められる。

8～10は小鉢である。8に比べて9・10にはやや古い様相が認められる。

11・13は甕、12・15は播鉢、14は片口である。

16・17は内耳のほうろくで、16は内面が黒変し、耳は板状の粘土を使って作られている。17は口縁端部が外反している。耳は16同様に板状の粘土を用いて作られている。17はやや古そうな様相を呈している。

第43図 近世以降の遺物（2）



V 結語

1 堂山公園遺跡の炉穴について

堂山公園遺跡からは早期末葉に属すると思われる7基の炉穴が発見された。これらのうち6基は1B・2Bグリッド付近に集中して一群をなし(A群)、残る1基は3Eグリッドに単独で存在していた(B群)。

A群の炉穴の構成は、

I類：単独のもの

4基(FP3・4・5・7)

II類：複数の炉床が存在するもの

2基(FP2・6)

であった。

I類は長軸1.5m前後の楕円形で、内部に1箇所のみ燃焼部が設けられる。燃焼部の位置は必ずしも掘り込みの一端に偏っておらず、したがって燃焼部に対応する足場の存在も明確ではない。

竪穴住居中心の居住形態への移行を前に、煮炊きのための施設である炉穴の構造が崩れつつあったことが

想像される。

複合型であるII類にはI類を長軸方向に拡幅した結果であるFP6と、隅丸方形の掘り込みの対角線上に、新旧は不明ながら2箇所の燃焼部が設けられたFP2が存在した。

今回発掘された範囲ではA群の炉穴の複合は2基が上限であった。本遺跡における炉穴の使用頻度の低さを指摘することができよう。

B群に属する炉穴はFP1が1基あるのみである。ただし、調査区南半の大半が攪乱に覆われている点や、FP1自体の残存状態が非常に悪い点を考えれば、周辺に同時期の炉穴が存在した可能性もある。

このように堂山公園遺跡の炉穴は、1基から数基を単位とした小群が台地北縁を中心として散在していたものと考えられる。

2 堂山公園遺跡の住居跡について

(1) 住居跡出土遺物の時期

今回の調査では2軒の住居跡が発見された。いずれも縄文時代前期の諸磯a式期に属するものと思われた。

第2号住居跡からは米字文や肋骨文の系譜を引く、前段階の土器群の特徴をとどめている土器が若干出土している。

第10図15は地文縄文上に半截竹管による樹枝状のモチーフが施文されている。文様帯の上下は同一施文具の沈線によって区画され、区画外には縄文が施文されていない。鷺森遺跡15号住居跡・阿久遺跡住居址74の出土土器に類例がみられる。

樹枝状モチーフの斜行沈線が間遠であること、円形竹管による刺突ではなく指頭による圧痕が押捺されることなど相違点もあるが、ほぼ同一時期であると考えられ、阿久遺跡例が繊維土器を伴っていることから諸

磯a式期でも古相を示すものと思われる。

よく似た沈線が施文される第10図14・16・17・20、肋骨文の同図18・19、口縁直下に楕円文がみられる同図11、無節の縄文が施文される第9図3も同時期のものと考えられ、無文の浅鉢である第10図22も併せて、本住居跡は諸磯a式古段階のまとまった資料を出土しているものと考えられる。

一方第1号住居跡からは少量であるが変形木の葉文系の文様が施文される土器片が出土している。第7図9は木の葉文の末端を上下に連結する連結木の葉文、同図10は三角文と組み合わせさせた初期の入り組み木の葉文と思われる。塚屋遺跡12号住居跡に類例を見ることができ、また上南原遺跡第12号住居址もこれに近い時期のものであろう。

諸磯b式への移行期の土器群であり、諸磯a式中も

つとも新しい段階の資料であると思われる。

第1号住居跡・第2号住居跡のいずれも、出土土器の大半が、遺構外出土遺物第IV群5類とした地文のみの土器片であり、また条痕文系の土器や諸磯b・c式などの、住居跡とは時期の異なる遺物の混入が認められるため断言はできないが、文様のある破片をみる限り、2軒の住居跡は第2号→第1号の順に営まれた可能性が高い。

なお、本遺跡の住居跡群と同時期の近隣の遺跡としては、現在までに早・前・中期にわたる住居跡38軒が発見されている、蓮田市天神前遺跡を挙げることができる。

(2) 住居跡の構造

今回の調査で発掘された住居跡はいずれも隅丸長方形で、壁寄りに1基の炉跡が発見されている。

第1号住居跡は四本主柱の住居跡で、床面中央部には主軸に直交してさらに一対のピットが存在している。壁溝や壁柱穴などの施設は見つからなかった。北東コーナーの主柱穴(P4)の外側にもごく浅いピット(P5)があるが、これが立て替えや拡張を意味するもの

であるかは不明である。

床面中央で見つかった一対のピットは、金子直行が、黒浜式期の住居跡構造の分析上で「CTP」と呼んだものに相当すると思われる。住居跡の床面の中央よりやや南寄りに、主軸からほぼ等距離をおいて対峙しており、ここに何らかの入り口部施設を想定することも可能である。

また、同じ主軸線上の北壁寄りには炉跡が存在している。炉跡は、北壁に近接した2基の主柱よりもさらに壁寄りに設けられている。

第2号住居跡は東半分を後世の攪乱によって破壊されており、全体の柱穴配置は不明である。主軸線の西に若干の距離をおいてP2～P5が集中していたため、主軸線をはさんだ東にも、これらに対応する柱穴が存在したものと思われる。

主軸線上の北壁寄りには炉跡が存在しており、炉跡のさらに外側にも1基の柱穴が見つかった。柱穴は床面中央部をとりまくようにしてやや散漫に配置されていたものと思われ、第1号住居跡の定形化した柱穴配置とは対比的である。

3 堂山公園遺跡出土の縄文土器

本遺跡からは遺構内・遺構外合わせて3272点の縄文土器片が出土した。時期ごとの出土点数は以下の通りである。

早期前半	52点
早期後半	889点
前期前半	1049点
前期後半	1116点
(うち浮島・興津系)	55点)
中期	64点
後期	56点
晩期	46点

発見遺構の時期からみて当然のことながら、早期後

半から前期に属するものの比率が著しく高くなっている。

確実な遺構の存在しない前期前半の羽状縄文系土器群が1049点で、2軒の住居跡が発見された前期後半に迫る点数となっている。これは、元荒川をはさんで対峙する黒浜貝塚群など、周囲に前期前半の貝塚群が数多く存在する本遺跡の立地を考えればさほど不自然なことではないだろう。

大形破片も含めて、関山式と思われる土器片が多数を占めており、あるいは調査区域外に同時期の遺構が存在しているかもしれない。

引用・参考文献

- 岩槻市 1983 『岩槻市史 考古資料編』 岩槻市市史編さん室
- 市川修 1982 『上南原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10集
- 市川修 1983 『塚屋・北塚屋』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団第25集
- 上田寛 1985 『貝塚山遺跡発掘調査報告書―第2地点―』 富士見市遺跡調査会
- 大塚孝司他 1989 『椿山遺跡―第3・4次調査―』 蓮田市文化財調査報告書第13集
- 大塚孝司他 1992 『帆立山遺跡』 蓮田市文化財調査報告書第18集
- 奥野麦生 1989 「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』13
- 金子直行 1990 『八木上遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第91集
- 金子直行 1991 「茅山上層式土器の再検討」『埼玉考古学論集』
- 黒坂禎二 1992 『薬師堂遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第117集
- 小宮雪晴他 1992 『宮の前遺跡―第2調査地点―』 蓮田市遺跡調査会調査報告書第13集
- 笹森健一 1981・1982 「縄文時代前期の住居と集落」『土曜考古』3・4・5
- 佐藤明生 1984 「炉穴研究ノート」『貝塚』33
- 下村克彦他 1978 『貝崎貝塚第3次調査報告』 大宮市文化財調査報告第12集
- 庄野靖寿他 1974 『関山貝塚』 埼玉県埋蔵文化財調査報告第3集
- 鈴木敏昭 1980 「諸磯b式土器の構造とその変遷（再考）」『土曜考古』2
- 鈴木敏昭 1991 「土器群の変容―たとえば、諸磯b式浮線文土器の場合―」『埼玉考古学論集』
- 田中和之 1991 『天神前遺跡』 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第17集
- 田中和之他 1992 『八幡溜遺跡―第1調査地点―』 蓮田市遺跡調査会調査報告書第16集
- 田中和之他 1992 『宮の前遺跡―第1調査地点―』 蓮田市遺跡調査会調査報告書第12集
- 寺内正明 1987 『亀の子山遺跡』 蓮田市遺跡調査会調査報告書第2集
- 寺内正明他 1991 『宿上遺跡 宿下遺跡 天神前遺跡』 蓮田市教育委員会
- 寺内正明他 1992 『山の内遺跡―第1調査地点―』 蓮田市遺跡調査会調査報告書第14集
- 寺内正明他 1994 『馬込八番遺跡―第4調査地点―』 蓮田市遺跡調査会調査報告書第22集
- 野中松夫 1981 『的場 八番 荒川附遺跡』 蓮田市文化財調査報告書第2集
- 野中松夫 1983 『江ヶ崎貝塚 御殿場遺跡 荒川附遺跡』 蓮田市文化財調査報告書第5集
- 橋本勉 1984 『久台』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団第36集
- 橋本勉 1985 『ささら（II）』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団第47集
- 橋本勉 1990 『雅楽谷遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団第93集
- 藤原高志他 1983 『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団第24集
- 宮崎朝雄 1980 『ト伝』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第25集
- 百瀬新治 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―原村その5 昭和52・53・54年度―阿久遺跡』 長野県教育委員会
- 宮内正勝他 1976 『丸ヶ崎遺跡発掘調査報告』 大宮市文化財調査報告第10集
- 西川博孝 1977 「三戸式土器の研究」『古代探叢』

写真図版



堂山公園・久台遺跡航空写真（南西から）



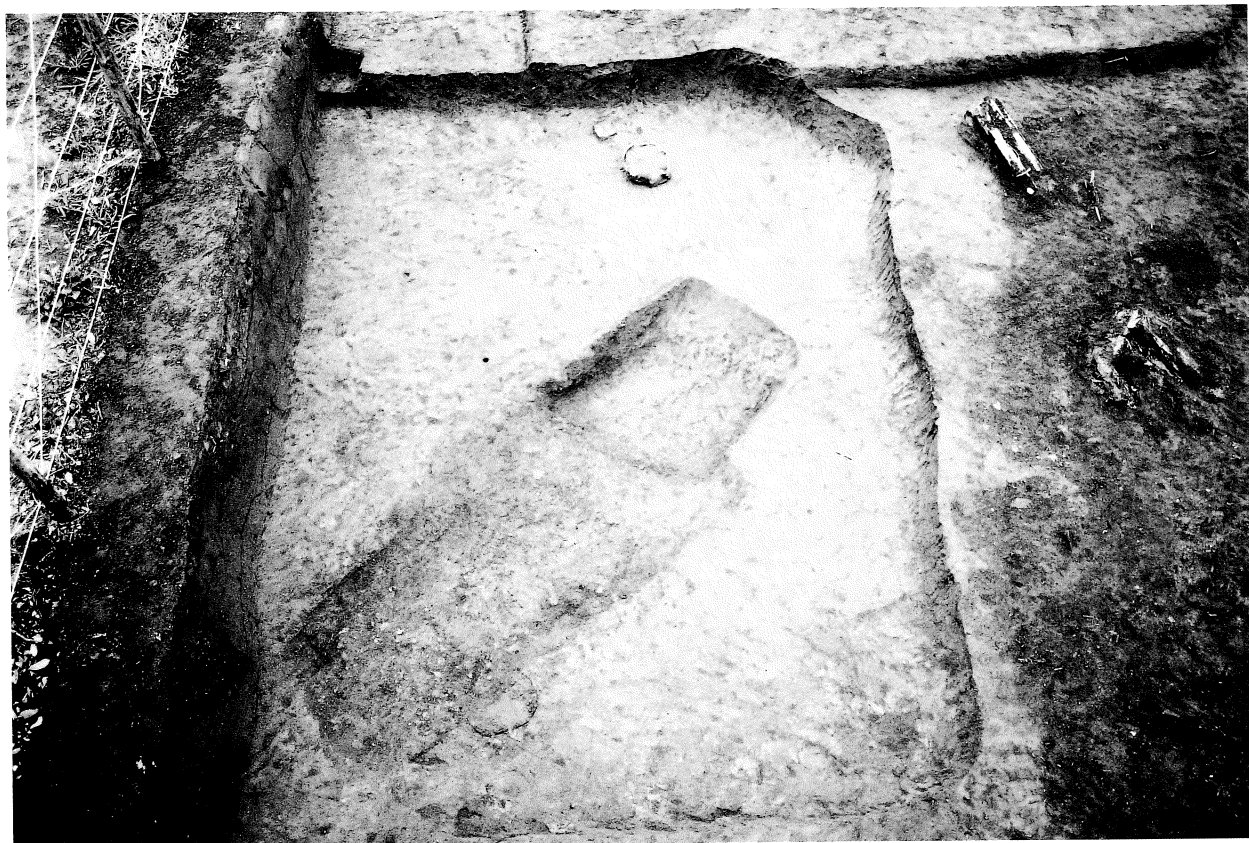
堂山公園・久台遺跡航空写真（南東から）



堂山公園遺跡航空写真（西から）



堂山公園遺跡航空写真（南から）



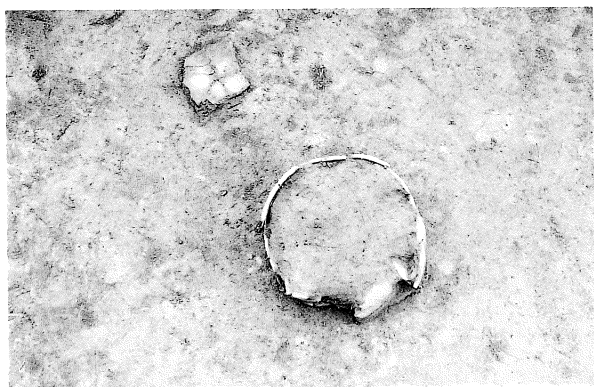
第Ⅰ号住居跡



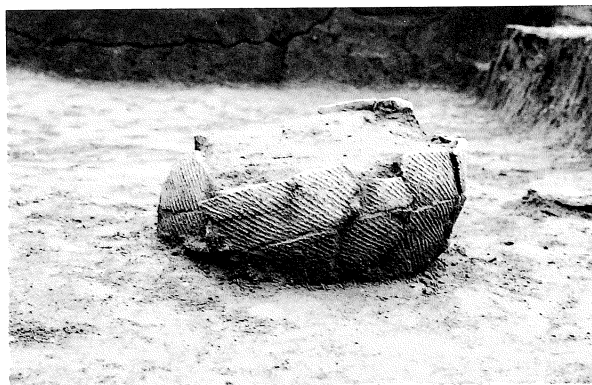
第Ⅰ号住居跡遺物出土状況



第Ⅰ号住居跡炉跡



第Ⅰ号住居跡遺物出土状況



第Ⅰ号住居跡遺物出土状況



第 2 号住居跡



第 6 号土坑



第 9 号土坑



第 2 号炉穴



第 3 号炉穴



第 5 号炉穴



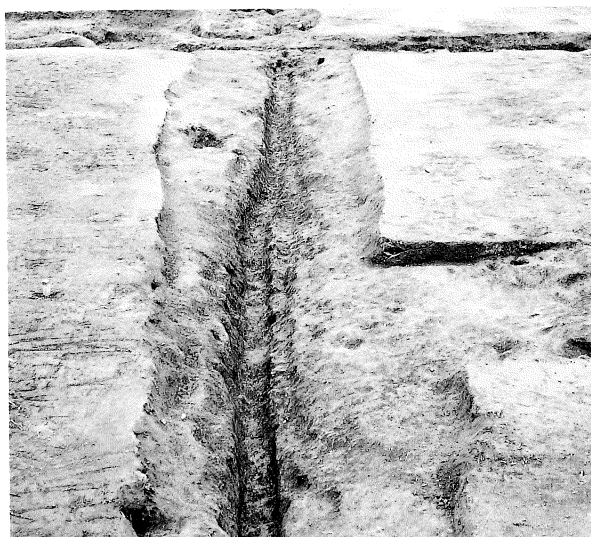
第3号土坑



第4号土坑



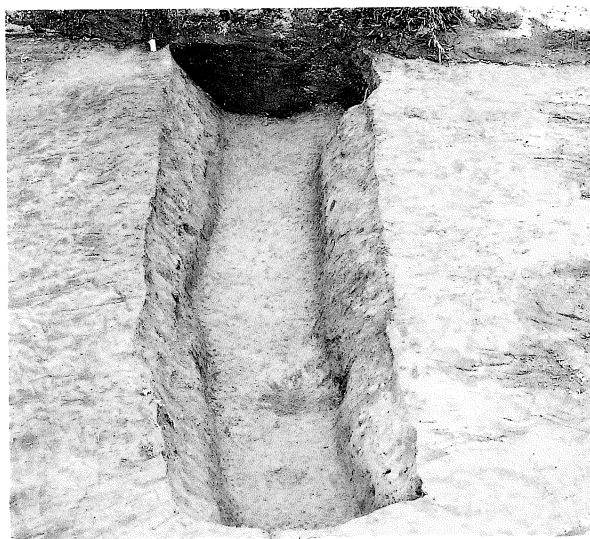
第1～4号溝（東から）



第1号溝（北から）



第1～4号溝（西から）



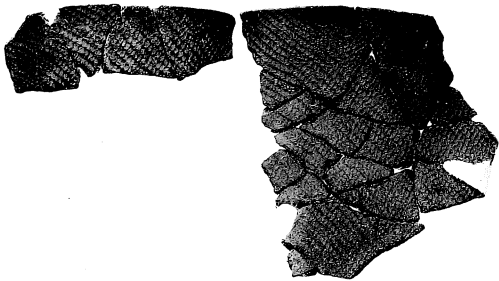
第5号溝



第 1 号住居跡出土土器



第 2 号住居跡出土土器



第 2 号住居跡出土土器



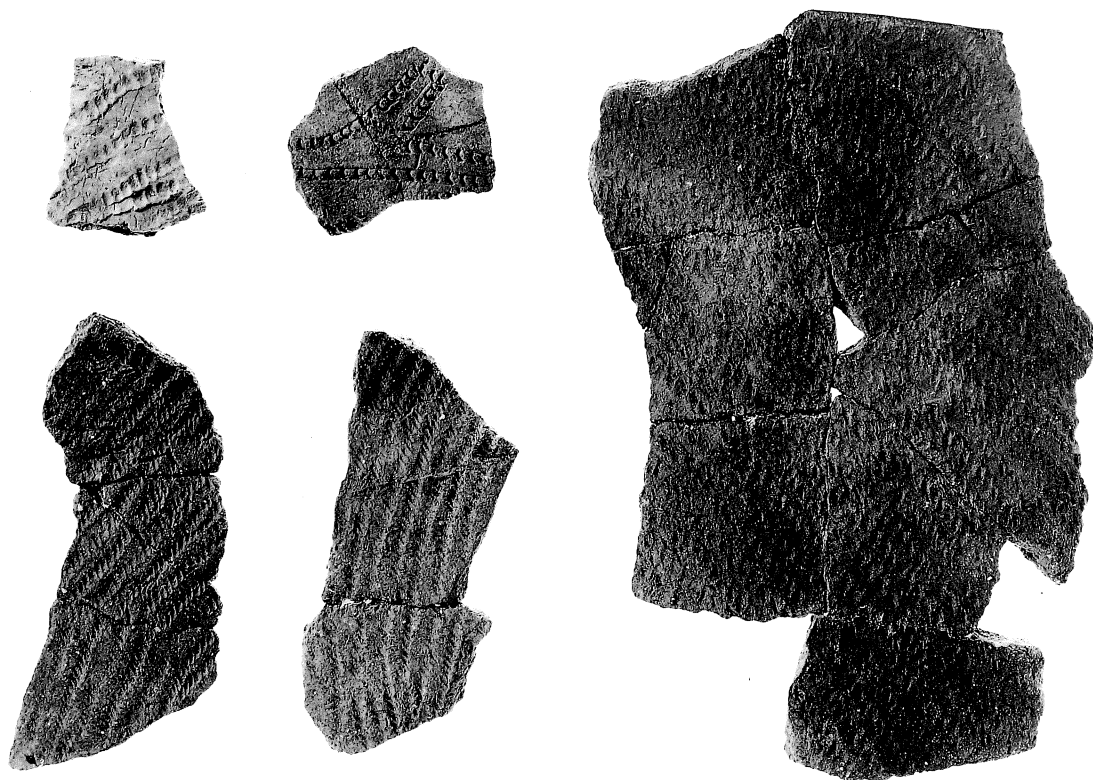
第 2 号住居跡出土土器



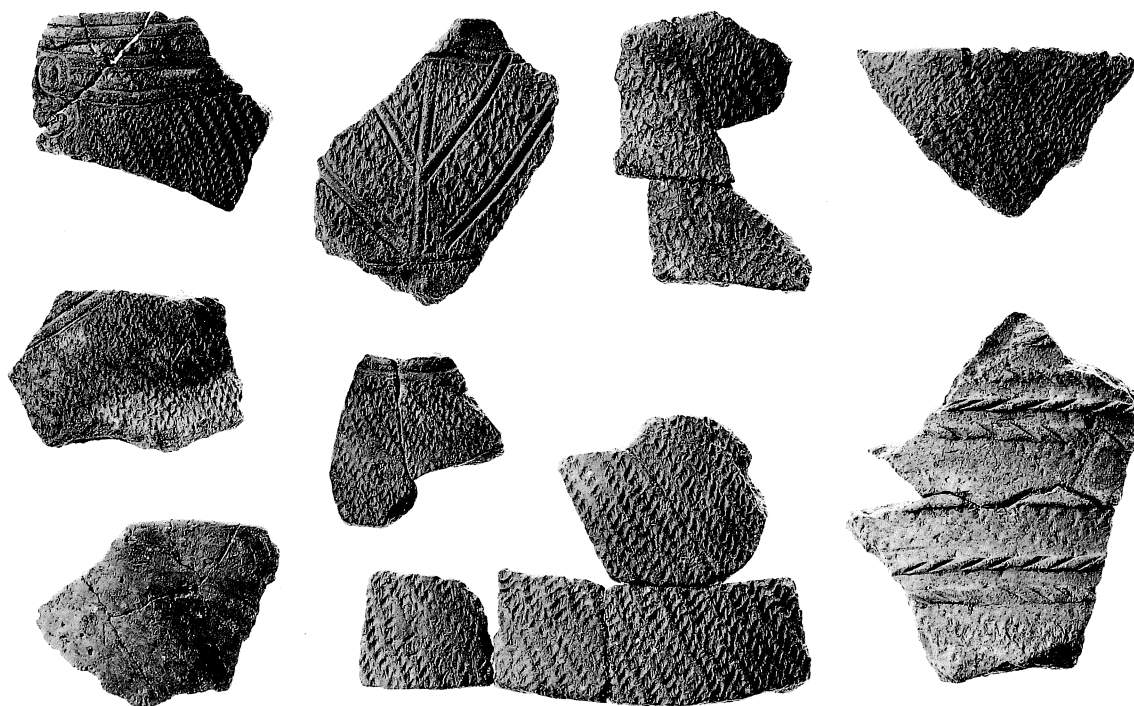
遺構外出土土器



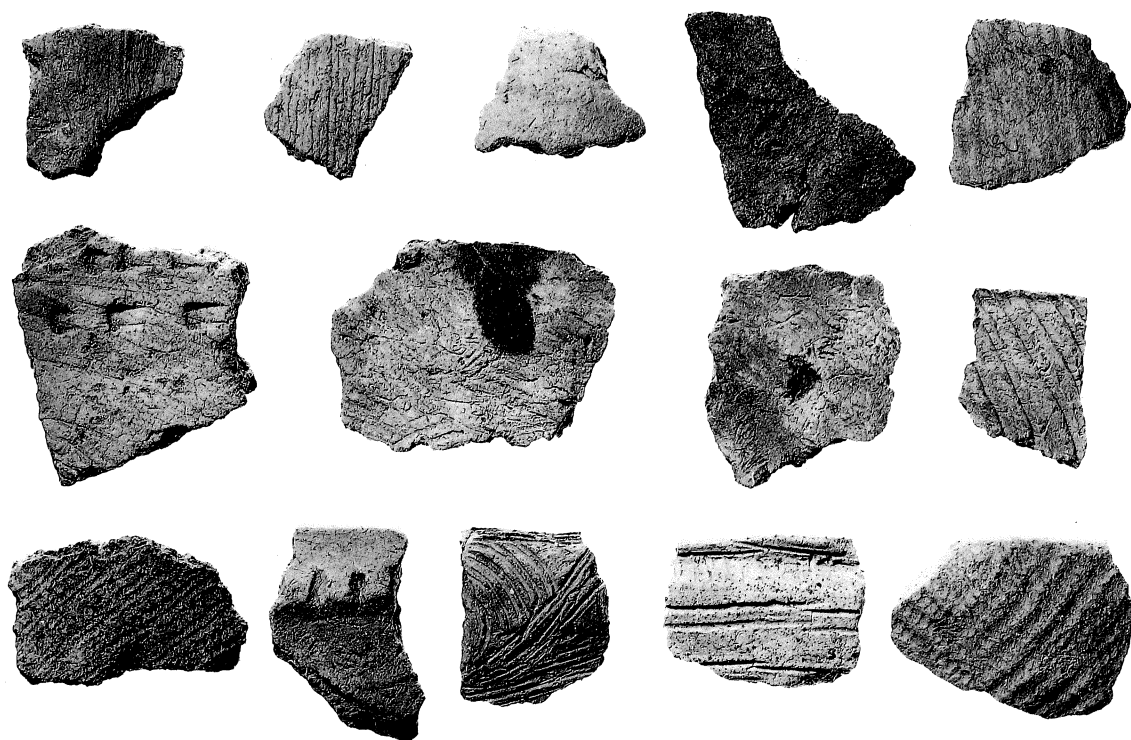
遺構外出土土器



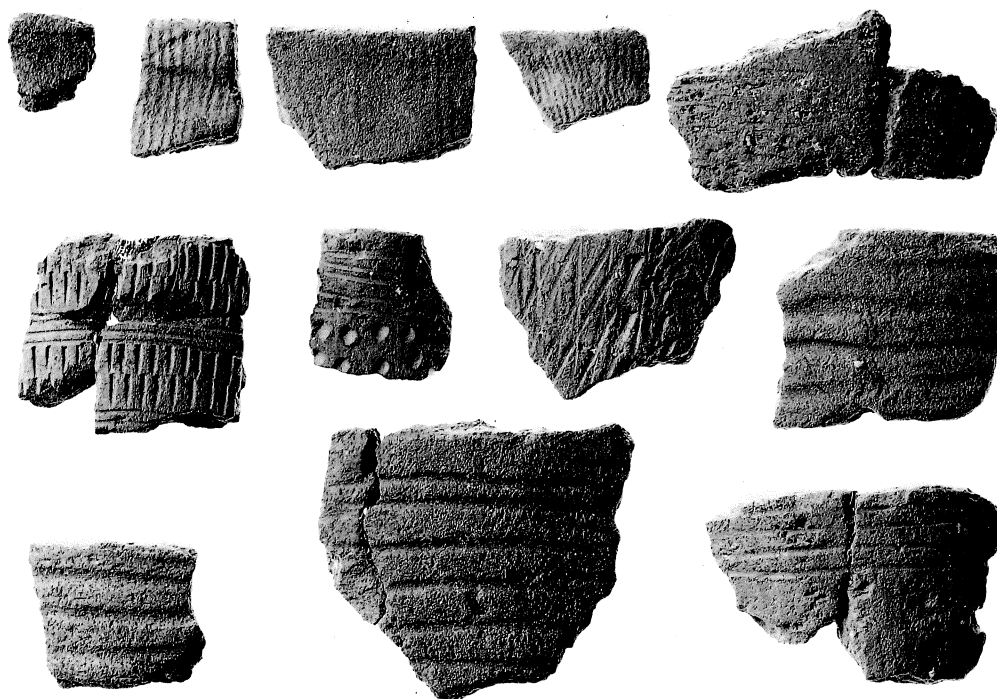
第1号住居跡出土土器



第2号住居跡出土土器



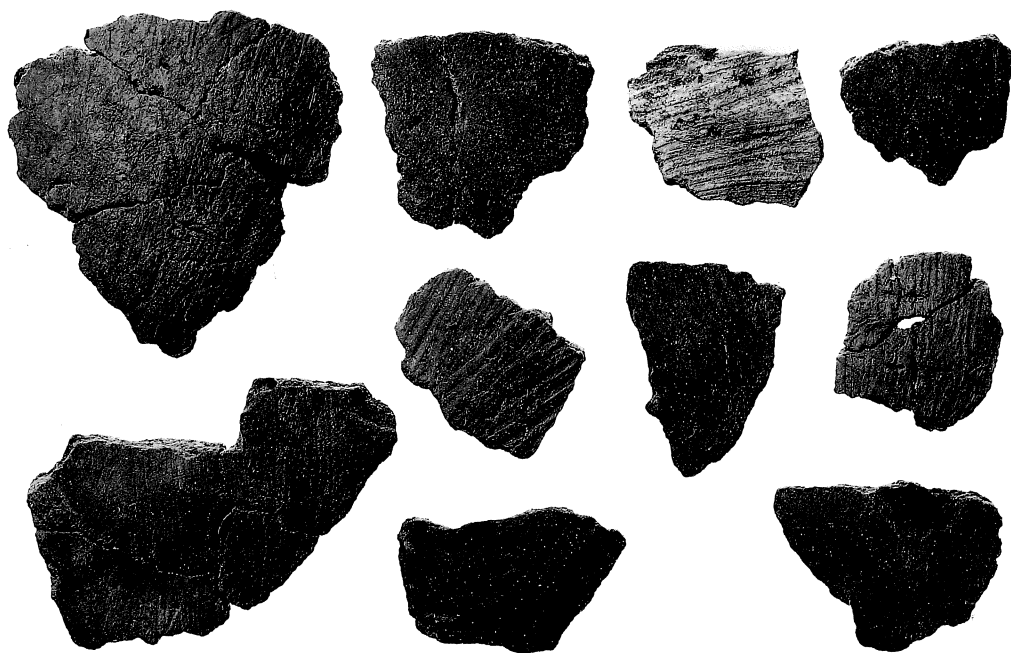
炉穴·土坑出土土器



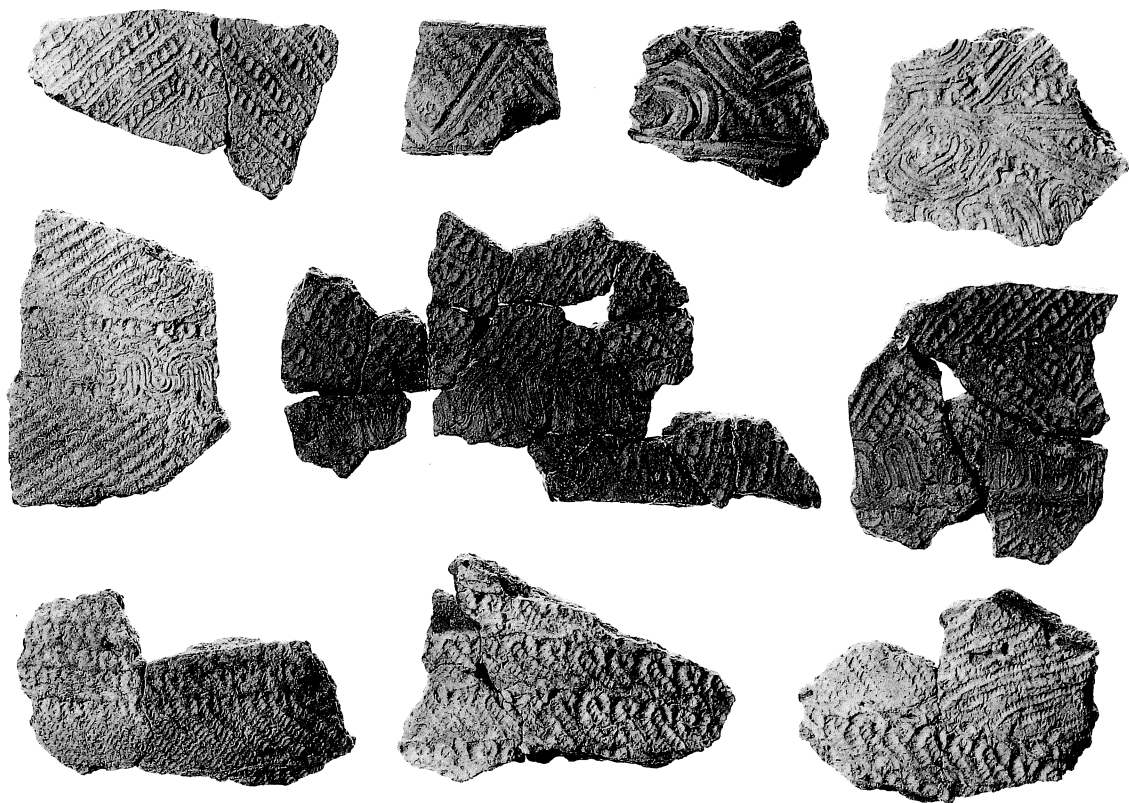
遺構外出土土器



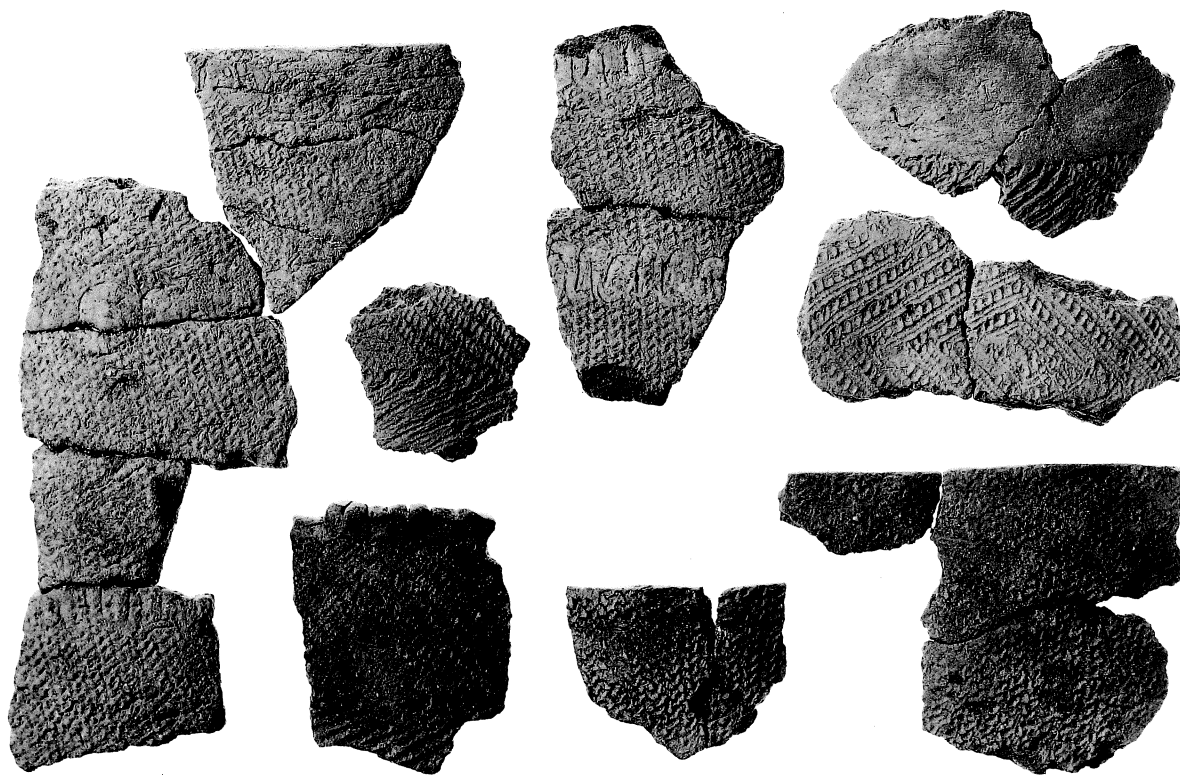
遺構外出土土器



遺構外出土土器



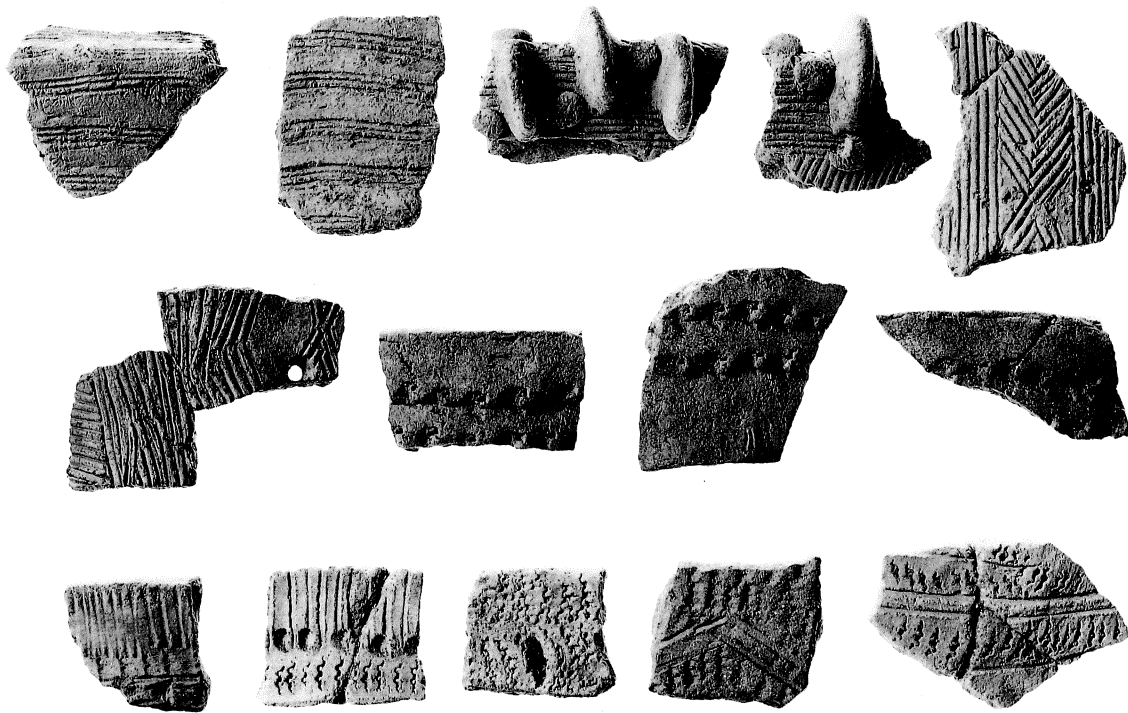
遺構外出土土器



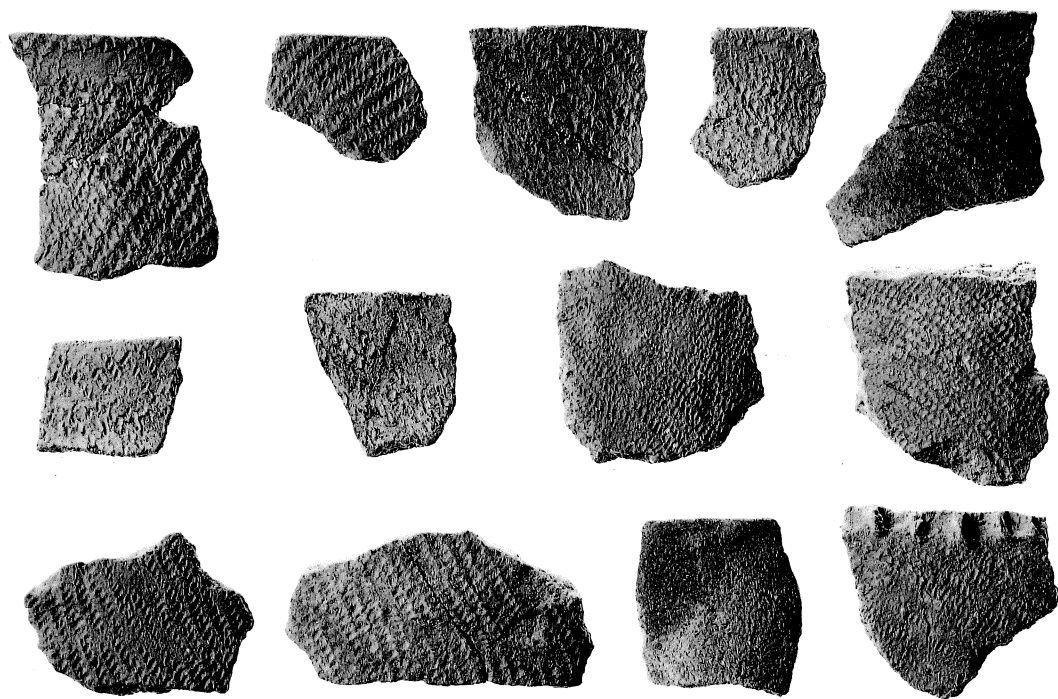
遺構外出土土器



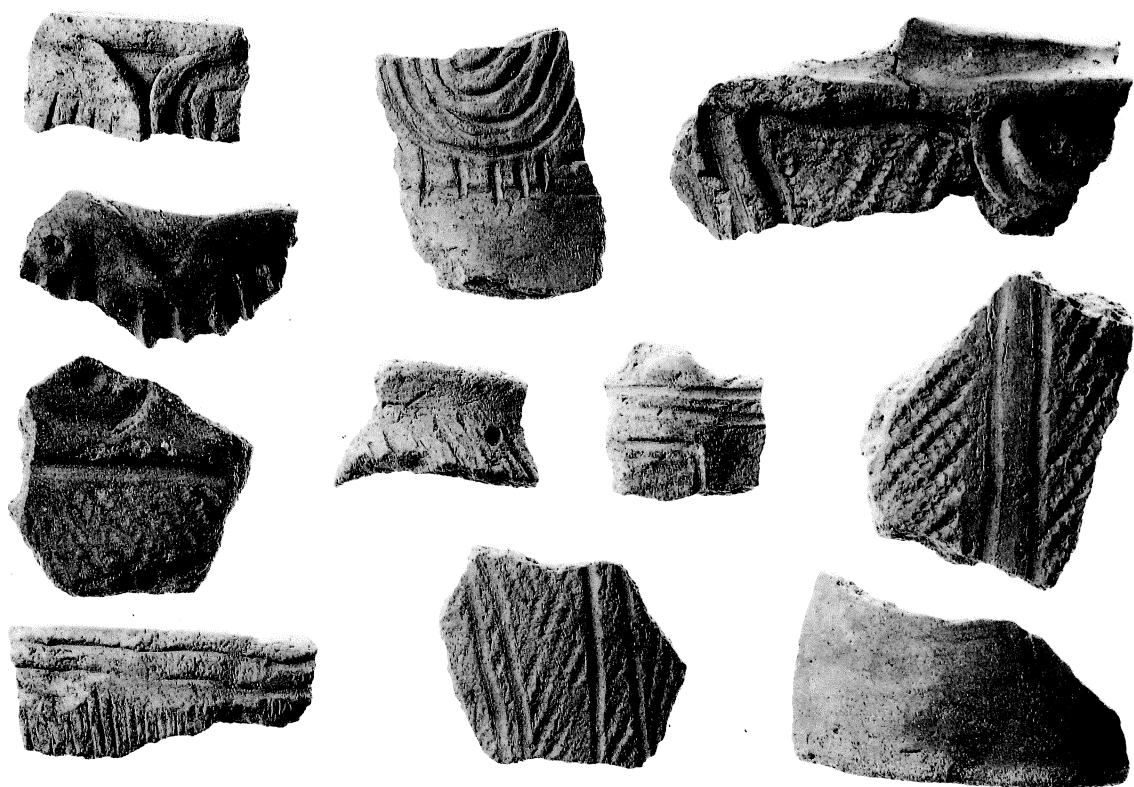
遺構外出土土器



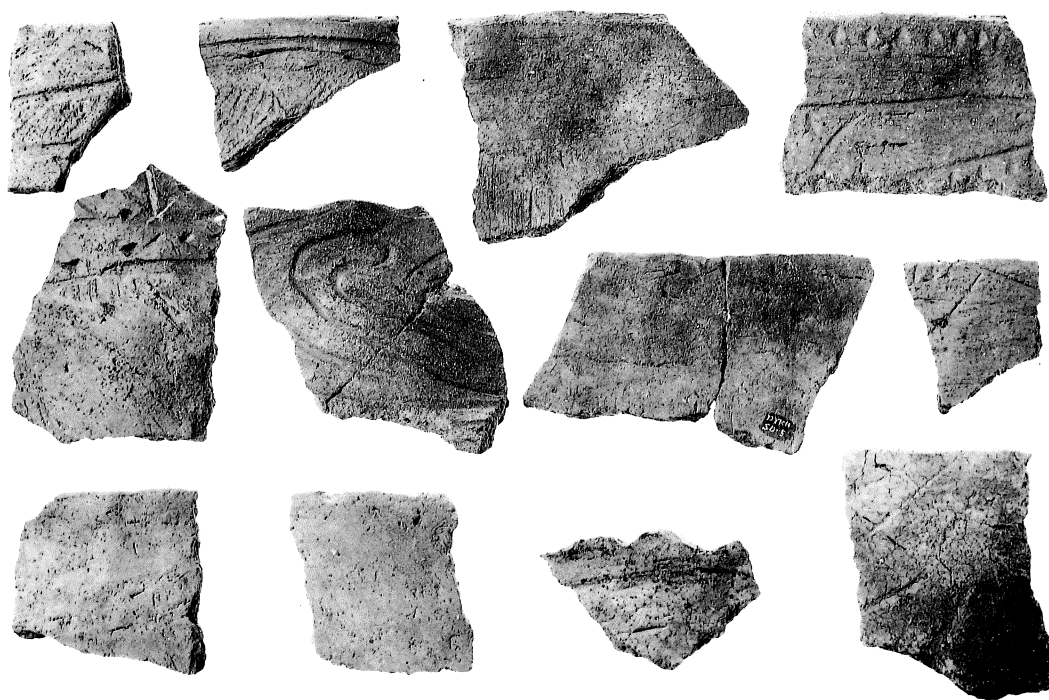
遺構外出土土器



遺構外出土土器



遺構外出土土器



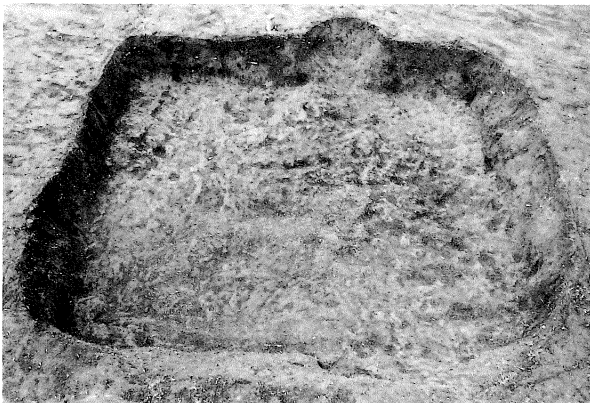
遺構外出土土器



遺構外出土土器



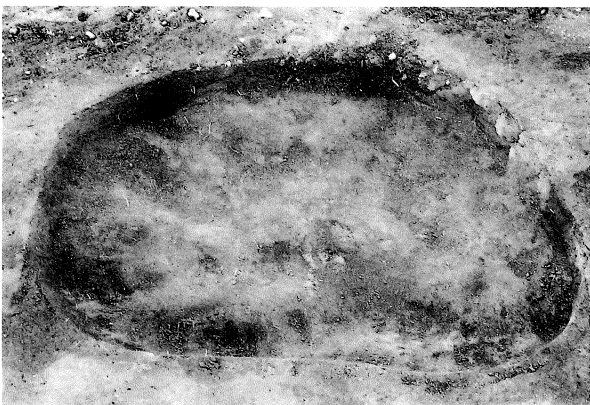
久台遺跡発掘区全景



第17号住居跡



第28号住居跡状遺構



第6号土壇



第8・9号土壇



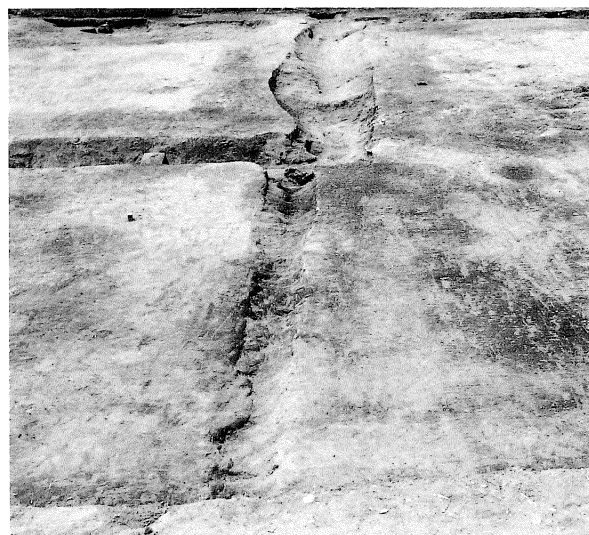
第61号土坑



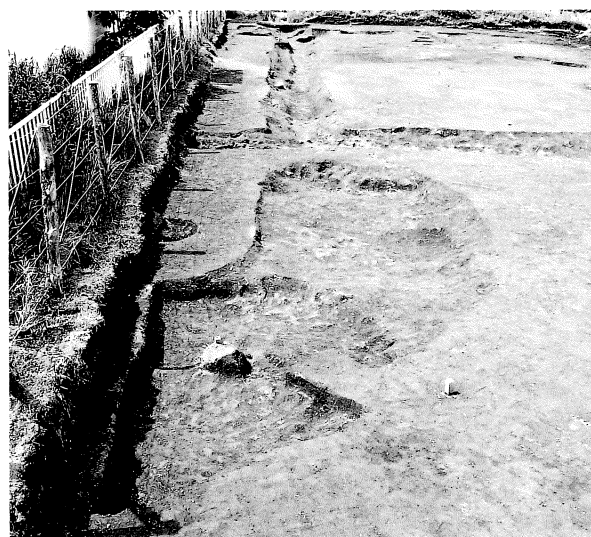
Ⅲ区第5号溝



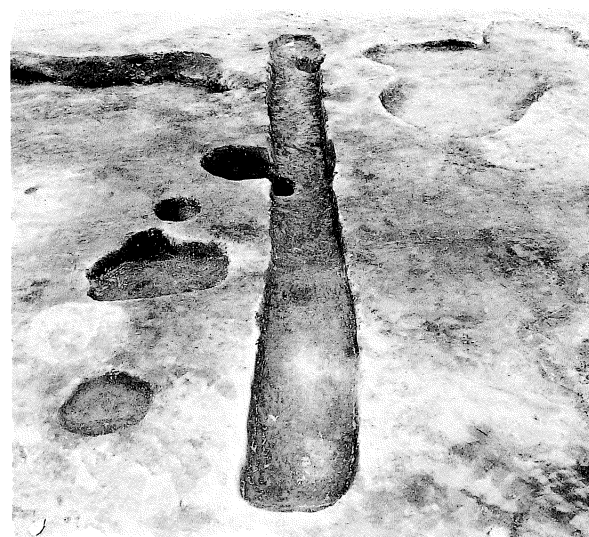
Ⅲ区第3号溝



Ⅲ区第3・5号溝



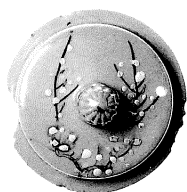
Ⅲ区第6号溝



Ⅲ区第7号溝



縄文時代の遺物



近世以降の遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	どうやまこうえん／きゅうだい							
書 名	堂山公園／久台							
副 書 名	国道122号線バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次	－VI－							
シ リ ー ズ 名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第168集							
編 著 者 名	渡辺清志 新屋雅明							
編 集 機 関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所 在 地	〒369－01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪字船木884 T E L 0493－39－3955							
発 行 年 月 日	西暦1995（平成 7 ）年10月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
どうやまこうえん いせき 堂山公園遺跡	さいたまけんはすだ し かみ 埼玉県蓮田市上 2丁目29番地他	82	079	35°59'00"	139°39'34"	19940401～ 19940731	2,500	道路建設
きゅうだい いせき 久台遺跡	さいたまけんはすだ しひがし 埼玉県蓮田市東 2丁目4104-1番地 他	82	010	35°58'58"	139°39'35"	19940401～ 19940731	800	道路建設
所収遺跡名	種別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
堂山公園遺跡	集落跡	縄文時代早期		炉穴	7	縄文土器		
		前期		竪穴住居跡	2	石器		
		中期		土坑	7	陶磁器		
		後期						
		晩期						
		近世		土坑	4			
			溝	5				
			柱穴群	1				
久台遺跡	集落跡	縄文時代中期		土坑	1	縄文土器		
		晩期				石器		
		平安時代		住居跡	1	陶磁器		
		近世		土坑	5			
			溝	4				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第168集

蓮田市

堂山公園／久台

国道122号線バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告

— VI —

平成 7 年10月20日 印刷

平成 7 年10月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369－01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

電話0493－39－3955

印刷／望月印刷株式会社